

11カ国の騎兵たちの転
生先は…馬がない平
和なウマ娘の世界

素人小説書き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神「馬と人材下さい」

神「いいよ」

：

：

神「集まったよ」

神「よし、転生ついでに試練の受けていけ」

11人「なんで？」

そんなお話。

h
t
t
p
:
/
s
y
o
s
e
t
.
o
r
g
/
u
s
e
r
/
3
0
6
9
0
5
/

目次

第1話	天国に招待されましたのは11	1
名の騎兵です。		1
第2話	興味ツ!!	116
第3話	自由気ままな兵士達!	131
第4話	グランドルメの歴史を持つ白き	
馬と勇ましいスペイン帝国の歴史を持つ		
馬と、不安定な負けず嫌いのウマ娘と個		
性豊かなウマ娘		150
第5話	選択ツ!! 君達の職業!!	195
第6話	Don't lose sig	
ht of everything i		
第7話	そのイギリス人危険につき (猫	
と和解せよ…)		243
第8話	汝、皇帝の威信を見よ…恐れ慄	
け、我は雷帝の子ツアレーヴィイチである		
第9話	ばふう	260
第10話	フンギャロ!!	274
第11話	スペインの太陽で育った人が	291
作ったパエリアをどうぞ		310
n your madness. 己の狂		
気にすべてを見失うな。		218

第1話 天国に招待されましたのは11名の騎兵です。

天国

そこは、死者が必ず訪れる場所である。

そんな天国に、ある四角い部屋で地球を見ている者がいた。

神「ふく… 腰が痛いもんじゃなあ…」 トントン…

おじいちゃん口調の青年そう言っ腰を叩く。

神「全く、最近の世界は戦争ばかりじゃのお… もっと、平和になれんのか!…

あつ、そう言えば、指示したのワシじゃったわ、わしってばおつちよこちよいじやな☆」

そんな腹が立つことを言っていると、女神の格好をした人がは入ってくる。

ガチャ…

神「おや? お主は… 最近できた新しい世界の女神じゃな?… 確かえくと…」

ダーレーアラビアン「ダーレーアラビアンです」

神「おお、そうじゃそうじゃダレビアンじゃ!」

ダーレーアラビアン「舐めてんのかこの爺」

ダーレーアラビアンは神の冗談にきつい一言を言う。

神「冗談じゃよw… して、なにようかな？ダーレーアラビアン？」

神は、そう言つて部屋ソファに深く座つてダーレーアラビアンのお話を聞く。

ダーレーアラビアン「… 実は、私の世界である重要な生物がいなかったのです」

神「ほうほう、それは？」

ダーレーアラビアン「馬です」

神「馬…：… 馬つてあの四足で走る馬？」

ダーレーアラビアン「はい」

神は頭を抱えながらもダーレーアラビアンに聞く。

神「ふむ…：… それで？その馬をどうしたい？」

神は、ダーレーアラビアンの顔を見ながら聞く。

ダーレーアラビアン「こちらの世界で繁殖させたいのです」

神「…：… そうか、理由は…：…」

神が聞こうとするとダーレーアラビアンは、一言

ダーレーアラビアン「こちらの事情ですので、あまり聞かないで下さい」

神「ハイハイ、分かったわい…：… そんじゃ少し待つてろ」スツ…：…

神は、めんどくさそうに地球に手を置き目を瞑つて何かを唱える。

神「…：… よし、後は待つのみじゃ」

ダーレーアラビアン「… いったい何を？」

神「少し面白いことをな、それじゃあ、最初の転生候補を待つとするかのく… よつこいしよつと…」

神は、ソファに座る。

ダーレーアラビアン「…」

神「… うくん少し暇じゃからチエスやらんか？」パチン！

神は指パチンでチエスを召喚する。

ダーレーアラビアン「分かりました」

ダーレーアラビアンは、暇な神の遊びに付き合うことにした…

…

…

1938年2月7日

スペイン

テリエル北部 テリエル守備隊

そこに、一人の騎兵がいた。

レイ「.:」

彼の名は、レイ マクルト テリエル守備隊の一人だ。

騎兵「H a l l e g a d o l a o r d e n d e a t a q u e d e l c
a p i t n R a y M c L u t

〔マクルト隊長、攻撃命令が来ました。〕

レイ「A h ! . : . s .

〔ああ、分かっている〕

彼は、愛馬のラーカルに乗りながら敵陣地を見ていた。

レイ「.:」

レイは黙り込んで敵陣地を見る。

騎兵「? ? . Q u . p a s . C a p i t n ?

〔どうしました？隊長？〕

レイ「N o , n a d a . : . t o d o s t o m e n l a e s p a d a

!!

「いや、何でもない…… 全員剣を取れ!!」シャキン!!

レイの号令で後ろにいた騎兵大隊全員が剣を出す。

…そして、レイは騎兵大隊に言葉を掛ける。

レイ「Chicos!! A partir de ahora, cargaremos contra la base enemiga! El éxito o el fracaso de este ataque determinará el resultado de la guerra civil…
Hasta ahora, el nfasis estaba en la vida humana, pero esta vez aquellos que no puedan mantenerse al día serán cortados.
… hay alguien que quiera escapar?

〔諸君!!これより我々は敵陣地へ突撃する!この攻撃が成功か失敗かで、内戦の勝敗が決まる… 今までは人命重視だったが今回は付いて行けない者は切り捨てる。〕

… 逃げたい奴はいないか?」

騎兵「…」

誰も、怯えず逃げずただただレイの突撃合図を待っていた。

レイ「… Tengo suerte de conocerlos.

「…君達に会えて私は幸運だよ」スツ…

レイはそう言つて剣をゆつくり上げる…そして、大声で叫ぶ。

レイ「Toda la caballería!! Luce el poder
del sol español con el rojo!! Asalto!!

〔全騎兵!!スペインの太陽の力を赤共に見せつけよ!!突撃!!〕「バシッ!!

レイは、片手で手綱を叩く。

ラカール「ヒヒーン!!」パカラッ!!パカラッ!!

そして、レイは剣を降ろしてそのまま騎兵大隊と共に突撃する。

敵兵士「… Mmm? … ataque enemigo!! !!
Es

un ataque enemigo

「…ん?… 敵襲!!! 敵襲だあああ!!!」

敵は兵士は大声をあげる。

ソ連下士官「Todo unido a la metralladora !!
Date prisas !! El oponente es solo un
objetivo !!

{:.: 全員機銃に付け!!急げ!!相手はただの的だ!!}

カラカラカラ:.: ガシャ!!ガチャ!! ガツ:.: ガキン!!ガチャ!ガコン!

敵兵士は、塹壕にある機関銃やボルトアクションライフルに弾を込める。

敵兵士「Listo !!

{準備よし!!}

スツ:.:

敵兵士は、照準を合わせる。

ソ連下士官「Todavía !! No desapare todavá

! Atrá firmemente y luego mata!

{まだだ!!まだ撃つなよ!しっかり引き付けてから殺せ!!}

敵兵士「:.:」

ドドドドドドドドドド

敵兵士「:.: De nuevo!!

{:.: まだですか!!}

レイの騎兵大隊は、砂煙を上げ静かに……だが、確実に揺れを起こしながら敵塹壕に近づいていた。

ソ連下士官「……T o d a v ・ a

（……まだまだ）ブルブル……

ソ連下士官は、拳銃を持つ手が震えていた。

ソ連下士官「……（なぜだ？何故スペインの騎兵が市街地から出たんだ？分からん……相手の思考が分からない……ま、まさか!?南部がやられたのか!?くそっ!!いったいどうすれば……）」

ソ連下士官は、賢かった今不利な状況だと気づくほど。

しかし、賢すぎたゆえに今の状況を打開できる方法が全く出てこなかったのだ。

そうして、頭を抱えた次の瞬間

バン!!

ソ連下士官「!？」

敵兵士「a…… a a……」バタツ……

機関銃を狙っていた兵士が、銃弾を食らって倒れていた。

ソ連下士官「……」サツ……

向こうを見ると、騎兵数人がレバーアクションライフルを片手でねらって撃つてい

た。

ソ連下士官「: : dis para !! dis para y mata a tu
o p o n e n t e !!

「: : 撃て!!相手を撃ち殺せ!!」

敵兵士「Dis para !! Dis para y mata : : Gua !!

「撃て!!殺ぐあつ!!」バアン!!

また一人ボルトアクションライフルが倒れる。

バアン!!

敵兵士「Gaa !!

「ギヤア!!」

機銃手も倒れる。

バアン!!

敵兵士「Gua !!

「ぐあつ!!」

また一人倒れる。

バアン!!

敵兵士「Guhu : :

〔グフツ…〕

また一人

バアン!!

敵兵士「Guo…

〔グオツ…〕

また… 一人倒れる。

まるで魔法のように敵兵士に弾を当てる。

ソ連下士官「Qu diabolos : No creoque lo go

l peemos en absoluto : Pero qu pasa :

Mal dita sea !! Prepara tu mortero !!

（い、一体どうゆうことだ… 我々が攻撃しても全く当たらない… ど、どうゆう事

だ…… くそ!! 迫撃砲を撃て!!」

ソ連下士官は塹壕内で待機していた迫撃砲手に命令する。

敵迫撃砲手「disparo!!

〔発射!!〕 スツ… ガアン!!

ヒユウウウウウウ…

バアン!!

レイ「……
H o l a !!

〔ハイヤ!!〕バシツ!!

ラカール「ブルル!!」パカラツ!!パカラツ!!

レイは、迫撃砲が飛んできても怯まず馬を進ませる。

一つの塊となつている騎兵大隊は迫撃砲が着弾すると同時に横に広がる。

横に広がつた騎兵はただ敵を倒すために一目散に進む。

その中には、入つたばかりの騎兵がいた……彼らは、少し怯えていた。

そんなレイは、言葉を掛ける。

レイ「No t e n g a s m i e d o !!
A v a n z a s i n m i e d

o a l a m u e r t e !!

〔怯えるな!死を恐れず進め!〕

レイは、そう言つて励ました瞬間

ヒユウウウウウ……

バアン!!

レイ「G u a a a a a a a a a a a a a a !
!!

〔グアアアアアア!!〕

運が悪かったのか敵迫撃砲は至近弾で吹っ飛ばされる。

騎兵「Capit・n!!」

〔隊長!!〕

騎兵の一人が戻ろうとした瞬間レイは一言。

レイ「Note preoccupes …」

〔構うな…置いていけ…〕

レイは、意識があるうちに命令する。

騎兵「Hm m … Definitivamente vendr・a a y

udar !!

〔クツ…必ず助けに来ます!!ハイヤ!!〕バシツ!!

馬「ヒヒーン!!」

騎兵は、そのままレイを置いて行くのだった…

そして、レイは意識が朦朧としながらも血を流して倒れている相棒に寄り添う。

レイ「Uh … Rakar … Gracia hastata hora

… Eres … el mejor … mi amigo … oh

…

〔ウツ…ラーカル…今までありがとう…お前は…最高の…相棒

だ…… ああ……」

レイは、そのまま瞼を閉じるのだった……

天国

神「ダーレーアラビアン長いのお……」

神は、独り言をぼつりと言う。

レイ「…… ん？あれ？生きてる？」ムクツ……

そんな言葉が聞こえたのかレイは目を開けて、体を起こす。

レイ「…… ラーカルは？どこだラーカル!!」

レイは、大声で叫ぶ。

そんな大声をあげるレイに、神は耳をふさぐ。

神「うるさいぞ!!もう少し静かにしてくれんか!」

レイ「!?だ、誰だお前!!」カチャ……

レイは、振り返って剣を握る。

神「おいおい、そう焦るなレイ君…… 後、君の相棒はそっちにいるぞい」スツ……

そう言いながらいつの間にか大きくなっていた部屋の隅にいるレイの相棒ラーカルに指を指す。

レイ「ラーカル!!良かった…」ダキッ!

ラーカル「ヒヒン!」

レイは、うれしさの余り抱き着く。

そんなうれしさの余興に浸っているとレイはあることを神に聞く。

レイ「…そう言えばここはどこですか?見たところスペインではなさそうですね…後、貴方達は誰ですか?」

神「うくん…君に説明するのもいいけど少し待ってくれないか?実はもうすぐ君と同じように新しい人が来るんだ、いちいち話すのめんどいから人数が集まるまでわしとチエスし手暇を潰さないか?」

レイ「ハ、ハア…まあ…いいですが…」

困惑しながらも椅子に座る。

神「さて、君はどれだけ強いかな?」

神は、笑いながらレイとチエスをするのだった…

∴
∴
∴

1939年9月19日

ポーランド

ブズラ川付近

ヴォウイン騎兵旅団

モシチ「Czy przyszedł e ∴ elazne duchy

〔来たか∴ 鉄の化け共め〕

双眼鏡を覗いている年老いた老兵がナチス機甲師団が接近しているのを確認する。

そして、モシチは何かを決意して後ろにいる仲間に言葉をかける。

モシチ「C ∴ wy, ten feniksowy kraj raz id

zie spa ∴, pojedziecie nam a ł ∴ wycieczk ∴

po dyscyplinie ∴ elaznego Wilka przed

p ∴ j ∴ ciem spa ∴.

〔さて∴ 諸君この不死鳥の国は一旦眠りに入る、諸君は、その眠りに入る前に少し鉄の

狼を少し懲らしめてから少し旅行しに行くぞ。」

そんなモシチの言葉に一人の教え子が質問する。

騎兵「G d z i e j e s t k r a j d o p o d r . y I n s t r u k t
o r M o s h i c h i ?

〔旅行する国はどこですか？モシチ教官？〕

その質問にモシチは答える。

モシチ「A c h : : a l b o A m e r y k a a l b o A n g l i a

〔あー…アメリカかイギリスのどちらかじゃな〕

そんなモシチの答えにみんなは喜ぶのもつかの間に、何かが聞こえる。

キイイイイイン…

仲間の一人が叫ぶ。

騎兵「N a d c h o d z i b o m b a r d o w a n i e w r o g a !!

〔敵砲撃が来るぞ!!〕

パアン!!パアン!!パアン!!

モシチ「W o g . l e . : : d l a t e g o n i e n a w i d z n a z i s
t . w . : : N i e t r z y m a m t a k m o c n o g ł o w y , a t a k
p r z e c i w n i k a n i e t r a f i a , t o t y l k o g r o b

a.

「全く：：これだからナチ共は嫌いなんじや：：そんなに頭を抱えるでないわ相手の攻撃は当たらん、ただの威嚇じや。」

モシチは、ウマから降りて伏せている教え子にそう言いながらあたりを見回す。

モシチ「：： C・☒, w s z y s c y s ☒ g o t o w i d o a t a k u

！
！！

「：：さて、全員攻撃準備！！」

モシチの命令に教え子が全員驚愕しながらも準備する。

騎兵「T A k ! ? ? C h y b a ☒ a r t u j e s z ! ? ? A t a k u j e s z

w t a k i m b o m b a r d o w a n i u ! ? I n s t r u k t o r M o s h

i c h i ! ? ?

「ええ！：うそでしょ！？こんな砲撃の中で攻撃をするんですか！？モシチ教官！？」ガチャ！！

ガコン！！ギユツ！！カラン：：

仲間の言う通り周りはまだ砲撃されていた。

そんな状態でも、モシチは言う。

モシチ「S z c z e r z e m ・ w i ☒ c , w r o g i e c z o ł g i z b l

i ☒ a j ☒ s i ☒ d o n a s , w i ☒ c t e r a z j e s t j e d y n

y c z a s, k i e d y m o e m y w a l c z y

「正直もう敵の戦車がこつちに近づいてきているせいで、もう反撃できるは今しかないんじゃない」

そう言われ、仲間たちは双眼鏡で見るとナチスの戦車部隊がもう味方の最終防衛ラインまで迫っていた。

最終防衛ラインにいる味方はナチスの戦車部隊に全く歯が立たず塹壕でうずくまっているだけだった。

そして、モシチは仲間と言う。

モシチ「.:. C.□, c z y w s z y s c y j e s t e □ c i e g o t o

w i p o m . c s w o i m p r z y j a c i o ł o m ? J e □ l i m o □ e

s z, p . j d □ !!

「.:. さて、みんな仲間を助ける準備は出来たか？できたなら行くぞ!!ハイヤ!!」バシツ!!

モース「ヒーン!!」パカラツ!!パカラツ!!

モシチは手綱を叩き仲間と一緒にナチスの戦車部隊に攻撃を開始する。

そして、モシチは馬を走らせ砲撃の轟音の中で大声で叫ぶ。

モシチ「C h w a ł a P o l s c e !!

「……くそ……すまない教え子達よ……あの世で安らかに眠ってくれ……」
スツ……

モシチは、自分の命令で次々と死んでいく教え子に謝罪をしながらも火炎瓶を片手に持つ。

そして、モシチは戦車の横を通りそして、後ろにあるエンジンに向けて火炎瓶を投げる。

ブシュー……

モシチが投げた火炎瓶で敵戦車はエンジンから白い煙を上げて動かなくなる。

モシチ「…… N a s t y p n y !!」

「……次だ!!」カチツ……

モシチは、そう言いながら腰に付いていたグレネードを持ちながら壊れた戦車の後方にいた戦車に狙いを定める。

そして、モシチはグレネードのピンを外し狙いを定める。

モシチ「H u h !!」

「フツ!!」ブウン!!

モシチは、グレネードをまた戦車のエンジンに向かって投げた。

ポオン!!

グレネードは、エンジンがあるところに落ちた瞬間爆発を起こす。

そして、また敵戦車はエンジンが燃えながら止まる。

そして、モシチは次の目標を定めるために回りを見渡すが…

モシチ「… c z y n i e m a n i k o g o ?

「… 誰もいないのか？」

周りを見渡すと馬と一緒に倒れている教え子達と、戦車から焼け焦げた死体や撃たれて倒れているナチ共が私の周りに散らばっていた。

モシチ「…」

モシチは、周りの光景に固まっていると…

ウウウウウウウウウウウウウウウ

モシチは、この大きな音が聞こえる方を向く。

モシチ「T o c h o l e r n y d w i k m i e r c i : :

「忌々しい死の音だ…」

モシチの最後の光景は黒い巨大な爆撃機が500kg爆弾を抱えてモシチに向かって急降下して来ている光景だった…

モシチ「… p r z e p r a s z a m M o r s e , a n a k o c u t a

k
: :

「… すまんなモースこんな最後で…」 サスサス…

モシチは、愛馬の最後の死に謝る。

モース「ヒヒン!!ブルル…」

モースは、心配すんと言わんばかりに顔を動かしたりする。

そして…

バアン!!

モシチのところに大爆発が起きるのだった…

天国

神「ほい、チエツクメイト」

レイ「うっ… 負けた…」

モシチ「… 何処じゃここ?」

モシチは、誰かの声が聞こえ目を開けるとそこには、スペイン騎兵の服を着たものが青年とチエスしている光景だった。

レイ「… えっ?! い、いつの間に!？」

レイは、急に馬に乗って現れたモシチに驚いて椅子から立ち上がる。

神「待って待て、落ち着かんかいレイ君… 全く… どうも、モシチさん」

モシチ「あ?… ああ… どうも」

モシチは、神が軽く挨拶したためモシチは動揺しながらも挨拶する。

そして、モシチが何か言おうとした瞬間神が言う。

神「何、言わずともわかるここがどこで私が誰なのか知りたいのじやろ?」

モシチ「…」

凶星だったのか黙ってしまふ。

神「ワハハ! わしは、神じゃからな! 思ったことなどすぐわかるわい!」

モシチ「… 神… と言うことはここはエデンか?」

モシチが、そう言うとき神は笑う。

神「ハハハ!! エデンか!! それもあるかもな! さて、それより少しわしと勝負しないか

の?」

モシチ「… チェスか?」

神「ああ、そうじゃさっきこの若造と勝負したが普通だったのな…」

神がそう言うときレイが一言。

レイ「一言言っておきますが私は、これでも30ですけど」

神「ハハ、大体地球の初めぐらいからいるワシにとつてはまだ若造じゃよwww」
神は笑いながら言う。

モシチ「…レベルが違うのじゃな…よっこいしよ…で？先行は？」

モシチはそう言いながら別の椅子に座る。

神「先どうぞさて…楽しめるかな？」

神はキングを置いてチェスを始めるのだった…

…

…

1940年6月3日

フランス

ダンケルク 第111胸甲騎兵連隊

ボン「ヒヒーン!!」ガバツ!!

パラム「Euh! ?? Oh, calme-toi!

（うわ!?お、落ち着いてよ!ボン!）」

そこには、手綱を引いて落ち着かせようとする青年がいた。

隊長「petit . petit. : : Est-ce que . a v a ? Param?

（おいおい.: 大丈夫か?パラム?）」

そこに、部隊の隊長が心配してくる。

パラム「Aide le capitaine」

（た、助けて隊長!）」

パラムは情けない声で言う。

隊長「Euh.: calme-vous totalement! Que faire si le cavalier est pressé! Calmez-vous un peu plus! Alors le cheval se sentira l'aise!

（ハア.: 全く落ち着け!乗っている奴が慌ててどうする!もう少し落ち着いてやれ!そうすれば馬は安心する!）」

隊長の助言をパラムは聞く。

パラム「Hum:: Calme-toi ! C'est bon ! C'est bon car je peux rentrer chez moi, esprit tranquille !

（ふう：：落ち着いてボン！大丈夫！絶対に安心して帰れるから大丈夫だよ！ほら落ち着いて！）「ナデナデ

ボン「：：ブルル」

パラムが落ち着いてボンに話しながらボンを撫でるとボンは落ち着いたのか暴れなくなった。

隊長「C'est vrai ! Vous pouvez le faire ! Param !

（そうだ！やればできるじゃないか！パラム！）

隊長は、パラムの背中を叩く。

そして、そんな若いパラムに隊長は馬の極意を教える。

隊長「Param, je pense que les chevaux font peur aux humains, mais c'est faux. Les chevaux sont extrême-ment lâches, et respour les chevaux, nous, les humains, res-

e m b l o n s . d e s d . m o n s .

「いいか？パラム、馬と言うのは人から見れば恐ろしく感じると思うが、それは間違いないだ馬は物凄く臆病者で、ウマから見れば俺達人間は悪魔のように見えるんだ。」

パラム「: . . o u i , m o n a . n . m , a d i t : . . o n r e s e m b l e . d e s d . m o n s a u x c h e v a u x : . .

「: . . ええ、先輩から教えてもらいました: . . 馬にとっては私達は悪魔のように見えて
いると: . . .」

パラムが言うのと隊長は続けて言う。

隊長「O u i , d o n c o n c o u r t c o m m e u n c a v a l i e r d a n s l e r e s p e c t d u c h e v a l . C , e s t l e c o e u r d e n o t r e l e r l l e R . g i m e n t d e C u i r a s s i e r s : . . e t c , e s t l e c o e u r d e l u i : . . J e s u i s d . s o l , j a i d i t q u e l q u e c h o s e e n p l u s .

「(そうだ、だから僕達は馬に対して敬意を払って乗り友のように駆け抜ける。それが、我ら第1||第1胸甲騎兵連隊の心さ: . . それにあいつの心でもあるのさ: . . すまん、余計なことを言ったじゃあまたな)」

隊長は、パラムにそう言うとそのまま元の場所に戻っていった。

パラム「… Je suis d·sol· Capitaine … Je

suis juste immature … Senior …

〔…ごめんなさい隊長… 未熟なばかりに… 先輩を…〕

パラムがそう言つて何か後悔していると…

市民「*Quelqu'un m'aide !!*

〔だ、誰か!!助けてくれ!!〕

何処から、助けを呼ぶ声が聞こえた。

パラム「!! *Voix pour aider ! Je vais · Bo*

nn ! Haiya !

〔!!助ける声!ボン行くよ!ハイヤ!〕

パラムは、どこからか聞こえた声に向かつて馬を走らせる。

ボン「ブルル!!」パカラツ!!パカラツ!!

隊長「Ah! ?? Param !! Attends !!

〔あつ!?パラム!!待て!!〕

パラムの行動に隊長は止めようとするがもうパラムは遠くに行ってしまった…

隊長「… *reviens vivant …*

「…生きて帰って来いよ…」

隊長は、そう言つてパラムの無事を祈るのだった…

パラム「…！（声がしたのは確か… あれは… ドイツ兵!? 急がないと!）」スツ…
パラムの向いたほうにはライフルを構えたドイツ兵が壁に立っている子供に何かし
ようとしていた。

それを見たパラムは、槍を手に持つ。

そして、大声で叫ぶ。

パラム「Vive la France !!

（フランス万歳ー）バシツ!!

ボン「ヒーン!!」パカラツ!!パカラツ!!

パラムは、そのままドイツ兵に向かって突撃する。

ドイツ兵「Was ist es !?

（なっ、何だ!?）

敵ドイツ兵はパラムにビビッて動かなかつた。

パラム「Wow !! Meurs !!

（うおおおお!!死ね!!）ザグツ!!

パラムは、槍をそのままドイツ兵を刺し殺した。

パラム「Hein... hein... tu vas bien ?

〔ハア... ハア... 大丈夫?〕ズボツ...

パラムは、ドイツ兵に刺さった槍を向きながら壁沿いに立っていた泣いていた少女に声を掛ける。

少女「Euh ... uhhhh ... j'avais peur \ \ ...

〔うええええええええ... 怖かったよお... 〕

少女は、パラムに抱きつく。

パラムは、泣いている少女におろおろしながらも彼女の家族を聞こうとしたその時横にいた死体を見る。

そこには、二人で手をつないで倒れている夫婦がいた。

パラム「... (: : : これが戦争なの... 先輩...)」

パラムは、この光景に衝撃を受けて動揺していると近くに爆発が起きる。
ポオン!!

その大爆発は大きな協会の塔が倒れてくる。

パラム「!? ・ v i t e r !!

〔避けて!!〕ドン!!

パラムは、少女だけでも救おうと思いつき突き放す。
そして…

ガララララ!!!

塔がパラムとボンを巻き込むも少女はパラムが突き放したおかげで少女は無傷だった…

天国

神「ほい、チエツクメイト」

モシチ「む? やられた… あと一歩じゃったのに…」

神「フフ… 年季が違うんじやよ」

レイ「もはや年季どころの話ではないと思えますが…」

パラム「… え!? ここ何処ですか!？」

パラムは、目を覚ますとスペイン騎兵とポーランド騎兵の二人が青年とチエスしていた。
た。

モシチ「お? いつの間におったんじや?」

モシチは少し驚く。

パラム「え？え？あ!?ボンは!?ボンはどこ!？」

パラムが叫ぶと。

ボン「ヒン」ゲシ!

後ろにいたボンが片足上げて蹴る。

パラム「あいた・・・って!ボン!!生きてたー!!」ギユ!!

パラムは嬉しさを抱き着く。

神「・・・今度は元気な子じゃな」

モシチ「そうじゃな」

レイ「馬の方も中々いい性格していると思いますけどね」

パラム「・・・あつ、そう言えばあなたはいつたい誰ですか?」

パラムも二人と同じように聞くと。

神「人数が揃うまで以下略」

パラム「ハ、ハア・・・そうなのですか?そ、それでは少し・・・スツ・・・

パラムは、神の遊びに付き合わせられる。

神「レッツゴー!ホキ○キ!!」(マ○オ声)

パラム「お、お手柔らかに・・・」

…
…
…

1941年9月19日

ソ連

キエフ 第1騎兵師団

キエフの戦い… ここはまさに地獄と言うには相応しい場所だった。

イヴァン「Хайя !!

(「ハイヤ!!」)

ギルバー「ヒヒーン!!」ドガラ!!ドガラ!!

そんな地獄にナチスの軍はある男を恐れていた。

S
c
h
e
n
R
e
i
c
h
e
s
!!

D
o
i
t
s
h
i
n
h
i
e
r
!!
D
e
r
G
e
i
s
t
d
e
s
R
u
s
s
i

「き、来たぞ!!ロシア帝国の亡霊だ!!」

塹壕に籠っていた精鋭のドイツ兵は槍にロシア帝国の旗を付けた騎兵に恐れていた。

イヴァン「.:. T a M

「.:.そこだ」カチツ.:.パアン!!

その騎兵に乗っている男はモシンナガンを切り詰めた大きなボルトアクシオンハンドガンを手にもう片方はロシア帝国の旗を付けていた槍を持っていたその状態で手綱を離し馬を動かしながら狙って撃っていた。

その距離200m

普通ハンドガンでは50mが限界だがイヴァンの持っている物は、元々ボルトアクシオンのためパワーが普通のハンドガンより強くその為遠距離でも狙える代物だった。

ドイツ兵「G u a !!

「ぐあっ!?!」

塹壕に頭だけ出していたドイツ兵は、見事頭部に命中し倒れる。

イヴァン「.:.スツ.:.ガチャ!!カチャン!!

イヴァンは太ももでボルトを上げてそのまま太ももでボルトを下げそして、太ももについている金具でボルトを元に戻すという、普通ではあり得ないコツキングをした。

ドイツ下士官「H m m . . . s c h i e . e n !!

〔くっっ… 撃て!!〕ガチャ!!

ババババババババババババババババ!!

ドイツ軍はMG42でイヴァンを狙うが…

イヴァン「Любител ь . . . у п а с т ь

〔ど素人が… 倒れる〕ブン!!

イヴァンは機銃に恐れず近づいて槍を投げる。

ドイツ兵「G e e ! ?

〔ギツ!?〕ドサツ…

機銃を撃っていた兵士が倒れるとドイツ下士官は恐怖の余り撤退命令を出す。

ドイツ下士官「B a . . . E s i s t e i n M o n s t e r . . . E s

i s t E n t z u g !! E s i s t E n t z u g !!

〔バ… 化け物だ… て、撤退!!撤退だ!!〕バツ!!

ドイツ兵「R . c k z u g !!

〔撤収!!〕バツ!!

小隊はけが人を連れてそのまま撤退する。

イヴァン「… スッ…

イヴァンは片手でハンドガンを構えるが……

イヴァン「……… ХМ, разв е ты не хоч ешь больш е

з а н и м а т ь с я . . . а . . . н у . . .

〔……… うむ、もう交戦の意思はないか……ふう……さて……〕「カチツ……

イヴァンは、特製ホルスターでハンドガンを仕舞つてそのまま槍の刺さつたドイツ兵の傍に近寄る。

イヴァン「…… ХМ . . . Я е ще жи в .

〔……ほお……まだ生きておつたかしぶといもんじゃない〕

ドイツ兵「h . . . oh . . . H i l f e . . .

〔ウツ……アツ……助けて……〕

イヴァン「……」

ドイツ兵は、苦しうに助けを求める姿をイヴァンを見る。

イヴァン「…… Ich kann dir in diese m Zustand

nicht helfen, aber lass uns bis zum le

t z t e n Moment zusammenbleiben . . . Es ist

besser, als allein zu sterben .

〔……もうその状態じゃあ助からんが、最後の時まで一緒にいてやろう……一人で死ぬ

「よりましたじやよ。」

イヴァンは、丁寧にドイツ語で死にそうなのドイツ兵の最後を見届けようとしていた。

ドイツ兵「h oh, danke es ist nett zu

den Geistern ..

〔ウツ：あ、ありがとう：亡霊の割にやさしいのだな：〕

ドイツ兵はそう言うといヴァンは笑いながら葉巻に火をつける。

イヴァン「Hahaha!! Das sagst du gerade! D

as sage ich nicht! .. Huh .. rauchst d

u?

〔ハツハツハツ!!それは、君達が勝手に言ってるだけじゃ! わしはそんなこと

一言も言っていないわい! : フウ：吸うか?〕

イヴァンは、もう一つの新しい葉巻をドイツ兵に出す。

ドイツ兵「Oh estut mir leid : meine Fr

au sagt mir, ich solle mit dem Rauchen

aufhören ..

〔ああ：すまない：今嫁に禁煙しろって言われてるんだ：〕

イヴァン「Sie sind eine gute Frau : wie vi

ele sind Sie?

「いい嫁さんだな。お前いくつだ？」

イヴァンは、ドイツ兵の年齢を聞く。

ドイツ兵「21 Jahre alt」

「21才だ。」

イヴァン「okay! Ich habe meine

Stimmung geändert, ich helfe dir

「そうか。よし! 気分が変わった! お前助けるわ。」スツ.: ガサゴ

ソ.:

イヴァンはそう言って立ち上がってギルバーの鞍についているバッグパックから何かを探す。

ドイツ兵「warum ist so nett? Was ich

sage: Ich bin feindliches Land, d

as Ihr Land berfallen hat Warum?

「な、何でそんなに優しいんだ? 自分が言うのもなんだが: 私はお前たちの国

に奇襲した敵国だぞ? 何故だ?」

ドイツ兵の質問にイヴァンはニツコリと答える。

イヴァン「ein? So einfach ist das... Ich bin ein Stimmungsmacher. Ich bin eine Gerontokratie, die es liebt, Dinge zu tun, die die Leute nicht m. gen.!!」

（あ? そんなの簡単じゃよ... わしは気分屋だからな!! 人のいやなことをやるのが大好きな老害爺なんじゃよ!! わつはつはつは!!）」

イヴァンは大声で笑いながらドイツ兵に応急処置をする。

ドイツ兵「Ha... ha... ich wei. nicht, was im Leben passieren wird...」

（は... はは... 人生どんなことが起きるか分からんもんだな...）」

ドイツ兵は、苦笑いしながら言う。イヴァンは言う。

イヴァン「Hey, dieses Wort sagt der alte Mann, der Herr sagt, er will nicht sterben!」

（おいおい、その言葉は老いぼれの爺が言うセリフじゃ! お主が、言うセリフは死にたくないと言わんかい!）」スツ... ギユ!!

イヴァンはそう言いながらドイツ兵を背中にくっつけギルバーに乗る。

ドイツ兵「Haha . . . eine wirkl ich seltsame Person . . .」

（ハハ：：ほんとにおかしな人だ：：）

ドイツ兵は、笑いながらも死ぬことから生きることには専念することにした。

イヴァン「Хорошо !! Поехали! Гилбер !! Самыи
быстрые !! Хайя !!」

（よーし!!行くぞー!ギルバー!!最高速だ!!ハイヤ!!）バシツ!!

ギルバー「ブモ!!」バガラツ!!バガラツ!!

ギルバーは、当たり前だと言わんばかりに男性の二人の体重何て物ともせず走るその走りは、大地が割れるかと思うほどの力強さだった：：

ドイツ軍前線基地

ドイツ兵1「Hm m . . . Hm m ? : : Ach, das ist !! Ic

h bin ein Geist !! Der Geist des Russisc
hen Reiches ist angek ommen !!!

（ふん：：：ん?：：あ、あれは!!ぼ、亡霊だ!!ロシア帝国の亡霊が来たぞ!!!）

見張り台でイヴァンを見つけ大声で叫ぶ。

ドイツ指揮官「K u u . . . a l l e ! ! B e r e i t f . r d e n K
a m p f !!

(クツ：： 全員!!戦闘準備!!)

ドイツ兵1「V e r s t a n d e n ! !

(了解!!)

カチャ!!カラララ：： ガキン!!カチツ：：

ドイツ兵1は、塹壕の中に入り機関銃やライフルサブマシンガンを構える。

ドイツ兵1「：：：：」

ドイツ指揮官「：：：：」

全員息をのみイヴァンが攻撃するのを待つ。

しかし、何も無い：： 向こうはただただ笑顔で馬を駆けていた。

ドイツ兵1「W a s w a s ? D i e s e r G e i s t w i r d m i t e

i n e m L a c h e n h i e r h e r k o m m e n . . .

(な、なんだ?あの亡霊笑っているぞ)

地獄を見てきたドイツ兵はあの何も無い純粹な笑顔に何も感じないどころか恐怖し
か感じなかった。

ドイツ指揮官「：： w a s z u m T e u f e l ? . . . ! ?? A l l e s

enken die Waffe !!

〔:… 一体なんだ?… !! 全員銃を下げる!!〕

ドイツ兵1「Warum?!」

〔な、何故ですか!?!〕

ドイツ指揮官の命令にドイツ兵1は驚愕して聞く。

その指揮官が言う前にイヴァンは答える。

イヴァン「Ich bin nur gekommen, um die ver-
etzten Soldaten zu tragen

〔負傷兵を運びに来ただけじゃからじゃ〕

ドイツ兵1「!?!」

いつの間にか来たイヴァンにドイツ兵は驚く。

イヴァン「Hey, du bist angekommen, junger Ma-
nn, geh sofort in rzliche Behandlung!

〔おーい着いたぞ若造、さっさと治療を受けな!〕 スツ:…

イヴァンは、紐を外して負傷したドイツ兵を降ろす。

ドイツ兵「:… Danke :… Geister :… Nein, Held

en :…

「…ありがとう… 亡霊… いや、英雄よ…」

降りたドイツ兵は、イヴァンに礼を言う。

イヴァン「Oh, ich hoffe, wir sind das nächste Mal nicht auf dem Schlachtfeld, wenn wir uns treffen

〔ああ、今度会う時は戦場でないことを祈るぞい〕「バシツ!!

イヴァンはそう一言言ってそのままドイツの前線基地から去っていく…

…

イヴァン「ХМ … Ну … Пойдем домой … а?

〔ふう… さて… 帰ろう… ん?〕

イヴァンは、遠くにソ連の前線基地が見えた途端何かが聞こえた。

キイイイイイン…

何かかこちらに飛んでくる音だった。

イヴァン「Ах … Это уже куча … Жаль, что у

меня не было хорошей жизни … Прости,

Гилберт в конце, как это

「あー… もう用積みか… まつ、良い人生だったわい… すまんなギルバーこんな最後で」サスサス…

イヴァンはギルバーを撫でる。

ギルバー「フン…」

ギルバーはまるでお前と一緒に構わんと言わんばかりに鼻で笑う。

イヴァン「Ага … Уххх … Ахахахаха !! Росс

Ийская Империя !! Слава !!

「そうか… フフフ… アハハハハ!!ロシア帝国よ!!栄光あれ!!」

パアン!!パアン!!パアン!!

イヴァンは、自身の一歩の黄金時代を思い出しながら大声で今は亡き巨大な帝国の名を叫んで爆発の中に飲み込まれるのであった…

天国

神「あらよつと、チエツクメイト」

パラム「あ!?嘘!!負けちゃった…」

レイ「だからキングは動かさしちゃ駄目って言ったじゃん……」

モシチ「いやいや、キング動かしたらすぐやられるぞ？」

イヴァン「……お？何処じゃここ？」

ギルバーは目を覚ます。

モシチ「……ん？あなたは……イヴァン大尉!？」

イヴァン「おお！モシチ伍長！久しぶりだな！てつきり死んだと思ったぞ！」ガシッ

!!

モシチ「はは、それは貴方もなんじゃないですか？大尉！」グツ！

2人は、手をがっしり握る。

イヴァン「ああ、そうかもなー！いやーしかし、決まってるじゃないか！その服！似合っ

ているぞい！」

モシチ「いやいや……そこまで似合ってませんよ……」

イヴァン「はは！謙遜だな！」

2人が嬉しそうに話している。

レイとパラムは置いて行かれている。

パラム「あの……レイさん……あの人が誰ですか？見た感じソ連騎兵の様に見えます

が……」

パラムの疑問にレイは答える。

レイ「……これは、噂だが彼イヴァンは、一次大戦の隠れた英雄だとスペインでは聞いていた……だが、ロシア帝国崩壊後白軍に移って赤軍と戦闘した……それで降イヴァンは行方不明になったと聞いたが……まさか生きていたとは……死んでるけど」

パラム「へー……物凄い人なんですね……」

パラムはそう言うとイヴァンは笑いながら言う。

イヴァン「まあ、そんなすごい人の最後は、仲間に裏切られるってオチじゃがなww」
モシチ「……いったいなぜですか？あなたのような人が裏切られるなんて……」

イヴァン「さあ？わしには分からんな……お？チエスがあるじゃないか」

神「どうだ？一勝負しないか？」

神はそう言つてイヴァンに椅子を指指す。

イヴァン「ふむ……ええぞい一勝負やるとしよう」スツ……

イヴァンは椅子に座る。

神「さて、君はどれだけ強いかのう？」

神は、イヴァンと勝負するのだった……

：

：

1942年12月28日

ソ連

コーカサス地方 サヴォイア騎兵連隊

エグ「Hmm ♪ Hmm ♪」

「ふん♪ふん♪ふん♪」

そこにいたのは、鼻歌を歌いながら小さな子供を後ろに乗せてソ連の攻勢から本隊から離れて一人で撤退していたイタリヤ人がいた。

エグ「No：： oggi fa bel tempo：： se non ci

fossaro cadaveri

「いや～：： 今日もいい天気だな：： 死体が無ければだけど」

そこには、ソ連兵とドイツ兵の死体があり、ひどい物にはもはや誰の体だったかわからない肉の塊があった。

エグ「Хорошо, мисс? Вы не можете открыть глаза, пока я не подам сигнал, потомучто, когда вы откроете его, Бугимен пододет к вам.

「いいか嬢ちゃん？俺が合図するまで目を開けちゃ駄目だよ？開けるとブギーマンが君を浚いに来ちゃうからね？」

子供「…」コクコク…

子供は、エグに必死に掴まって目を瞑って震えていた。

エグ「… no… la guerra…」

「… いやだねえ… 戦争は…」

エグは、震えている子供を見てぼそりと独り言を言う。

すると、遠くから何か音が聞こえる。

エグ「… Hmm? Cos' questo suono?」

「… ん… の音は？」

ブオオオオオオオオ

エグは、音がする方を見るとソ連戦闘機がこちらに向かって降下してきた。

エグ「mia madre! Simpatico! Ero solo libe

rocos・hopenstaton sarivent
o! Andiamo! Valney!! Haiya!!

「はは！いいねえ！ちょうど暇だったから何か来ないかなと思っただぜ！行くぞ！

ヴァルニー！！ハイヤ！！」バシッ！！

ヴァルニー「ヒーン！！」パカラッ！！パカラッ！！

エグは、まるで待ってましたかと言わんばかりにこの状況を楽しんでいた。

エグ「Ловись крепко！

（しつかり捕まれよ！！）」

エグは子供に一言言う。

子供「！！」コクコク

子供は、頷きガシッと掴む。

ダダダダダダ

エグ「Ah ah!! un pessimo letame!! Non l'h

o proprio colpito!! Eh!!

（ハッハ！！下手糞だな！！全く当たってないぞ！！ハア！！）」グイッ！！

ヴァルニー「ヒーン！」バッ！！

エグは、華麗な手綱さばきでヴァルニーを動かして機銃掃射を避ける。

ブウウウウン!!

そして、ソ連の戦闘機はそのままエグの上を通り過ぎ旋回する。

エグ「Bene, proviamo un po', di fortuna...」

(さて、ちよつと運試ししようか...)「スツ... カラン... ガチャ!!」

エグは、ライフルに弾を一発だけ入れ狙いをソ連の戦闘機に狙いを定める。

ブウウウウン!!

旋回を終えたソ連の戦闘機は、一直線でエグに向かって降下していく。

エグ「... 1」

(... そこだ)」

パン!!

ビシッ!!

エグの一発の運は見事当たり戦闘機はそのままエグの上を通り過ぎて墜落した。

エグ「Eh... Aquanto pare la deamihassor

rissor!

(ヒュ... どうやら女神は俺に微笑んでくれたな!)

エグは、口笛を吹いて喜ぶと...

エグ「... Oh? Э тот дом... Мисс! Вы уже может

е открь вать глаза!

「… お?あの家は… 嬢ちゃん!もう目を開けていいぞ!」

エグは、小さな家を見つけて目を瞑っていた少女が目を開ける。

子供「Ох, этот дом … дом, в котором я жил …

「あ、あの家… 私の住んでた家…」

子供は、泣きそうな顔をしながら家に指を指す。

エグ「Ага! Хоррошо! Тогда пойдем к моей семье! Я уверена, что волнуешься и ждешь!

「そうか!よし!それじゃあ家族に会いに行こうか!きつと心配して待つてるからな!」

エグは、そう言いながら子供を家に帰らせるため手綱を叩きヴァルニーを走らせる。すると、家から男性が銃を持って出てきた大声で叫ぶ。

男性「Не приходи!! Если ты еще придешь, тебя пристрелю!

「来るな!!それ以上来ると撃ち殺すぞ!!」ガチャ!!

男性はそう叫ぶとエグは、ライフルを鞍に戻して両手を上げる。

エグ「Я не собиращь атаковать!! Я тольк
 что пришел, чтобы доставить тебе ребе
 ка!! :. А те перь слезь с дочери и ди
 к своей семье

〔俺には攻撃の意思が無い!!ただ、君達にある子を届けに来たんだ!!:. さあ、お嬢ちゃ
 ん降りて家族のところに行きなさい〕ニコッ

エグは、笑つて子供に降りるよう伝える。

子供「... Спасибо

〔... ありがとう〕

子供は、お礼を言つてそのまま家族の元に走つていく。

エグ「Sto bene !!

〔元気でなー!!〕グイッ!

エグは、子供を見送つてそのままドイツの前線基地に撤退する。

エグ「Bene, questa la missione, dopodich
 ▪ torner piano piano in Italia andr
 ▪ in vacanza con una donna!

〔よし、これで任務達成だな!後は、ゆつくりとイタリアに帰つて女とバカンスだ!〕

ヴァルニー「… ハア…」

ヴァルニーは、浮かれているエグにため息をすると…
カチツ…

エグ「eh?

（え？）」

ヴァルニー「…」

エグは、ヴァルニーの足元を見ると

何かが、巨大な物が埋まっていた。

エグ「… non ■ vero? Perch ■ le miniere so

no sepolte …」

（…嘘だろ？何で地雷が埋まってるんだよ…）」

エグが絶望したその瞬間…

ポオン!!

地雷は大爆発を起こしエグ達を巻き込むのだった…

天国

神「んんゝ… あっ！ここじゃ！チエック！」トン…

イヴァン「あれ？参つたな… そこは、視覚外じやったわ… まいったわい！」

イヴァンは両手を上げる。

モシチ「やっぱり強すぎる…」

パラム「でもあと一步でしたけどね」

レイ「実は神もそれほどではなかった？」

3人が話し合っていると…

エグ「…：… おう、何じゃこりや？」

ヴァルニー「ヒン？」

目を覚ました二人は目の前の光景に困惑していた。

イヴァン「ん？おい若造いつそこにいたんじや？」

イヴァンはエグに話しかける。

エグ「さあ？地雷で死んだと思つたらここにいるの間にいたのさ」スツ

エグは、イヴァンの質問に答えながらウマから降りる。

エグ「…：… さて、ここはどこでお前ら誰だ？後、この青年誰？」

エグは、当たり前前のことを質問する。

神「わしは、神だよそれよりわしとチエスしない？」

神はもはや、チエスしないかおじさんになっていた。

エグ「ああ？何でだよ？… まあ、暇だからいいけどさ」 スツ…

エグは、何気なく椅子に座る。

神「いぎ！デュエル!!」

イヴァン「何じゃそれ」

神「気にすんな」

そうやって神はエグとチエスを始める…

…

…

1944年6月13日

フランス

ヴィレル・ボカージュ

第4ロンドン義勇騎兵連隊

その街では、イギリスの騎兵部隊がナチスを倒すためにフランスまで進行してたが占領した街でドイツの鉄の虎に襲われていた。

ガチャン!! カラン... ガツ... カコツ! ガチン!!

イギリス兵が、対戦車砲に徹甲弾を装填する。

イギリス兵「Good loading!

{装填よし~}

装填手は大声で叫ぶと下士官らしきイギリス兵が双眼鏡で目標を探す。

イギリス下士官「... Goal Forward Tiger I!

{... 目標前方ティーガーI!!}

前方には、対戦車砲に気づいていないのか戦車の弱点である側面を晒していた。

イギリス兵「... Aim! Launch !!

{... 狙いよし! 発射!!}

パン!!

カンツ!!

ポオン!!

敵戦車は、大爆発を起こし沈黙した。

イギリス兵「I did it !! I defeated it !!

〔やった!!倒したぞ!!〕

イギリス兵が、戦車を倒したことに喜んでいると…

誰かが叫ぶ。

カム「Go down !!

〔伏せろ!!〕

叫んだその男は、側面にいる戦車に気づき何とか助けようと叫ぶ。

そして、そう言った瞬間…

ポオン!!

対戦車砲にいたイギリス兵は側面にいた敵戦車の攻撃で吹っ飛ぶ。

カム「Fuck !! That yaro …

〔くそ!!あのやろお…〕

叫んだイギリス人カムは、腰に付いていた対戦車手榴弾を持つ。

そして、敵戦車に向かって大声で殺意を持ってこう叫ぶ。

カム「I'll kill you !! Proceed !! Vio !!

〔ぶっ殺してやる!!進め!!ヴィオ!!〕バシツ!!

カムは、片手で手綱を叩く。

ヴィオ「ブオン!!」バガラッ!バガラッ!!

カムの愛馬ヴィオは力強く走り敵戦車に近づく。

しかし、敵戦車もただでやられるわけがなくカムに向かって反撃するが…
ボオン!!

カム「Huh! !!

「フツ!!」

カムは、体を馬の横に動かして砲弾を避ける。

そして、カムは狙いを定めて対戦車手榴弾を戦車に向かって投げる。

カム「Eat it !!

「食らいやがれ!!」ブウン!!

投げた対戦車手榴弾は、そのまま戦車の背面に当たり大爆発を起こす。

バン!!

カム「Guo! ?? : huh !!

「グオツ!?! : ハッ!!ザマアみやがれ!!」

カムは、見るも無残な残骸にそう叫ぶ。

カム「:. .」

そして、カムは倒れているイギリス兵を見る。

イギリス兵「…」

イギリス下士官「…」

そこには、上半身無い物や内臓が飛び散っている者もいた…

そして、カムは自身の不甲斐なさで死んでしまった仲間に頭を抱える。

カム「… Damn … If I noticed it as soon

as possible, it wouldn't have happened

… Shit !!

「… くそがッ… 俺が少しでも早く気づけばこんなことにならなかったのに…

クソ!!」

そんな罪悪感にとらわれているカムの後方に、テイーガーが狙っていた。

ヴィットマン「… Schie•en!

「… 撃て!」

パアン!!

カム「!! ?? terrible!!

「?!!やばい!!」

カムは、敵戦車に発砲したことに気づき避けようとするが…

ポオン!!

一歩間に合わずそのまま愛馬と共に爆発に巻き込まれて死んでいくのだった…

天国

エグ「…………… はい、チエックメイト」

神「グアアアア!? まっ、負けた!? 嘘だ!!」

負けた神は、頭を抱える。

イヴァン「良く勝ったな… 正直びっくりしたぞ」

パラム「え、エグさんすごい…」

レイ「…………… ほぼ完封だな」

モシチ「…………… キング以外何もないな」

仲間の言う通り

エグの駒はほとんど残っているが神の方はキング以外何もいなかった。

エグ「楽勝だな、親父に比べれば全然余裕だ」

神「こ、これが勝者の余裕……………」ガク……………」

神は、肩を落とす。

カム「……な、何だこの状況？」

カムはこの状況に困惑すると……

イヴァン「お？また新しい奴が来たな……お主名前は？」

イヴァンがカムに気づく。

カム「……カム、カム ダアトだ」

パラム「いい名前ですね！」

聞いたパラムがそう言うのと、カムは笑いながら言う。

カム「ハッ……くそ野郎の付けた名前にイイも糞もあるかつての……」スツ……

カムはヴィオオから降りながら小さく小声で言う。

カム「……で？ここ何処だ？できれば戦場に帰りたいのだが」

カムは、神にそう言うのと……

神「あく……それは無理じゃな」

神がそう言う。

カム「あ？何でだよ？理由を言えよガキ」スツ……

カムは、そう言いながら腰についているクレイモアを手に取り神に向け脅す。

神「おお、怖い怖い……恐ろしいものだねえ……」

神は脅されても全く動じてない。

カム「… フン！面白くねえな…」ガコツ…

カムはそう言いながらクレイモアを元に戻す。

神「まあ、何じやさつき負けたからここがどこでわしが何者か教えよう… チェスしなからな！」

イヴァン「こやつ、チェス以外やりたくないのか？」

神「だって、チェス以外やることないもん!!」

神は涙目になりながら言う。

パラム「か、神も意外に不自由なんですわね…」

パラムは、意外に神が不自由なことに少し困惑する。

モシチ「で？今度は、カムとやるのか？」

神「そうじやな… どうだいカム？一勝負？」

神は、手を広げて言う。

カム「… いいだろう」スツ…

カムは、椅子に座る。

神「そんじや、チェスをやりながら色々説明するから耳をかつぽじってよく聞くんじやぞい」

神はそう言って駒を一步前進させるのだった…

：
：
：
：

1944年6月21日

フィンランド

ペツアモ付近 フィンランド第3師団

カール「Huh : : h u h : : M i n u n k i i r e h d i t t

v ▪ j a k e r r o t t a v a y s t ▪ v i l l e n i . : : K a t

s o , k a i k k i o v a t k u o l l e i t a : :

「ハア：：ハア：：い、急いで仲間に知らせないと：：み、みんなが死んじゃう：：」

まだ雪がある森林で一人の青年が、仲間に危機を知らせるため急いで馬を駆けてい
た。

カール「V e r i : : e i l o p u : :

「ウウ：：血が：：止まらない：：」グツ：：

カールの腹部に血が滲み出ており片手出血を止めようとしていた。

カール「M e n i n l i i a n s y v l l e k i v e e n . . . t . m .
o n . . .

〔うう．．．流石に、深く入りすぎた．．．これじゃあ．．．〕

カールは、自分がかもう動ける時間は少ないと感じとる。

そして、どうやって自分が倒れる前に仲間情報に伝えるか考えていると．．．

子供「J o k u !! A u t a !! T a p e t t u !!

〔誰かー!!助けて!!殺される!!〕

カール「L a s t e n . . . n i ? . . . E i m i t e n k . n !! R o s a n

!! P i d . k i i r e t t . j a m e n e s e n l u o , j o k a

t e k i . n e n !!

〔子供の声? . . . ま、まさか!!ローザン!!急いで声かした方に行つて!!〕「バシッ!!

ローザン「ヒヒーン!!」ザクツ!!ザクツ!!

カールは、急いで声かした方へ急いで馬を走らせる。

カール「. . . E i m i t e n k . n , o v a t k o n e u v o s t o s o t

i l l a a t t . l l ? . . . S i t t e n m i n u n o n k i i r e h d

i t t . v . j a a u t e t t a v a ! !!

「まさか、ソ連の兵士がもうここまで来ているの?」
「だつたら急いで助けないと!!」カチャ…

そう言い腹部の痛みに耐えながら剣を抜く…

子供「l t u l e …

「、来ないで…」

子供は逃げようとするも、一人のソ連兵に捕まっていた。

ソ連兵「Э тот гробаный ребенок … убегае т н

е м н о г о … я убью тебя !!

「クソガキが… ちょこまかと逃げやがって… 殺してやる!!」スツ…

ソ連兵は捕まえた子供にナイフで殺そうと振り上げる。

すると、後ろからカールがやってきて叫ぶ。

カール「P s t i r t i s i i t l a p s e s t a !!

「その子を離せえええ!!」ブオン!!

ソ連兵「!?」バツ!!

カールは、完全奇襲でソ連兵の後ろから振るが、ソ連兵は子供を突き放してそのまま屈んで避ける。

子供「Vau !?」

〔ウワツ!?〕バフツ!!

子供は、飛ばされるがソ連兵から何とか離れられた。
そして、飛ばされた子供にカールは叫ぶ。

カール「J u o k s e p o i s !!」

〔逃げて!!〕

子供「!!」バツ!!

子供は、走って逃げる。

ソ連兵「K a л . . . у м е р е т ь !!」

〔糞が. . . 死ね!!〕ガチャ!!

ソ連兵は、怒り狂ってライフルをカールに向ける。

カール「H u h !! H a i j a !!」

〔フツ!!ハイヤ!!〕

カールは、手綱を叩いてソ連兵から離れそのまま旋回して突撃する。

パアン!!

パアン!!

ソ連「Э т о . . . п о ч е м у б ы т е б е н е у д а р и т ь !!」

「この…なぜ当たらない!!」パアン!!

ソ連兵は、ライフルを撃つても木の隙間を通っているカールには全く当たらない。

そう言っている間にもカールは避けるのをやめて敵に向かって一直線に突っ込んで

いく。

すると…

パアン!!

バズッ!

ローザン「ヒーン!!」バツ!!

ソ連兵の弾がローザンに当たりそのまま前足から倒れ勢いよくカールを飛ばす。

カール「Vau !?」

「うわっ!?!」

カールはかなり高く飛ばされるが、カールはそのまま剣を持ってソ連兵に向かって落ちる。

カール「K a a t u a !!」

「倒れる!!」ザグッ!!

ソ連兵「y a !?」

「ぐあっ!?!」

カールは、落下の勢いでそのままソ連兵の心臓を刺し殺す。相手は即死する。

カール「H m m . . . H m m . . . H m m . . . R o s a n !!

〔はあ. . . はあ. . . はあ. ローザン!!〕

カールは、急いで倒れたローザンの元に走る。

ローザン「. . .」

カール「A h . . . s e o n . . . v a l h e . . . R o s a n . . .

l e n p a h o i l l a n i . . .

〔ああ. そんな. . . 嘘だ. . . ローザン. . . ごめん.〕

カールは、死んだローザンに涙を出す。

カール「. . . m i n . k i n m e n e n n y t . . .

〔. . . 俺も今行くよ. . .〕カチャ. . .

もはや、死しか残されていないカールは、拳銃を取り出して頭に当てる. . .

そして. . .

パン!!

静かな森林に一発の銃声が鳴るのだった. . .

天国

カム「…… 負けた」

神「結構ギリギリじゃったがな」

2人の対決は神の勝利に終わった。

モシチ「……にしても、にわかには信じがたいな……ここが天国だとは……見た感じただの部屋……いや、部屋ではなくもはや大きなホールになっておるの」

モシチは、周りを見ると少し大きな部屋から城のような大きなホールになっていた。

エグ「てか部屋の割には真っ白過ぎない？なんか怖いんだけど？」

パラム「そ、そうですか？私は素敵だと思いますけど……」

エグとパラムは部屋の色などを話したりしている。

イヴァン「いや、しかし、まさかおぬしの名前がまさかクロノスだったとはな……以外じゃよ」

クロノス「そうだよ、君達の神話では僕は死んだことになっているからね」

そう、彼らと話しているのはギリシャ神話に出てくるゼウスの父クロノスだった。

レイ「しかし、農耕の神が何でここに？」

レイの疑問にクロノスが答える。

クロノス「まあ……色々あつてねあのクソガキに色々と鎖を付けられてね……ここで仕事をしているんじゃないよ……それより新しい人が来たぞい」

カール「……んあ?……え!?ここ何処!?!」ガバツ!!

カールは、真つ白な部屋に驚いて体を慌てて起こす。

パラム「あ、あの……大丈夫ですか?」

慌てているカールにパラムは落ち着かせようとカールに近づく。

カール「へ!?あ、だ、大丈夫です問題な……ローザン!!」バツ!!

カールは、生きてるローザンを見つげダツシユで駆け寄る。

カール「……い、生きてるのか?ローザン痛いところはないか?」サスサス……

カールはローザンが負傷した個所を触る。

ローザン「ヒヒン♪」

ローザンは撫でられていると勘違いしたのか嬉しそうだ。

カール「よ”が”だ”あ!!!”ぎ”で”だ”!!うええええええ!!……」

カールは、生きていることに喜んで泣きじやくる。

レイ「……これまた癖のある人が来たな……」

エグ「せやな」

イヴァン「ハハ!馬に愛があるのはいいことじゃがな!」

パラム「そうですね…。いいことだと私も思います。」

全員が、馬愛にいろんなことを言っているとかムがクロノスに聞く。

カム「…。そんでよ、クロノスさんよ…。あんた、後どれくらい人をここに呼ぶんだ？」

カムがそう聞くとクロノスは答える。

クロノス「う〜ん…。後、4人ぐらいじやな」

モシチ「4人…。今いるのを合わせて…。11人？」

モシチか、数を言うといヴアンは聞く。

イヴアン「…。後、4人はどんな奴らなんじや？」

クロノス「さあ？結果は神のみぞ知るじやからな」

カム「お前神じやん」

カムがクロノスの言葉に突っ込むとカールがクロノスに聞く。

カール「あの…。ここ何処ですか？後、貴方がクロノスって本当ですか？」

クロノス「う〜ん…。とりあえずチエスしながら説明しよう…。一戦どうだい？」

カール「あ、はい…。お願いします。」スツツ。

カールは、おどおどしながら神と勝負するのだった…。

…
…
…

ハンガリー

ブダペスト

第8SS騎兵師団「フロリアン・ガイエル」

第22SS

義勇騎兵師団

ここではハンガリーの首都ブダペストがソ連に包囲されていた。

ハンス「…」スツ…

そこに、壊滅した騎兵師団の生き残りが双眼鏡で敵がどこにいるか偵察していた…
そこに…

サラ「… Generalmajor Hunts, Präsident Hitler hat eine formelle Fluchterlaubnis erteilt … Generalmajor?」

「… ハンス少将、ヒトラー総統から正式な脱出許可が出ました… 少将?」

彼の名は、サラ ケセドがハンス ビナーに脱出命令を報告しに来ていた。

ハンス「Ja? Oh, danke Sarah. . . wie viele B
rger gibt es noch?

〔ん? ああ、ありがとうサラ君. . . . 市民はあとどれくらいいるんだ?〕

ハンスは、残りの市民があとどれくらいいるのかさらに聞く。

サラ「Ich glaube, es sind tausend Leute. . .

〔千人かと思われま. . . .〕

サラは、暗い顔をしながら言う。

ハンス「Was ist mit Ihren verbleibenden Soldaten?

〔では、君達の残りの兵は?〕

ハンスは、続けて聞く。

サラ「Die Anzahl der Personen betragt weniger als 100. . . 30, wenn es sich b
ewegen kann. . .

〔. . . . 人数は100人未満. . . 動けるものだと30人かと. . . .〕

ハンス「Ja. . . Sara, folge mir

〔そうか. . . サラ君付いて来なさい〕スツ. . .

ハンスは、手綱を少し引く。

ビス「ヒン……」。パカ。パカ……

サラ「Jawohl!」

〔は、はい!〕スッ……

サラも、手綱を少し引いてハンスに付いて行く。

オリオン「ヒヒン」。パカ。パカ……

ハンスは、馬を歩かせながら横に付いて来ているサラと話す。

ハンス「…… du bist jetzt seit drei Jahren

in der SS ……」

〔…… 君が、SSに入ってもう3年経つか……〕

サラ「…… Ich erinnere mich noch genau ……」

Generalmajor Hunts streckte die Hand n

ach mir aus, die keine Familie hatte ……」

Ich erinnere mich noch an diese Zeit.

〔…… 今でもはつきり覚えています…… 家族もいなかった私にハンツ少将は手を差し伸

べてくださった…… あの時の事は今でも覚えています。〕

サラは、3年前のことを今のように思い出す。

ハンス「Haha, ich bin froh, dass du gesag
 hast: was war dieser Krieg für dich?

〔ハハ！そう言ってくれると嬉しいよ。君にとってこの戦争は何だった？〕

ハンスは、笑いながらもこの戦争をサラにとつてはどんなものだったか聞く。

サラ「Für mich ist dieser Krieg : eine R
 achequette.

〔私にとつてこの戦争は……復讐の連鎖だと考えております。〕

サラは、元々この戦争は前大戦の恨みで始まったようなもの……それをサラはそう答
 える。

ハンス「Nun ja, das Deutsche Reich war weg
 en der Reparationen des vorangehenden
 Krieges fürchtbar deprimiert, und das
 deutsche Volk rgerter und hastete die
 Alliierten für die Reparationen : sim
 Namen der Worte des Volkes Es war sein
 Majestät der Präsidient Hitler der sc
 hrie : er hat erfollgrich die Stimm

des Volkskampfes im Strudel der Kriege
ideologie gefangen : nein, er hat mir
nur beigebracht, wie man reinkommt.

Dank dessen behaltete der Kampf der
Menschchen Dinge, die nichts mit Deutsch
land zutun hatten : Tschechoslowakei,

• sterreich, Rumänien, Bulgarien : und

sogar Ihr Land Ungarn : Est tut mir

eid : so weit bin ich gekommen beteil

igt :

（そう：確かに、前大戦の賠償金のせいでドイツ帝国はひどく低迷した、そして、ドイツ国民はその賠償金を掛けた連合国を恨み憎んだ：その国民の言葉を代表で叫んだのがあのヒトラー総統閣下だ：彼は、国民の闘争の声を上手く戦争イデオロギーの渦に巻き込んだ：いや、入り方を教えただな。

そのおかげで、国民の闘争はドイツとは関係ないものまで巻き込んだ：チェコスロバキア、オーストリア、ルーマニア、ブルガリア：そして、君達の国ハンガリーまで巻き込んだ：すまない：ここまで巻き込んでしまつて：：」

ハンスはそう言つて謝る。

サラ「Aber der Generalmajor muss sich nicht entschuldigen!

〔少将が、謝る必要がございません!〕

サラは、そう言つたとハンスは言う。

ハンス「: Aber es ist meine Verantwortung wie dich in den Wahnsinn der SS zu verwickeln : Ich bin wirklich frei, viel zu lernen, aber ich kämpfe nur Krieg, ich kann es nicht sagen : Ich bereue es : :

〔: だが、君のような純粋で真面目な青年をSSと言う狂気に巻き込んだのは私の責任だ : 本当なら自由に色んな事を学ばせる年なのに私は、戦争の戦い方しか教えられなかった : 私後悔しているよ : 〕」スツ : :

ハンスはそう言つて軍帽を深く被る。

サラ「Generalmajor : : Trotzdem sind wir f

r Ihre Hilfe dankbar, also bereue
 nicht : : sonst haben wir Generalmajor
 urckgezahlt, wofür. Ich werde danken : :
 (少将 : : それでも私達は、貴方に救ってもらつた事を今でも感謝しているんです！
 から、後悔しない下さい : : そうでない私達は何のために少将に恩返ししたのだ？と
 思つてしまいます : :)」

サラは、ハンスにそう語る。

ハンス「 : : Nun, da kommt etwas, wenn mir ei
 n ernsthafter Student sagt : : Huh, ich
 bin auch alt : : 」

(: : そうか、真面目な生徒に言われるとそう言われると来るものがあるな : : フツ、私
 も年老いたな : :)」

ハンスは、涙もろくなつた自分に笑う。

サラ「 : : Generalmajor : : Nein, Ausbilder
 Was soll ich jetzt tun, bitte sagen Sie
 es mir.

(: : : : : 少将 : : : : : いえ、教官これからどうすればいいのですか？お教えてください

い。}」

サラは、わざと言い慣れた言葉を使う。

ハンス「Ausbilder : haha! Nostalgieisch : :
naja, es ist ein besserer Weg, diese S
ituation zu berwinden : : oder?

〔教官か : : ハハ！懐かしいな : : まあ良いそれよりこの状況を打破する方法だが : :
ん?〕

ハンスが、言おうとしたところに仲間の騎兵が来る。

騎兵「Generalmajor Hans! !! Es ist ein Not
fall !!

〔ハンス少将!!緊急事態です!!〕

騎兵は慌てて報告しようとする。ハンスは落ち着かせる。

ハンス「Beruhige dich, Krieger ist immer ein
Notfall, beruhige dich und melde dich.

〔落ち着け、戦争なんて常に緊急事態だ、落ち着いて報告しろ。〕

ハンスがそう言う。騎兵は落ち着いて報告する。

騎兵「Jawohl! Sowjetische Truppen haben

erade eine Invasion gestartet. Ein paar
Verteidigungsanlagen haben gescha-
ft, an vorderster Front zu bleiben, abe-
r es ist nur eine Frage der Zeit :.
was sollen wir tun?

(は、はい！先ほど、ソ連軍が侵攻を開始少ない防衛隊が何とか前線を維持していますが
もはや時間の問題です：。我々はどうすればいいのですか？)「

ハンス「Ich verstehe :. ich verstehe, 10%
der Dinge, die sich bewegen können, kön-
nen auf die Verteidigungslinie gelegt
werden, und nach ein paar Stunden wird
der Nebel auftauchen und er wird nicht
in den Hinterhalt passen :. Wenn Sie
Sowjets treffen Soldaten Das kann man
kampflös sagen (der Kommandant Hans Bin-
nerstärker und wir versuchen uns die
e Sowjetunion auszuliefern), und ich gl

aube wir werden nicht machen:
eine Person, schen!

「そうか: 分かった、動けるものは一割を防衛線に回せ、後は市民の避難を、あと数時間したら霧が出て待ち伏せに合わないはずだ:。もし、ソ連兵に会ったら戦わずこう言え(指揮していたハンス・ビナーは死亡し、我らはソ連に寝返ろうとした)と言え、そうすれば向こうも手を出さないと思う:。もし、それでも向こうが攻撃したら市民を一人でも守るんだ、いいな!」

ハンスは、市民と仲間の安全の為に最後の指示を出す。

騎兵「Und was ist mit dem Generalmajor?

(し、少将は?)」

騎兵は、ハンスがどうするか聞くとハンスは笑って答える。

ハンス「Oh, es ist die Aufgabe der alten Soldaten, ein bisschen Nazis zu bezahlen, sei versichert, Haiya !!」

「ああ、少々ナチスの付けを払いに行く、安心しろ払いに行くのは老兵の仕事だ、ハイヤ!!」バシッ!!

ハンスは、そう言って手綱を強く叩いて急いで前線に向かう。

ビス「ヒヒイン!!」パカラッ!パカラッ!

サラ「:・:・ Haiya !!

(「ハイヤ!!」)バシッ!!

オリオン「ヒン!!」パカラッ!パカラッ!

するとサラは、ハンスに続いて行くように手綱を叩いてオリオンを走らせる。

騎兵「Ah!! Oi! Sarah, wohin gehst du !!

(「あつ!!おい!サラ!どこ行くんだ!!」)

騎兵は、そう叫ぶとサラは答える。

サラ「Es tut uns leid! Erst weglaufer, sp

ter jagen!

(「すまん!先に逃げてくれ!後で追いかける!」)

サラは、そう一言言つてそのままハンスに付いて行く。

騎兵「Dieser Idiot :・:・ ich werde dich nie

vergessen!

(「あのバカ:・:・ 忘れないぞ!お前なこと!!」)

騎兵がそう叫ぶとサラは、STGをまつすぐ上げる。

騎兵「:・:・ gewinnen und weglaufer :・:・ hiyah

!!

「.: 勝ち逃げしやがって.: ハイヤッ!!」バシ!!
騎兵はそう言つて別の仲間のところに馬を駆けていくのだった。

ハンス「.: (これで、我々の時代に終焉が訪れるな.: はは、いい人生.: ではないな、少なくとも地獄行きだな.: ん?)」

ハンスは後ろを向くとサラが付いて来ていた。

サラ「Ausbilder !! Ich begleite dich auch !!

(教官!! 僕もお供します!!)」

サラは、ハンスにそう言つて付いて行く。

ハンス「.: Immer wenn ich sterben werde,

laufe ich weg und berlebe!

「.:: 死にそうなときは必ず逃げて生き残るんだ! いいな!」

ハンスは、さらに最後の教えをサラに言う。

サラ「Jawohl!

{はい!}」

サラは、嬉しそうに大きく返事をする。

ハンス「In Ordnung! Dann lade ich dich ein, nimm ein Schwert oder eine Waffe!

〔よし!なら、突撃するぞ! 剣か銃を持って!〕スツ…:

ハンスは、そう言いながらパンツァーファウストを持ち、サラは、STGを持ちソ連軍に突撃する。

ソ連兵「…! Враг, гуа!?

〔…! 敵d、グアツ!〕バスツ!!

ソ連重戦車の近くにいたソ連兵をサラがSTGで撃ち殺す。

ソ連兵「!! К лошади, Гуа!?

〔!! 騎へ、グアツ!〕ドスツ!!

隣にいたソ連兵は、ハンスの速度の乗った蹴りで気絶する。

そして、ハンスは進行中の重戦車に狙いを定める。

ハンス「Panzerfaust, Start!

〔パンツァーファウスト、発射!〕バシユ!!

ポオン!!

ハンスは、パンツァーファウストを撃ち見事敵重戦車を爆破炎上する。

サラ「Du hast es geschafft, es brennt!

「やりましたね！見事炎上ですー！」

サラが、喜んでいとハンスは叫ぶ。

ハンス「Es gibt immer noch Feinde! Schieen!
n!

「まだ敵はいるぞ！撃て！」ポイ、カラン… スツ… ガチャ!!

ハンスは、パンツアーフアウストの筒を捨て、鞍に付いていたSTGを持ち走つてきているソ連兵を狙う。

サラ「Verstehen!

「了解！」ダダダ!!

ソ連兵「Бот это да!?

「うわっ!?!」バスツ!!

サラは、撃ちまくりソ連小隊を迎撃する。

すると…

ソ連下士官「Кажды! Быти!

「全員！撤退！あれが来るぞ！」

ソ連兵たちは森林の中に撤退する。

ハンス「… Hm? Was ist dieses Gerusch?

{::: ん?この音は?}

ハンスが、何故か撤退したソ連兵に少し違和感を感じていると、空から何か聞こえる。
キイイイイイ!!

サラ「Dieses Ger・usch :: auf keinen Fall

{::: の音::: まさか}

この独特な音に聞き覚えのあつたサラは、空を見上げると、大量の流星群のような口ケツトがハンス達の方に向かってきていた。

ハンス「::: Ich bin fertig damit ::: Dies is

tdas letzte Mal, dass es mir leid tut

Sarah

{::: :もう、これでおしまいか::: こんな最後ですまんサラ}

ハンスは、さらに謝る。

サラ「Keine Entschuldigung erforderlich
::: Endlich war es eine Ehre, mit dem L
ehrer zusammen zu sein!

{謝罪は必要ありません::: 最後に教官と一緒にいて光栄でした!}バツ!

サラは、敬礼をする。

ハンス「: ich habe bis zum Schluss mein B

estes gegeben : Sarah Kessed

「: 最後までよく頑張った: サラ・ケセド」バツ!

ハンスも、敬礼する。

そして:

パアン!!パアン!!パアン!!

赤き彗星に、二人の騎兵は巻き込まれ消え去るのだった:

天国

クロノス「: あれ?これ引き分け?」

カール「: 引き分けですね: クロノス様」

カールは、やってしまったのような顔になる。

イヴァン「ハツハツ!!こりや驚いた!まさか引き分けだとはww」

イヴァンは大爆笑する。

モシチ「中々の知識ですな:」

カム「やるじゃねえか」

パラム「凄いですね……」

カール「え、えへへ……」

カールは、嬉しそうな顔になる。

エグ「カール君嬉しそうだね……ん？あれ？サラ!? 久しぶりじゃないか！」

サラ「……え？エグ?…… お前死んだんじゃ……グエツ」

エグは、友達のさらにあつて喜んでハグする。

エグ「そんなのいいじゃねえか！また会えてうれしいぜ！」グツ

サラ「うぐつ…… やつぱりラテン系な君は嫌いだ……」

エグに力強くハグされているサラは物凄くいやそうな顔をする。

ハンス「…… おや？エグ久しぶりだな」

ハンスは、二人の声に目覚める。

エグ「ゲツ!? ハンス教官!? 何であんたが来てんだよ……」

エグは、いやそうな顔をする。

ハンス「ハハ、ひどいなせつかく鍛えてやった恩師が目の前にいるのにその顔はひど

いもんだな」

エグ「うっせ！あんたのせいで、俺のバカンス計画が消えたんだぞ！」

ハンス「だがその分、軍役でモテれたろ？」

ハンスは、少し微笑んで言う。

エグ「… そうだけだよ… はあ… あほくさ… 寝るわ」ゴロツ…

エグは、窓際の近くにあるソファで横になる。

ハンス「… 相変わらずだな」

サラ「そうですね… ん？… ソ連兵…」スツ…

サラは、イヴァンを見つめ剣に手を伸ばす。

ハンス「… おや？あなたはイヴァン大尉ですか？」

サラ「え？」

イヴァン「お？何じやお主わしのこと知っているんか？」

ハンスはイヴァンの事を知っていた。

ハンス「ええ、一次大戦で東部前線で有名人でしたね… 前に一度決闘をしたはずで

すが…」

イヴァン「一次？… あ!?あの時の若造か!？」

ハンス「ええ、あの時以来ですね」

イヴァン「いやあ… 老けたなお前… どうじや？一試合？」スツ…

イヴァンは、ギルバーの鞍から槍を取ろうとするが…

ハンス「アハハ、申し訳ない…… 実は私もう槍は捨てて剣を取りましたので……」
ハンスは、少し残念そうに答える。

イヴァン「そうなのか…… あの時の槍捌きはワシの人生でかなう者はいなかったの
に…… 残念じゃ」(・ω・)

イヴァンは、槍を戻す。

サラ「……」

サラは、カムの顔を見る。

カム「…… あ?なんだテメエ?…… テメエ、よく見ればナチじゃねえか」

カムは、言葉を荒げる。

サラ「…… すまない、ただ何者かと思つてね」サツ……

サラは、構えを解いて落ち着いて話す。

カム「フン」

カムは、顔を逸らす。

パラム「こ、怖い……」ガタガタ……

パラムは、二人のビリついた空気に震える。

モシチ「…… 余り、ケンカしないでくれよ?」

モシチは、二人の相性があまり良くない事にすぐ気づき釘を打つ。

ハンス「…それにしても、真つ白な部屋ですね…ここはどこで？」
ハンスは、イヴァンに聞く。

イヴァン「ああ、ここか？それなら、あの爺口調の青年に聞いたほうがいいぞい」

ハンス「青年…ああ、あの方…では、少し」

ハンスは、クロノスに近づく。

クロノス「ん？どうした？この事を聞きたいのか？」

ハンス「ええ、ここがどこか聞きたいもので…」

ハンスが言うとクロノス一言。

クロノス「チエスしながら」

クロノスは、もはや、チエスしたいおじさんになっていた。

ハンス「ええ、もちろん一勝負」スツ…

ハンスは、クロノスの提案に乗りチエスを始める…

…

…

1945年2月3日

フィリピン・ルソン島 第7騎兵連隊

ドドドドドドド

日本軍の重要拠点マニラにアメリカ第7騎兵連隊が突撃していた。

日本兵「敵だ！敵が来たぞ!!」

見張りの日本兵が騎兵を見つけ大声で叫ぶ。

サン「Ola !! Fall down !!

（オラツ!!倒れろ!!）ザシユ!!

日本兵「ぐはッ!?!」バタツ…

先頭走っていたアメリカ人騎兵のサンは、剣を振り日本兵を切り倒していた。

日本兵「くっ！鬼畜米兵め！死ね！」カチャ！

サン「…」

少し、遠くにいた日本兵が九九式を構えサンを撃とうとするが…

ムーン「Huh !!

（ハア!!）ザグツ!!

日本兵「ガッ!?!」バタツ…

他の方角から来た仲間が日本兵の心臓を一突きして殺す。

サン「It was quite late

〔随分遅かったじゃないか〕

サンは、笑いながら言う。と仲間のムーンは言う。

ムーン「Haha, I'm sorry I struggled a little with Jap's tank and arrived late

〔ハハ、すまんねジャップの戦車に少し苦戦してな遅れて着ちまった〕カチン：ムーンはそう言いながら剣をしまう。

サン「Anyway, the Japanese soldiers here are quite skilled. I shouldn't have been so strong at the time of the previous operation. . .

〔にしても、この日本兵はかなりの練度だな。：前の作戦の時はここまで強くなかったはずなのに。：〕

サンは、日本兵の死体を見る。

ムーン「. . . Maybe Jap also realized that his family in his hometown was dangerous? So he's dying and resisting. . . maybe

that, s why?

「：： たぶんジャップも故郷にいる家族が危険だと気づいたんじゃないか？だから死に物狂いで抵抗している：： だからじゃないかな？」ガサゴソ：： スツ：：

ムーンは、そう言いながら日本兵のヘルメットから家族の写真を取る。

サン「：： then I have to end this war quickly

「：： なら、この戦争をさっさと終わらせないとな」グイツ：：

サンは、そう言いながら帽子を深く被る。

サン「：： （：： 人種は違えどみんな同じ人間：： 教官の言う通りだったな：：）」

サンは、過去を思い出そうとした瞬間どこからか日本兵の声が聞こえた。

日本下士官「全員突撃だ!!」ガタツ!!

日本兵「天皇陛下バンザイ!!」ガタツ!!

突然小隊規模の日本兵が草むらや地面から出てきた。

サン「What !? Where did you come from !? Da
mn !? !?

「なにっ!?!何処から出てきやがった!?!くそっ!?!」スツ：： パアン！パアン！パアン

サンは、M1ガーランドを持ち日本兵を撃ち殺す。

ムーン「Oh no!! That's why Jap is bad for
your heart! Damn it!!

（ああもう!!これだからジャップは心臓に悪いんだ!くそつたれ!!）ガチャ!!バ
ババババババ

ムーンは後ろに回ってサンを援護するためトンプソンを乱射する。

日本兵「ぐあつ!」バタツ…

日本兵「がっ…」ドサツ…

サンとムーンは、何とか銃を撃ちまくって倒していくが…

日本兵「クソツ!!」ピンツ!コツン…

一人青年の日本兵が手榴弾のピンを抜いて雷管をヘルメットで叩きそのままさん達
に向かって走りながらこう叫ぶ。

日本兵「…ぐっ… お母さーん!!!」ダツ!!

突撃してくる若い日本兵は頭の中に母の事を思い出したのか叫ぶ。

サン「… I'm sorry, youth

（…すまない、青年よ）」パアン!!

サンは、青年の言っていることは分からなかったが、何か絶望を感じている青年にサ

ンは謝ってガーランドで心臓を撃つ。

日本兵「うぐつ… ああ…」バタツ…… コロコロ…

最後の日本兵が倒れ安全になったと思つた瞬間サンは何か嫌な予感をして、転がった手榴弾の先を見る。

そこには、火気厳禁と書かれている燃料と弾薬に爆弾等があつた。

サン「!? (まずい!? このままじゃあムーンが… あれは!?… やるしかない!)」

サンは自分はまだ間に合わないと感じ、急いでムーンを助けようとムーンの隣にある井戸に突き落とそうとする。

サン「I, m sorry for the moon!

(ムーンすまん!)」ドツ!!

サンは謝つてムーンを押す。

ムーン「Nah! ?? Hey !?

(なっ!?!ちよっ!?)」グラツ…

ムーンは急にサンに押され、馬から転げ落ちてそのまま井戸の中に入る。

そして…

ポオオオオオン!!

大爆発と火が巻き起こり起き井戸に入っていたムーン以外死亡するのだった…

天国

クロノス「てなわけで、君達にはもう一つの世界で新しい人生を送って馬を繁栄させてほしいということだよ……ほいチエツクメイト」

ハンス「はは、それは中々面白そうですね……それで、私の罪が消えるといいですがね……」

ハンスが、自身の行為に思った事があったのか独り言を言うとクロノスは言う。

クロノス「ダイジョブダイジョブ、ハンスのやった罪なんて僕から見たら原子レベルで小さいからそんな気にしなくていいよ」

クロノスは、ハンスを励ますのか自身のやばい過去を言う。

カム「まあ、よく考えてみれば普通自分の息子食うかよって話だしな」

クロノス「いやあく、あの時は少しイキつてた頃だったからねえくいやあく懐かしい懐かしいwww」

レイ「いや、なにわろてんねん」

笑っているクロノスにレイは突っ込む。

パラム「クロノス様もそんな時期があったのですね……」

モシチ「神も人間なんじゃな」

クロノス「当たり前じゃろ？酒は飲みまくっていたし女だつてレ○プや強姦何でもやりたい放題じゃつたからな、正直今のおぬしらよりぶつちやけ蛮族じゃぞ？」

カール「神怖い」

サラ「…なんか信仰が馬鹿らしく見えてきますね…これだと」

イヴァン「じゃな」

全員が改めて神は以外に屑が多いなど感じ取った…

そんな会話に、サンは目を覚ます。

サン「…ああ、ここは…天国か？」

サンは、目をパチパチさせながら周りを見る。

カム「…ん？なんだ？今度のやつは二頭連れて来てるじゃねえか」

サン「…え？二頭…あれ？何でムーンの愛馬が？」

どうやら、サンの相棒ムーンの愛馬ロアと一緒に来てしまったらしい。

ロア「ヒヒン!!」ガバツ!!

ロアは、ムーンがいないのか大暴れする。

サン「ちよつ!?お、落ち着け!!」スッ、グイ!

サンは、愛馬カローリーナから降りてロアを落ち着かせる。

パラム「お、落ち着いて…お馬さん」スッ…

隣にいたパラムが、ロアを落ち着かせる。

ロア「……ブルル」

ロアは、パラムに撫でられてだけで落ち着く。

パラム「いい子いい子……えくと、名前は……ロア！いい名前だね！」ナデナデ

ロア「ヒヒン♪」

ロアは、パラムに撫でられ喜ぶ。

イヴァン「……こりや、たまげたもんじゃな」

モシチ「ええ、撫でただけで馬が落ち着くとは……あれは、馬の女神ですな」

イヴァン「ああ、美しいだけではなく優しい心を持つているとは……兵士なのもつ

たいないぐらいじゃわい」

モシチ「ええ、全くですな」

イヴァンとモシチは、パラムの特別な能力に感心していた。

ハンス「……さて、クロノスさんこれで後一人となつたが……あと一人は、一体誰な

のですか？後、転生しろと言われてもどんな場所なのですか？」

ハンスは、まだ知らないことをクロノスに聞くとクロノスは答える。

クロノス「あと一人どんな人か……さあ？それは、あいつに任せただけだから俺がとやか

く言う事ではないよ……後、転生する場所は俺にも分からん」

ハンス「そうですか……では、少し準備でもしましょうかね……サラ来い馬の調子を見るぞ」スツ……

サラ「分かりました」

ハンスとサラは転生の為に、馬の様子と装備の確認をしに行く。

パラム「よいしょ……はい、これで大人になりましたよ！」

サン「あ、ありがとうございます……ええと……」

パラム「パラムと言います！これからよろしくね！」

パラムは、笑顔でサンに自己紹介する。

サン「え、あつと……わ、私はサン……サン・ネツアクです」

サンも、おどおどしながら名前を言いパラムに質問する。

サン「あの、パラムさん……ここ何処なのですか？見たところ、ただの真つ白い部屋

としか……後、あの青年は？」

サンは、クロノスの方に目を向く。

パラム「ああ……それならクロノスさんに聞いたほうがいいかと思えます！」

サン「クロノス……ゼウスの父？……え？うそでしょ？」

サンは、またクロノスの方を見る。

クロノス「ハイ」

サン「うそでしょ？」

サンは驚いた顔をする。

クロノス「クロノスダヨ」

サン「……まさか死後に、あの世でクロノス様と会えるとは……はは……」
サンは、笑いながらもクロノスとチエスするのだった……

……
……

1945年3月23日

中国 河南省 騎兵第4旅団

島津「……桜、体調は問題ないか？」サスサス……

島津は、桜の体調がいいか確認する。

桜「ヒン！」

桜は、元気に答える。

島津「そうか… この作戦が終わったら祖国に帰ろうな？桜」
桜「ヒーーン！」

桜は、祖国に帰れることに喜ぶ。
すると…

日本下士官「全員聞け!!」

日本下士官が号令をかける。

島津「…」

島津は、黙って下士官のほうに向く。

日本下士官「只今より！老河口にある飛行場に攻撃をする！この作戦で本土の脅威を取り除く！全員心してかかれ！いいな！」

「応!!」

下士官の掛け声に全員大声をあげる。

島津「… 今日も生き残らないと」

島津は、小さく独り言を言う。

そして、下士官は合図する。

日本下士官「全員拔刀!!」 シャキン!!

「拔刀!!」 シャキン!!

島津「拔刀！」 シャキン!!

全員刀を抜刀して上に上げる。

そして..

日本下士官「..... 全員突撃せよ!!ハイヤツ!!」 バシツ!!

馬「ヒヒーン!!」 パカラツ!!パカラツ!!

日本下士官は、大声で叫びそのまま馬を駆ける。

日本兵「突撃!!」 バシツ!!

馬「ヒヒン！」 パカラツ!!パカラツ!!

仲間の騎兵隊も下士官に続いて行く。

島津「行くぞ!桜!ハイヤツ!!」 バシツ!!

桜「ブルル!!」 パカラツ!!パカラツ!!

島津も続いて馬を駆け敵の飛行場を占領しに馬を走らせる。

中国兵「.....??:日??:来了!!

{??:??:日本軍だ!!日本軍が来たぞ!!}

飛行場に居た見張りの中国兵が攻勢にきた日本軍を見つけ叫ぶ。

中国下士官「什么!?!什么.....大家准?出?!?!快点!!

「何!?なんてことだ… 全員攻撃準備だ!! 急げ!!」

中国下士官は急いで防衛の準備をするが…

日本下士官「ハア!!」ブン!!

日本兵「オラ!!」バツ!!

中国兵「?!!!」

「ぐあっ!!」ザシユ!!

中国下士官「?道…

「ガツ…」バタツ…

中国軍は準備が間に合わずそのまま騎兵の攻撃を受け一瞬で防衛線は機能しなくなり中国軍は飛行場から撤退する。

日本下士官「全員急いでここの防衛をしろ! 中国軍はすぐに反撃しに來るぞ! 空も警戒しろ!!」

日本下士官は急いで防衛を固めて中国軍の反撃に備えていると…

島津「…! 下士官!! 敵爆撃機が、一機來ました!! B29です!」

島津は、飛行場に着陸して來ようとするB29を見つける。

日本下士官「何っ!?… 一機か、なら急いで対空射撃せよ! 逃がしたらこちらの位置が知られてしまう! 撃ち落とせ!!」

日本下士官は、ちょうど対空砲に座っていた日本兵に指示を出して落とさせる。

日本兵「発射!!」ダン!!ダン!!ダン!!

日本兵は、アメリカ製の対空砲でB29を狙う。

ダン!!ダン!!ダン!!ボツ!!!

B29は炎上し操縦が不能になりそのまま滑空して飛行場に落ちようとする。

しかし、不幸にも落ちる方向が島津入る方角だった。

島津「……まずい」

島津は、炎上しているB29がこつちに突っ込んでくることに気づき急いで避けようとするが……

ガツシャアアアアアン!!

一歩間に合わずB29は島津と他の日本兵を巻き込んで墜落しそして……

バアン!!

そして、偶然だったのかB29に入っていた爆弾は大爆発を起こしてしまうのだ
た……

天国

島津「……あれ？何処だここは？靖国か？」

島津は、ゆつくりと目を開けて周りを見ると白い場所に馬の世話をしているドイツ人とハンガリー人に、ロシア人とポーランド人が槍と剣の点検をしたり、イギリス人とフランス人にイタリヤ人が紅茶を飲みながら会話などをしており、フィンランド人とスペイン人が何か本を読んでいた。

そして、目の前にはアメリカ人が青年とチェスをしていた。

サン「……つまり、我々はもう一度新しい人生を異世界で過ごすということですか？」
クロノス「まあ、大雑把に言えばじゃがな……ほい、チェックメイト」トン……

サン「……負けた」

サンは頭が下がる。

クロノス「はは！いいところまで行ってたんじゃがな……おしいな若造！」
クロノスは笑っていると島津に気づく。

クロノス「お！ラストが来たな、待っていたぞ!!」バシバシ!!

クロノスは、肩を叩く。

島津「痛い痛い……あの……あなたは？」

島津は、叩かれた方を抑えながらクロノスの事を聞く。

クロノス「あ？ああ、そうだったな！説明しよう！まずわしの名は……」
クロノスは、島津に自分の事と何故ここにいるのか今後どうなるのか島津に説明する……

クロノスは、島津に説明中……

クロノス「さて、これで説明は終わりじゃ……ほかに何か質問はあるかのう？」
スツ……

クロノスは、島津に質問が無いか聞く。

島津「では、一つ聞きたいのですが……クロノス様が異世界に送るわけではないなら、誰が異世界に送るのですか？」

クロノス「ああ、それは……「それは私が説明しましょう」バン!!

クロノスが説明しようとした途端部屋の扉からダーレーアランが勢いよく開ける。

イヴァン「なんかうるさい奴が来たのう」

ダーレーアラン「誰がうるさい奴ですか老いぼれが」

イヴァン「いや、口悪くない？」

ダーレーアラビアンの口の悪さに流石のイヴアンも突っ込んでしまう。
PARAM「こわい」

PARAMはダーレーアラビアンにビビってしまふ。

カム「気が強いBBA」

カムは相変わらず口が悪いのか自然に悪口を言う。

ダーレーアラビアン「おいゴラア!!誰がBBAじゃ!!」

カム「ヒュ〜♪」

ダーレーアラビアンが声を荒げてもカムは口笛を吹く。

ダーレーアラビアン「まあいいでしょう…では、まず、あなた達を異世界…と言
うより私の世界に送り込むのはこの私で、彼は転生させる人を集めていただいたので
す」

ダーレーアラビアンがそう説明するとレイは聞く。

レイ「そうなのですかなら、貴方の世界はどんな世界なのですか?」

レイの質問にダーレーアラビアンはこう答える。

ダーレーアラビアン「…簡単に言いますと、一次と二次大戦の無い平和な現代で馬
がない代わりにウマ娘がいる世界です」

ダーレーアラビアンの説明に一つ良く分からない単語が出て来て全員頭には?がで

きる。

その疑問に、サラが聞く。

サラ「あの、そのウマ娘とは何ですか？」

ダーレーアラビアンは答える。

ダーレーアラビアン「ウマ娘とは、私の様に馬の耳と尻尾を付けた女性の事です、ちなみに、身体能力はそちらの世界の馬とほぼ同等です」

カール「凄いですね・・・女性の体でそんな身体能力があるなんて・・・」

ハンス「摩訶不思議と言うやつだな」

イヴァン「全くじゃ・・・それで？どうやってそつちの世界に行くんじゃ？」

イヴァンが聞くとダーレーアラビアンはこう言う。

ダーレーアラビアン「こういう風です」パチンツ!!

ダーレーアラビアンが指パツチンした途端全員が馬に一瞬で乗る。

サン「これが神様の力・・・」

エグ「まるでマジックだな」

ダーレーアラビアン「・・・これから、転生を開始いたしますのであまり舌を動かさないほうが身のためです・・・ それでは、新しい人生をお楽しみください」スツ・・・

ダーレーアラビアンは、指パツチンの構えに入る。

クロノス「一応神も空から応援しているぞい！だから、頑張つてなく」フリフリ
クロノスは、そう一言言つて全員に手を振る。

そして…

パチン…

ダーレーアラビアンが、指を鳴らした瞬間白い場所から広い平原に変わる。

カム「…あ？もう終わったのか？」

たった一瞬の出来事で全員が困惑していると…島津は何か気づく。

島津「…いえ、まだ何か終わってないようですね…!?全員後ろを!!」

バツ!!

島津の声で、全員が後ろを向くと…

ドドドドドドドドドド

… 5Mもある波が島津達に迫ってきていた。

全員「…え？」

全員が困惑しているとイヴァンがこういう。

イヴァン「よし！まず今から全員やることじゃが…全身全力で前に逃げろお!!」

バシツ!!

イヴァンの発言に全会一致で全速力で波から逃げることになる…

ダーレーアラビアン「あ、ちなみにこれ転生するための試験ですので頑張ってくださいね」

ダーレーアラビアンは、天の声の様に全員に言うと言うと全員こう答える。

全員「嘘だろ!？」

そう言つて見えないゴールの為に走るのだった…

…

…

ウマ娘の世界

練習レース場

そこには、様々なウマ娘が選抜レースや模擬などの練習をしていた。

マチカネフクキタル「タイキさん!一緒に走りましょう!」

タイキ「オツケー!行きまシヨウ!」

スペ「スズカさん!足の調子は大丈夫ですか?」

スズカ「ええ、スペちゃん心配してくれてありがとう、もう大丈夫走れるわ」

ハルウララ「うらら☆」

そんな活気あふれた場所に、とても濃い霧がかかる……
 ウオツカ「ん？何か霧が濃いな」

ダイワスカーレット「あら？ほんとね？……物凄く濃い霧ね、周りが見えないわね……」

霧の濃さは隣にいるウオツカがギリギリ見えるぐらいだった……

ウオツカ「ほんとな……ん？なんだ？」

ウオツカは、ダイワスカーレットと話していると霧の中から何か聞こえる。

「うお——————！！！！」

ウオツカ「……スカーレット、なんか聞こえねえか？」

ダイワスカーレット「？ 声？……あつ、確かになんか聞こえる……だんだん近く

なってきたわね……」

「うお——————！！！！」

少し声が聞こえるようになった途端少し曇っていた空か一つの稲妻が落ちる。

ゴロゴロ……ドオオオオン！！！！

ミホノブルボン「キャツ!?」バツ!!

ライスシャワー「うわあ!」バツ!!

ウマ娘達は稲妻が落ちてびっくりして屈む。

すると、一つの稲妻が落ち霧の中に落ちたおかげか、霧がだんだん薄くなっていき段々と晴れると何かが見える…

それは…

ドドドドドドドドドドド

走っている新生物に乗っている11人の人だった…

おまけ

主人公の名前年齢と愛馬の名前十一応どんなものを持っているのか（重要そうな物）

1. 日本 島津しまづ 国馬こくま24歳 愛馬 桜 持っている物 刀・99式・旭日旗

2. イギリス カム ダアト20歳 愛馬 ヴイオ 持っている物 クレ

イモア・エンフィールド・イギリス国旗

3. ドイツ（ナチス） ハンス ビナー48歳 愛馬 ビス 持っている物

サーベル（海軍）・STG44+パンツァーフアウスト・ハーケンクロイツ

4. ロシア(ソ連) イヴァン ケテル69歳 愛馬 ギルバー 持っている
 物 槍+シヤシユカ・モシンナガン・ソビエト国旗
5. イタリア エグ ティファレット28歳 愛馬 ヴアルニー 持っている
 物 レイピア・Kar98・イタリア国旗
6. フィンランド カール ケブラー20歳 愛馬 ローザン 持っている
 物 サーベル・モシンナガン・フィンランド国旗
7. ハンガリー サラ ケセド27歳 愛馬 オリオン 持っている物
 サーベル・STG44・ハンガリー国旗
8. ポーランド モシチ ホド67歳 愛馬 モース 持っている物
 槍・Wz 29・ポーランド国旗
9. アメリカ サン ネットアク30歳 愛馬 カロリーナナムーンの愛馬 ロア
 持っている物 サーベル・M1ガーランド・アメリカ国旗
10. フランス パラム イエソド18歳 愛馬 ボン 持っている物
 槍+レイピア・ルベルM1886・フランス国旗
11. スペイン レイ マルクト30歳 愛馬 ラカール 持っている物
 サーベル・デストロイヤーカービン・スペイン国旗

以上計11名となります、覚えてね★

ちなみに名前の小ネタはエヴァンゲリオンのオープニングにある絵あれをググると
名前の意味が分かる。

文字数は40973文字。

第2話 興味ツ!!

あの世とウマ娘の世界の大体分かれ目ぐらいな場所的な位置

ドドドドドドドドドドド
!!!!!!

何もない平原で、5mの津波から逃げている集団がいた。

カム「うおおおおお!!!」なんてこんなことになってんだよ!!!!」

パラム「ヒイヒイヒイヒイ!!波がせまってますううう!!」

ハンス「口を開く暇があったら急いでウマを駆けるんだ!!飲み込まれるぞ!!」

カム「言われなくなつてやつてるっての!!」

エグ「やつぱり神様なんてろくなやつがいねえ!!」

集団の後方は、津波がだんだん近づいていて来るので3人はあまりの恐怖に叫んでおり少し落ちていたのは、ハンスと島津にサンだけだった。

モシチ「大尉!!一体どこまで逃げればいいのですか!!これだと全員波に飲み込まれますよ!!」

イヴァン「どうしよう…ガハハハハ!!」

カム「笑ってる場合かよ!!」

実のところ、どこに逃げればいいのか、まったくわからないのでとりあえずイヴァン達は無計画に、まっすぐに逃げていた。

カール「ど、どどどどどうするんですか!?このままだとまた死んじやうよ!!」

レイ「なら死なない努力をしろ!!とりあえず出口探すんだ!!きつとどこかにあるはずだ!!」

レイの指示で、全員周りを見て出口を探すが…

サラ「…何もないです!!それどころか、動物すらいないです!!」

サン「…あれ?俺たち詰んだ?」

イヴァン「絶対絶命じゃな…ん?」

脱出する手立てがなくなった瞬間、突然霧が濃くなる。

島津「霧?…一体何が…」

イヴァン「…今は気にしている暇はないぞ!まだ、波は来ている!急いで駆けるんじゃない!!」

パラム「うう…:…あ、あれ?なんか、温かくなったような…:」

ハンス「確かに、少し暖かくなったな…:。いったいn(ドオオオオオオオオオオオオ)

突然イヴァン達の目の前に雷が落ちる。

ヴィオ「ヒーーンン!!?!?」グオツ!!

雷に驚いたカムの愛馬ヴィオは、そのまま立ち上がってしまう。

カム「うおっ!!」バタツ!!!

ヴィオの立ち上がりにびっくりしてしまったのか、カムは落馬してしまう。

ドサツ!!

カム「いてててて…ん?なんだこれ?…ウツドチップ?」

カムが、ただの草原だった地面がウツドチップに代わっているのに気づいた瞬間濃かった霧が、晴れてゆく…。その霧がなくなった景色は…

カム「…え?」

そこは、ウマ娘がいる練習用競馬場だった…

トレセン学園

理事長室

理事長「むうく…」

大きな部屋で、頭に猫を乗せている少女が何かに悩んでいた。

理事長「どうすれば、彼女たちに夢を与えられるのだろうか…むうく…」パタパタ…
たづな「理事長、ここは少し休んだ方が…」

疲労がたまっているのを感じたのか緑色の服を着た秘書が、一言言ったその瞬間
バタン!!!

突然理事長室の扉が勢いよく開く。

エアグルーヴ「失礼します！」

入ってきたのは、いかにも女帝という言葉が似合いそうな美しさと強さ持ったエアグルーヴだった。

たづな「どうしましたかエアグルーヴさん…何か問題があったのですか？」

エアグルーヴ「ええ…実は…」

エアグルーヴは、練習競技場に突然謎の服装を着た11人の人と謎の生物が急に現れたことを理事長とたづなに伝える。

たづな「不審者ですか…それなら、警備の人に対応してもらえばいいのですが…謎の生物?…どんな見た目ですか？」

たづなの質問にエアグルーヴが、難しい顔をして答える。

エアグルーヴ「…何と言いますか…四つ足で、私達と同じ耳と尻尾を持っている生物としか…」

理事長「驚愕ツ!! 物凄く気になるぞ! ぜひ私に案内してくれエアグルーヴ!」

エアグルーヴの話の聞いた理事長は、扇子を開いてエアグルーヴに案内を頼むが:

たづな「ですが理事長、もし不審者が襲ってきたらどうするんですか?」

理事長「確かに、少し不安だがそれより興味が勝る!」

自分に正直な理事長は、不安よりウマ娘に似ているところがある生物の方が興味で勝ってしまうのだった。

たづな「... エアグルーヴさん」

エアグルーヴ「はい」

たづな「理事長は、私が案内しますのでエアグルーヴさんは、ここの警備員に通報をお願いします」

理事長の人の一倍... いや、何千倍の興味の熱意を知っているたづなは仕方なくエアグルーヴの代わりに案内する。

エアグルーヴ「分かりました、失礼します...」

エアグルーヴは、そのまま理事長室から出て行くのだった。

理事長「ふむ! 一体どんな生物か... とても楽しみだ!」

たづな「相変わらずですね理事長...」

たづなは、理事長の熱意に頭を抱えるのだった...

練習用競技場

そこは、ウマ娘たちがレースのために練習する場所ではほぼ毎日ウマ娘たちが元気に走っている場所である。

そんな場所に、唐突1人人の軍人と謎の生物が現れたのだ。

当然どよめきが起きる。

「な、何あれ…。」

「ものすごくでかい…。」

「データ照合中… 失敗… 私メモリーに謎生物の情報はない」

「そ、それより… あの動物さんの上に乗っている人… は、刃物持ってるよ…。」

島津 「… これかなり目立ってますよね？」

サン 「だな」

やはり、見慣れない軍服や馬のこともあつてか、周りを見るとものすごく目立っていた。

イヴァン 「ガハハハ!! 別に、目立つことはいいいことじゃないか!!」

カム 「ダメに、決まってるんだろ爺」

イヴァンの言葉に、カムは辛辣な言葉を言う。

ハンス「……時間は……止まってるな」スツ……

腕時計を見ると、針は自分が死んだ時間で止まっていた。

パラム「え!?……ほ、ほんとだ……ううう……せつかく貯めた貯金で買ったのに……」
ハンスの言葉で慌ててパラムは、自分の腕時計を見ると針が完全に止まっておりガラ
スにはひびが入っていた。

エグ「それにしても、ここはどこなんだ? あのクソ女神が言った通りウマ娘がいた
が……まあいい彼女達に直接聞くか……はっ」ペシッ

ヴァルニー「ブルル……」のっしのっし……

エグは、手綱を軽く叩いてウマ娘達の方に向かうと友達サラが忠告する。

サラ「おい、エグ!一言言っておくがナンパなんてするなよ!」

エグ「え、な、ナンパなんてしないよ」

サラ「おいコラテメエこんな状況なんだから、こうゆう時は真面目にやれよ!」

エグ「ええ……別にいいじゃん……イタリア人はナンパとS○Xしないと生きてい
けないだから……」

パラム「ええ……」

エグの言葉にサラとハンス以外困惑する。

ハンス「エグ、一応女性もいるのだから言葉に気を付けるんだ」

エグの教官だったハンスも流石に釘を刺す。

エグ「ハイハイ、分かりましたよハンス教官…ハイヤ」パシッ!

ヴァルニー「ふん!」ザッザッザッ…

エグとヴァルニーは、そのままウマ娘達の方に走って行く。

ハンス「済まないな…彼は昔から心に正直な子でな…思つた事はすぐに口に出でてしまふんだ…」

パラム「そ、そうなんですか…」

サラ「あいつ女に目が無いですからね…ほら、早速」

エグ「Ehi! Perch non mangi insieme? Ti

trattenerio ☆

〔ねえ!一緒に飯でもどう?ご馳走しちゃうぜ☆〕

「え、あの…その…こ、困ります…」

さつきの忠告はいったい何の意味があつたのかエグは忠告を無視してナンパをしている。

サラ「すみません、少しあいつを絞めます…ハイヤッ!!」パシッ!!

オリオン「ブルル!!」バカラッ!!バカラッ!!

サラは、手綱を強く叩き急いでエグを絞めに行く。

ハンス「相変わらずだな…。」サラ「おい!エグ!!テメエ!!何やってんだ!」

イヴァン「意外に、苦勞してるんじゃないな」エグ「ゲッ!?やべっ…逃げろおおお!!!」

ハンス「ハハ…あれでも、私の教え子の中では五本指に入るのですよ…性格はあれですが…。」サラ「逃げんじゃねえよ!!」

イヴァン「あの性格でか?全く世界は広いのおく」エグ「いやだね!絶対止まったら殺されるからな!逃げるが勝ちだ!」

サン「…おい、爺さん誰かがこつちに来るぞ…どうする?あれだつたらすぐできるが…。」スツ… サラ「ヤロオ…ハイヤッ!!!」バシッ!!!

腰に付けているホルスターにサンは手を伸ばすが… エグ「嘘お!?あいつマジで走らせてるし!!やばいやばいやばい!!」

ハンス「待ちたまえ、相手は子供だ手を出してはいけない」サラ「往生しろ!!」

サン「Yes sir」エグ「イヤアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

島津「…ですが、本当にちっこいですね…隣にいる人は普通ぐらいですけど」サラ「…覚悟はできたか?」カチッ…

カール「なんか、頭に猫乗ってませんか？」 エグ「ちよつと待て!!?何でサーベル出してんだよ!?!死ぬって!!」

レイ「ホントだ」 サラ「ダイジョブダイジョブ少しチクツとするだけだから」

そんな頭に猫が乗っている少女がイヴァン達に近づいてくる。 エグ「いや絶対チクツとするだけじゃあ済まないよね!?!」

理事長「ふむ… 屈強ッ!!想像以上に存在感がありながら美しい!」 サラ「イヤスコシサスダケダヨ」

小さな子供はレイの愛馬ラーカルを見ながら屈強と書かれている扇子を開いて言う。
エグ「嘘をつくな!!」

レイ「(ふむ… どうやら日本語で話しているな… あれ?俺いつの間に日本語を使えるようになったんだ?まあいいや、とりあえず会話に入るとするか…) ハハ、それはどうも彼も喜びますよ… よっ」 サラ「五月蠅いさつさと倒れる」 ドツ!!

馬から降りたレイは小さい理事長に近づく。 エグ「イギヤアアアアアアアアアアアアアアア!!!ブヘ!?!ゴバツ!!!」

レイ「… 見たところ、かなり位の高そうな方だとお受けしますが… 失礼ながらお

名前をお聞かせ願えないでしょうか？」サラ「やっと降りたか」

理事長「承知!!」バツ!! エグ「いや、お前が蹴ったせいで勢いよく落馬したただけであつて自分で降りたわけじゃねえから!!」

今度は、承知の文字が書かれた扇子を勢いよく開く。サラ「なんか文句言ってるけど、大体の原因お前だから?」

秋川やよい「私は、ここの理事長をしている秋川やよいだ!そして、隣にいる彼女が私の秘書駿川たづなだ!」エグ「…いや、あのその… すいませんでした…」

紹介された駿川たづなは、お辞儀する。サラ「はあ… ホントお前、根っからのラテン気質だな」

秋川やよい「次に、君の名前を聞きたいのだがいいだろうか!」エグ「お前も言えたことじゃないじゃん」

レイ「もちろんです、コホン… 私は、テリエル守備騎兵隊長レイ・マルクトと申します!後、彼の名前は、ラカールと言います」サラ「俺は、ただ真面目にやっているだけだ」

駿川たづな「テリエル?騎兵?良く分からない言葉ばかりですね… それに、名前からして外国人と思わますが… 何処の国ですか?」エグ「ホントお前、いつまでたつても優等生だなホント…」

2人共全く効いたことのない言葉に頭が混乱しながらも、レイの出身を聞く。サラ「お前が、だらしなただけだ。ほら、急いで教官の元に行くぞハイヤツ!!」

レイ「スペイン生まれです」 エグ「はあ。ほんと真面目だな。よつと。ハイヤツ!!」

秋川やよい「スペイン。ならば他の人も同じ生まれなのか？」ピシッ!

理事長は、後ろにいたモシチに扇子で指す。

モシチ「私ですかな？」

秋川やよい「うむ」

モシチ「いいや、私はポーランドのワルシャワ出身ですな」

秋川やよい「ふむ。全員バラバラと言う事か。まあいい!とりあえず、詳しいことは学園内で聞くとしよう!ここで話しては生徒に迷惑が掛かってしまうからな!」

イヴァン「確かに、その方がいいのう。だが、馬はどうしようかのう。」

イヴァン達が悩んでいると駿川たづなが使つてない障害コースに指さす。

駿川たづな「それでしたら、今日は使われない障害コースをお使いください」

イヴァン「おお、それはありがたいこやつもいい暇つぶしになるわい!なあ、ギルバー

?

ギルバー「ぶも」

ギルバーは、イヴァンに軽く返事する。

イヴァン「相変わらず愛想が無いのお……モテないぞ？」

ギルバー「フン……」

イヴァン「あ、目逸らした」

そんな馬との会話をしながらイヴァン達は、馬を障害コースに向かう。

そんな動物との会話を二人は遠くから見ている。

駿川たづな「……ウマ娘に似た生物……馬」

秋川やよい「ふむ……これは、世界が驚くぞ……ウマ娘並みの速度がありながら体格はウマ娘の倍以上……知識もそれほど悪くない……とっても面白いものを見つけた……」

これならウマ娘達もさらに練度が上がるかもしれないな……」

理事長とたづなは、新たななる生物の馬がウマ娘にどんな事を起こさせるのか期待するのだった……

小ネタ（主人公たちの名前）

主人公たちの名前の元ネタ

旧約聖書の生命の樹から取った物

言葉の意味を並べると・・・

ケテル（王冠）

ダアト（知識）

ビナー（理解）

コクマー（知識）

ゲブラー（峻厳）

ケセド（慈悲）

ティファレント（美）

ホド（栄光）

ネツアク（勝利）

イエソド（基礎）

マルクト（王国）

こんな感じ

かっこいいよね

それじゃあまた次回会いましょう。

第3話 自由気ままな兵士達!

トレセン学園

応接間

この日、トレセン学園では珍しい客人が応接間にいた。

秋川やよい「待機ツ!!とりあえず君達の身元を確認の為に一旦ここで待つてほしい! 一時的に離れるが、くれぐれも問題を起こさないようにな! (にゃ〜) バッ!

またどこから出したのか、待機ツ!!と書かれた扇子を勢いよく開くながらもイヴァン達におとなしくしているように一言言つてそのまま部屋を出ていく。

たづな「もし、何か問題があればすぐにお呼びください! それでは!」ペコツ! 頭を下げたたづなは、そのまま部屋を出て扉を閉める。

ガチャ! バタン! :

イヴァン「ふい〜! いろいろあつたが何とか転生できたの〜」ポフツ! :

やつと一息できると言わんばかりにイヴァンは、長いソファアに横になつて倒れる。

それと同時にハンス達も肩の荷が下りたのか全員椅子に腰を下ろしたり壁を背にしたりと楽な体勢をする。

島津「そうですね…。いろいろなあつて少し疲れてしまいました。」カチャ…。ポ
フツ…。

刀を椅子に立ててそのまま椅子に座る。

レイ「にしても、転生して最初にやるのが津波から逃げるってあの女神なんなんだ…。死ぬかと思つたぞ…。」

モシチ「全くだ…。あの霧が出なかつたら転生して早々またあの世に逆戻りする羽目になつたわい…。」

サン「ほんと、まつたくだ…。これだと、あいつらに負担がかかるっての…。ん…。ん？あれ？ライター…。ライター…。」ゴソゴソ…。

strikerと書かれた箱から煙草を一本口に咥えて火をつけようとライターを探すが見つからない。

サン「あれ…。あ、しまったあいつに貸したままだったわ…。おい、ライミー火持つてねえか？」

カム「あ？持つてねえよヤンキー」

サン「あら…。年配の私には少し痛い言葉じゃないか」

カム「知るかよ」

サン「かわいくないねえ…。」スツ…。

カムの言葉に少し呆れながらも煙草を啜えたまま煙草の箱をしまう。

サン「んんん… どこか火はないかな」ガタツ… ゴソゴソ…

何が何でも煙草を吸いたいのか応接間にあるテーブルや棚など探しまわっている…

カチャツ… ジュボツ!!

サン「ん? おお、すまないね… スウ… ふう… 感謝するよ日本人… 一本いるか?」スツ…

ジツポライターを出してもらった島津に煙草を一本出す。

島津「遠慮しておきます」カチャン…

サン「あそ… そう言えば名前を言っけなかつたな私は、サン・ネツアクだ覚えてくれ… 一応前世ではマニラで君達の日本兵に自爆に巻き込まれて体がバラバラになって死んでしまったよ! HA☆HA☆HA☆」

自分の死因にサンは面白かったのか大笑いする。

島津「そうですか… あ、私の名前は島津 国馬と言います… 一応私の死因は… B29の爆風に巻き込まれて死んだかと思えます…」

サンの面白さを理解できなかったのか逆に少し引きながらも島津は名前と死因を言う。

サン「島津か、覚えておくとしよう……それにしても、君の馬中々いい足じゃないかどこで拾った？」

煙草を吹かしながらも島津に馬の事を聞く。

島津「私が人生をかけて育てた馬ですよ」

サン「Really? 羨ましいな！」

島津「そうですか？ 騎兵なら自分の家で育てるのが当たり前では？」

サン「いやいやいや……合衆国でもそこまでしないぞ？ 少なくとも俺達第7騎兵連隊は国で育てた馬をもらって調教してから戦場に出るからな」

島津「そうなのですか？」

サン「ああ、合衆国だと徴兵人数が多すぎるからいちいち家で育てるよりも国の運営している牧場で育てた馬を部隊に渡してそこで調教するのが一番いいってことになったのさ」

島津「……アメリカ凄い」

アメリカ合衆国の運用に島津は驚きながらも日本の差に愕然とする。

イヴァン「にしても、綺麗な場所じゃな……クレムリンより豪華すぎないか？ なあ、伍長？」

ソファで寝転がっているイヴァンが天井を見ながら横にいるモシチに話しかける。

モシチ「流石にそこまではいかないかと思いましたが……」

イヴァン「例えじゃよ例え」

モシチ「例えの比較おかしくないですか大尉？」

イヴァンの良く分からない比較にモシチは困惑する。

イヴァン「そうかのお……して、伍長よ」

モシチ「何でしょう大尉？」

イヴァン「前の馬はどうした？死んだか？」

モシチ「……ナチスのポーランド侵攻の際に大鳥からの爆撃で……」

イヴァン「そうか……だから、あの栗毛の馬に変えていたのか……」

イヴァンは少し目を瞑って帽子を深く被る。

モシチ「……一応あの子は彼の息子なので大事に育てるつもりです」

イヴァン「そうか……ん？え!?あの気性難なあいつが息子持っていたんか!？」ガバッ

!!

モシチの前の馬を知っているイヴァンは驚きの余りソファから勢いよく起き上がったモシチに近づく。

モシチ「え、ええ……大尉から彼をもらった後、宿舎に入れたらすぐに子供作りましたね」

イヴァン「ハア……何だつて俺の育てる馬はみんな俺から離れた後まともな性格になるんじゃない？ いじめか？」

モシチ「大尉の育てた馬は全員頭いいので多分……そうかと」
イヴァン「泣きそうじゃわい……」

余りの仕打ちにイヴァンは頭を抱えてしまう……

レイ「……（前大戦の英雄でも苦労してるんだな……）」

遠くから眺めていたレイはイヴァン達の様子を眺めていると……

カム「……った」

壁に背をもたれて立っていたカムは何か一言ぼそりと言つてそのまま扉に近づく。

レイ「ん？ どうしたんだ？ あんた」

隣にいたレイはカムに話しかける。

カム「……腹減つたから……から出る」

レイ「え？……ちよちよちよ……駄目だよ、あの二人を待たないと……」

カム「チツ……うっせえな、飯食つたらすぐ戻つからいちいち口出すんじゃないよ」

ガツ……

口の悪いカムが扉を開けて出ようとするが……

ガコツ……

扉にロックがかかって開かない。

カム「…… ハア〜」カチツ…… スツ……

ため息をついたカムは腰に掛けていたクレイモアを抜きそのまま持ち上げる。

レイ「お、おい…… なんでクレイモアを構えてんだ？まさか、お前…… ぶっ壊す気か？」

カム「なあに、カギをぶっ壊すだけだ問題ない」

レイ「いやいやいやいや…… ダメだつて…… いくら何でもやりすぎだろ!？」

カムの振り下ろそうとする手を止めようとレイは止めに入るが……

カム「だありやあああああ!!!」ブオツ!!!

バギンツ!!!

カムの振り下ろしたクレイモアは見事に扉の隙間に入り込んで鍵を破壊する。

レイ「あああああ!!!こいつやりやがったよ!!!鍵をぶっ壊しやがった!!」

カム「よし!」

レイ「よし!じゃねえよ!?!これどうすんだよこれ!?!絶対なんか言われるよこれ!!」

カム「ああ……」

レイに言われカムは少し言い訳を考える。

カム「…… おいヤンキー」

サン「なんだ？悪ガキ？」

カム「あいつらが来たらなんか適当に誤魔化してくんね？」

サン「誤魔化してって言ってもねえ……」

煙草を吹かしているサンは少し困った顔をしていると……

カム「じゃあ、あとは任せた」バツ!!

カムは、そのままサンに面倒事を丸投げしてそのまま逃げていく。

ハンス「足が速い子ですな……どうするんです？イヴァン大尉？」

パイプ煙草を啜えているハンスは向こうに寝転がっているイヴァンに指示を仰ぐ。

イヴァン「んん……そうじゃな……じゃあ、そこに立ち尽くしているスペイン人とお

嬢ちゃん二人で追いかける……もし何かあったら現行犯で捕まえるんじゃないぞ？」

レイ「え？俺？マジ？」

パラム「え？私がですか？」

イヴァンのまさかの指名に二人とも驚く。

イヴァン「うむ、あの二人が来たら何とか誤魔化すから行ってくるんじゃない」

レイ「え……あ、はい……い、行ってきます！」

パラム「あ！ま、待って下さい！い、行ってきます!!」

二人は慌ててカムを追いかけていく。

モシチ「… 大尉、あの二人でよかったですか?」

イヴァン「いいじゃないかの?あの二人ならあの小僧でも言うこと聞くじやろ…
よっこいしょ」カチャカチャ…

寝転がっていたイヴァンは、のどが渴いたのか起き上がって懐からスキットルを開け
中身を飲み込む。

イヴァン「ブハア!!! В е д ь с а к е о г р а н и ч и в а е т с я в о д к
о й! х о р о ш и й! !! 「やはり酒はウオツカに限るなあ! うまい!!」」ゴクゴク
!!

酒のうま味にイヴァンはスキットルに入っているウオツカを飲み干す勢いで飲む。

カール「も、ものすごい勢いで飲んでる…」

イヴァンの豪快な飲みっぷりにカールはドン引きする。

サラ「酔わないんかな?」

エグ「露助だから大丈夫なんじゃね?」

カール「そんなものなのかな?」

エグ「そんな物でしょ(適当)」

ハンス「エグ、あまり陰口は言うものではないぞ?」

エグの適当な返事にハンスが釘を刺す。

練習用競技場

ヴィオ「もしやもしや…」ブチツ…ブチツ…

ギルバー「…」ジー…

ラカール「♪」トテトテ…

ボン「ZZZZ」

カロリーナ「ヒーン!!」

ロア「ヒヒン!」

障害コースに入っていた馬は寝てたり嬉しそうに歩いたり隣のコースの芝など食べていた。

ウオツカ「…」ものすげー勢いでコースの芝食ってね?あれ」

スカーレット「実は、あの生物は草食系なのかしら?」

遠くから見ているウマ娘達が遠くから馬を見ていた。

マックイーン「私も草を食べたらあの生物のようにスタイリッシュに……」
ゴルシ「いや、そりやねえだろマックイーン」

小さいお嬢様のようなウマ娘は馬の体を見て自分もスタイリッシュなれると思ったのか独り言つぶやくと隣にいた見た目きれいなウマ娘がつっこむ。

ハルウララ「触つてもいいのかな？」

キング「ダメですわよ！ 一体何するかわからないし……」

ハルウララ「そうかな？ …… ちよつとお話してくるねー!!」ダッ!!

キング「あつ！ ちよつと、ウララさん!? 待ちなさい!!」ダッ!!

ピンクの髪をした小さな子が馬に興味があるのか馬に近づいてくる。

ヴィオ「もしやもしや……!」ピーン!!

芝を食べていたヴィオが誰かが来ることに気づいて顔を上げて耳を前に向ける。

ハルウララ「うわく!! 近くで見るとすごく大きいねキングちゃん!!」

キング「え、ええ…… 確かに大きいですわね…… (こ、怖い……)」

ヴィオ「……」ジー…… ヌルウ……

キング「ヒイ!？」

柵の向こうにいるヴィオは二人に近づき……

ヴィオ「スンスン……」

ハルウララ「?」

ハルウララの懐に何かあるのかヴィオは匂いを嗅いで近づく。

ヴィオ「…」パクツ

懐に何かあったのかハルウララの服に甘噛みして出そうとする。

ハルウララ「わっ!服を噛みついてどうしたの?」

キング「う、ウララさん…だ、大丈夫なの?」

ハルウララ「うん!全然痛くないよ!」

服をかまれっぱらしウララに横にいるキングが心配する。

ヴィオ「…」グイグイ…

ハルウララ「?」あっ!ニンジン食べたいの?」

ヴィオ「!」パツ

意図が通じたのかヴィオは噛んでいた服を離す。

ハルウララ「フツフツフこのおやつの人参様に気づくなんてお兄ちゃん中々鼻が利

くねえくそんなお兄ちゃんには一本丸ごとあげちゃうよ!!」ヌツ…

キング「何で、商店街の八百屋さん風の話し方になっているのよ…」

ハルウララの言い方にキングはつつこんでいると…

ヴィオ「♪」パクツ!

ハルウララ「わわっ！全部飲みこんじやったよ！」

キング「な、なんて食欲…」

ヴィオ「ヒン♪」ボリボリッ！！

ハルウララ「すごい美味しそうに食べてるね！」

キング「そうですわね…ん？にや!？」

ヴィオの食欲にドン引きしているキングが何者かの視線を感じてそちらの方を向くと…

桜「(●ω●、) ジーーツ」

ラーカル「(●ω●、) ジーーツ」

ロア「(●ω●、) ジーーツ」

キルバー「…」

キング「み、見られてる…」

一部の馬を除いてほとんどの馬がキングとウララを見ていた。

キング「…に、ニンジンを持ってないわよ」パツ…

ハルウララ「？ 人参ならたくさんあるよ！」ゴソゴソ… ボトボトボトボト…

一体どこに入っていたのかと言えるほどの人参がウララの懐からボトボトと出てくる。

キング「いやいや?!?!? 一体どこからニンジンが出てきているの!?!とゆうよりその人参の量どこからもらったのですか!?!」

ハルウララ「え?これ?セイちゃんからたくさんもらったんだ!」ボトボトボト…

キング「いや、いくら何でも貰いすぎですわ!!」

ハルウララ「そうかなー?あつ!みんなもたべる〜?」

桜「ゞ(○、▽、○)ノ」

ラーカル「ゞ(○、▽、○)ノ」

ロア「ゞ(○、▽、○)ノ」

スぺ「ゞ(○、▽、○)ノ」

オグリ「?…ゞ(○、▽、○)ノ」

キング「いや、何しれつと混じっているのよ」

馬に混じってニンジンを買おうとしているスぺとオグリがいた。

スぺ「え?そこにうまそうな人参があつて…」

オグリ「お腹が空いてしまったから食べたくなつた」

キング「何訳の分からない理由を言っているんですか」

2人の理由に冷静にキングが突っ込んでいると。

ハルウララ「人参美味しいなあ〜」ボリボリ…

ヴィオ「♪」ボリボリ…

キング「人参食べてるし… ああもういいですわ!! 私も食べる!!」

いつの間にかニンジンを食べているハルウララと馬達にもはや突っ込む気が起きるどころか空腹で判断能力が無いのかももうやけくそでハルウララと一緒に人参を食べてしまう…

カム「… 何だあれ?」

レイ「さあ?」

パラム「なんか人参食べてますね」

カム「… とりあえず、ヴィオの様子を見ないと」

馬の様子を見に来た3人はウマ娘がいる練習競技場に入っていくのだった…

一方…

応接間

たづな「……………」

秋川やよい「… 質問ツ!!! いったい何があったのだ!!!」

サン「Ah… When I said open sesame, it end

ed up like this! A h a h a! (開けゴマって言ったらこうなって
しまったよ!アハハ!)

秋川やよい「:・: 肅清ツ! 遺言を忘れずにな!!」

島津「うそでしょ:・:」

カムのせいで二人達はイヴアン達の印象を悪くしてしまったのでした:・:

予告

この小説の主役（予定）

ダイワスカーレット

ウオツカ

テイエムオペラオー

ナリタブライアン

シンボリルドルフ

ウイニングチケット

ビワハヤヒデ

ナリタタイシン

メイシヨウドトウ

アグネスタキオン

マンハッタンカフェ

エイシングフラッシュ

ゴールドシチー

トウカイテイオー

以上14名となります。

ちなみに、この子も追加ほしいと言う方は是非コメントお待ちしております。
それでは、バイバイ（一一）ノシ

第4話 グランダルメの歴史を持つ白き馬と勇ましいス
 ペイン帝国の歴史を持つ馬と、不安定な負けず嫌いのウ
 マ娘と個性豊かなウマ娘

Destination paradis

〔宛先 天国〕

P · r · e, comment vas-tu, m · r · e ?

〔お父様 お母様お元気ですか？〕

M a d e u x i · m e f i l l e, P a r a m Y e s e d, v a t r ·
 s b i e n.

〔私、次女のPARAM・イエセドはとても元気です。〕

S u r l e c h a m p d e b a t a i l l e, j e s u i s m o r t
 u n e f o i s a p r · s a v o i r a i d · u n e n f a n t
 u r l e c h a m p d e b a t a i l l e · D u n k e r q u e,

〔戦場に出た私はダンケルクの戦場で子供を助けた後一度死んでしまいましたが、〕

Par M. Kronos et M. Darley Arabian qui
i. taitient au paradis

〔天国にいたクロノス様とダーレーアラン様によつて、〕

Je vais • nouveau vivre une nouvelle
vie.

〔もう一度新しい人生を送ることになりました。〕

Je suis confus par le nouveau monde,

〔新しい世界に色々と困惑していますが、〕

Je ferai de mon mieux avec mon nouveau
u cheval bien-aimé • Bonnet 10 nouveau aux
amis pour vivre une seconde vie.

〔新しい愛馬ボンと10人の新しい仲間共々頑張つて第二の人生を歩もうと思います。〕

Au fait, qu'est-ce que tu fais maintenant
ant. . .

「ちなみに今何をしているのかと言いますと…」

ゴルシ「へへ〜ん…後で待ったをかけても知らねえからな!!」

カム「おーい、二人とも俺の飯と少ない駄賃の為に頑張れ〜」

レイ「ヘイヘイ…にしても、久しぶりに走るなあ…」

キング「何で私がスタート役とゴール役なのよ…」

マックイーン「ゴールドシツプさん!!スイーツの為に勝ってくださいまし!!」

???「ハア…気分最悪なんですけど?」

ハルウララ「どっちもがんばれ〜!!」

パラム「いづくぞー!」

J'essaie de courir avec ma cavalière.

ウマ娘とレースをしようとしてます。

パラムがカムにいろんな面倒事を押し付けられる数時間前

練習用競技場

ハルウララ「もむもむ…おいしい！」

スぺ「甘みがあつてすごい食べやすいです！」パクパク!!

オグリ「うまい」ガツガツツ!!

ヴィオ「♪」

ターフの上で山盛りのにんじんに食いついている12匹の馬と3人ウマ娘がいた。

キング「ものすごい勢いでにんじんが消えていつてる…」

人数が多く食欲旺盛なだけあったのか人の背丈ほどあったにんじんがみるみる消え

ていく。

ゴルシ「はえ…ものすごい勢いで食ってんな…新種のカバかあれ？」カチツ…ギギギ

…

マツクイーン「いや、カバ要素どこにもないじゃないですか…とはいえ、美しい毛並

みですわね特に、あの黒い毛の落ち着いた動物：相当気品が溢れ出てますわね…

マックイーンの目先には、イヴァンの愛馬ギルバーがいた。

ゴルシ「実は、あの動物内でボスやってんじやね？」ブスツ：モグモグ：

見た目は、巨体で筋骨隆々な体をしており毛並みも艶やかな馬なので、動物内でのボスの風格に、何かを食べているゴルシはそう感じた。

ヴィオ「モグモグ…!!」バツ!!

にんじん食べている最中にヴィオは何かの雰囲気気づいたのか下に向いていた顔を勢いよく上げ周りを見渡す。

ヴィオ「…!!ヒン!!!」ブンブン!!!

見覚えのある軍服と大きな剣が見えたヴィオは喜びの余り尻尾が素早く横に振る。

ハルウララ「んく？あつ！あの時動物さんに乗ってた人だ!!」

キング「…え、あの人たち刃物持っていないません!？」

ヴィオの視線の先を見た二人はエグ・パラム・レイに気づく。

カム「よお、ヴィオ元気してたか？まあ、数分ぐらいしかたつてねえがな」ナデナデ

…

二人を通り過ぎて一直線にヴィオのもとに向かい頭をなでなでする。

ヴィオ「♪」ドスドス…

主人に撫でられうれしいのか軽く頭突きする。

カム「ハハ、甘えんぼだなお前は…だけど今日は甘えさせに来たんじやないんだすまんね」バツ：

本来の目的である非常食をヴィオの乗せてある鞍の袋から探す。

カム「へへっ…少々アメリカ軍からくすねて来たスパムは確かここ…に…？」ゴソゴソ：

生前にアメリカ軍の野営地から大量に盗み強奪した、アメリカ軍のレーションであるスパムを探すカムだが：

カム「…あ？スパムねえぞ？どこ行つた？」

袋に詰め込めるだけ詰め込んだスパムの缶詰が一つもなく空っぽになっていた。

カム「…」キョロキョロ：

誰かに盗まれたのではないかと周りを見ていると…

カム「…おい、そのヘンテコ野郎」

ゴルシ「お？このゴールドシツプ様の事か？」モグモグ：

カム「ゴールドシツプか何だか知らねえが、てめえなにおれのスパム食つてんだ？あ”？」

なんと、ゴルシの手元には開封状態のスパムがあり足元には大量のスパムの缶が転

がっていた。

マックイーン「え!?ちよつ…いつの間にこの量を!」

隣にいたマックイーンは全く気付いていなかったのかゴルシの足元にあるスパムの缶に驚いていた。

ゴルシ「お?ああ、少し興味本位であの袋の中見たらいっばいあつたからもちまつたぜ☆」モグモグ…

カム「勝手に食つてんじゃねえよ、殺すぞ?」カチャ…

ゴルシのふざけた態度に沸点が低いカムは、クレイモアを手に取ると…
パラム「ダメですよ!!」シユバツ!!!

レイ「落ち着けMr」カチャ…

カムが暴れると思つたのかパラムとレイは慌てて槍とライフルを構える…

ゴルシ「うわつ、あれ本物じゃん!」

マックイーン「ヒエツ」

カム「…」スツ…

槍の刃先がカムの首に触れ、後頭部はレイのライフルの銃口が触れており暴れれば殺すと言わんばかりの布陣にカムは静かにクレイモアをしまふ。

パラム「もう…あまり暴れてはいけませんよ!」スツ…

パラムの説教を受けるカムだが…

カム「フン……」プイッ

パラム「むう…ちゃんと人の顔を見て話しなさい!!」ガシッ!!

カム「ブツ!？」

顔をそらしたカムに背の低いパラムがカムの顔を両手で掴んで顔を無理やり合わせる。

パラム「軍人が民間人を傷をつけちゃいけない事を知らないのですか!!」プンプン!!

カム「…すまん」

ほっぺを膨らまして怒っているパラムに、カムはなぜか知らないが素直に謝る。

レイ「まあ、自分の食料を取られる事に不満を表すのはしょうがないですけどね」

パラム「それでも、一般人に剣を向けちゃダメなの!!」

フオローのつもりでレイは言うが、パラムの一喝にレイは素っ気なく謝る。

レイ「あ、はい、すいません」

カム「…もうそろそろ手離してくんね?」

パラム「もう、剣を抜きませんか?」

カム「抜かねえから離せ」

パラム「ん」パツ

剣を抜かないことを約束したカムにパラムは手を放す。

カム「たくつ：はあ：（何で20になつてガキに説教されなきやいけねんだよ：）」

ゴルシ「何ため息ついてんだ？幸運が逃げちまうぞ？」

カム「とつくに無くなつちまつてるよ：それより：」チラツ：

ゴルシ「おん？」モグモグ：

ゴルシの目をまつすぐ見てそのままカムはスパムを返すよう言う。

カム「そのスパム返せ」

ゴルシ「やだ」モグモグ：

カム「なんでだ」

ゴルシ「うまいから」モグモグ：

カム「そうか」

ゴルシ「（。D。）ウマー」モグモグ：

カム「：」

二人の会話のドツチボールが終わつてしまいだんまりしてしまふ。

カム「：おい、ヘンテコ野郎」

ゴルシ「ん？なんだ？」

カムは頭の中で何か思いついたのかゴルシに一つ提案する。

カム「この馬と勝負しねえか？」

ゴルシ「馬？なんだそれ？クトウルフ神話の生物か？それとも、深海生物？」

カム「ただの動物に決まってんだろやっぱお前頭いかれてるんじゃないの？」

ゴルシ「いやあくそれほどでもねえぜ！」

カム「前言撤回していいか？」

レイ「落ち着けて……」

頭の回路がおかしいゴルシにイラつきを増すカムにレイが何とか抑える。

カム「……とりあえず、勝負してそのスパムを返してもらおうぞ」

ゴルシ「ふっふっふっ……ただの人間如きに、この太陽系を支配した魔王ゴルシ様に勝

てると思いかね……ぐへへへ……」

カム「マジでこいつ叩き殺してもいいか？」カチャ……

レイ「だめです」

カム「チツ……」

ゴルシの謎のポーズにカムは剣に手を触れるがレイが止めにかかる。

マツクイーン「……あの、勝負と言いましたがあなた達は一体どうやって私たちと勝負

するつもりで？」

カム「あ？んなもん騎乗して勝負するに決まってんだろ？」

マックイーン「騎乗?…あの動物に乗るですか?」

ゴルシの隣にいる見た目なんかパクパクですわ!!と言いついそうなお嬢様がカムに勝負の内容を聞くが馬に乗るといふ行為に困惑していた。

カム「…馬に騎乗するぐらい当たり前…あ(そういえば、あのクソ女神が言つてたな…この世界は馬がいねえって…)」

あの世にいたとき女神が言つていた事を思い出す。

カム「めんどくせえな…」

マックイーン「?」

カム「…まあ…なんだ、この動物の背に乗れば多分お前達と同じぐらい強くなるって感じで覚えてくれ」

マックイーン「私たちと同じように強くなる…」チラツ…

人がある動物の背に乗つただけでウマ娘と同じように強くなると言われマックイーンは馬の方を見る。

桜「グウ…」

ヴィオ「ヒーン♪」ピョンピョン!!

ギルバー「…」

ラカール「ブルル…」ズリズリ…

ボン「♪」トテトテ：

カロリーナ「？」ジュー

スベ「にんじんあ”げ”ま”せ”ん!!!”!!!」

ロア「：」ジュー

ビス「：」ジュー

ヴァルニー「：」ジュー

キング「な、なんですか：私何も持つてないですつて：ちよつと!!ジャージ引つ張らない下さいまし!!ちよつ：なんで三匹同時なのですか!!!」

モース「ブモ：」トントン：

オグリ「？ なでてほしいのか？」

オリオン「♪」

ハルウララ「わーい♪動物さんの背中たかーい!!」

マックイーン「：」

12匹の馬を見てあまりにも自由すぎる行動にマックイーンは本当にこれで私たちと同じになるのか？と、疑いが出てくる。

マックイーン「ほんとに、あれで？」

カム「うん」

マックイーン「…ま、まあ、その馬と言う者にはきつと個性があるのでしよう…きつと…そ、それで、勝負と言つても誰と誰が勝負するのですか？」

カム「そうだな…じゃあ、フランス人とスペイン人二人でそつちはヘンテコ野郎と誰かもう一人で2対2で勝負だ」

パラム「え!!」

レイ「は？」

まさかの指名で2人は困惑する。

レイ「え？お前が出るんじゃねえの？」

カム「いや、出ないけど？」

レイ「なんでだよ」

カム「俺は、勝てる戦いしか動かないのでね勝てなさそうな勝負や未知の勝負は二人に任せるよ」

レイ「丸投げかよ…」

カム「まあな、でもそのおかげで戦場を生きてこれたのさ」

パラム「人として最低すぎますけどね」

カム「勝てば官軍負ければ賊軍だよ」

レイ「はあ…まあ、俺はいいけどさ…お嬢ちゃんは大丈夫なのか？」スツ…

いろんな面倒事に慣れてるレイは軍帽を深く被りながらパラムの方を見る。

パラム「お嬢ちゃんじゃないです!! これでも1h:20歳だもん!!」

カム「いや、何嘘ついてんだよ」

レイ「しかも、18って言いかけたし」

パラム「う:お子ちゃまじゃないもん!!!」

レイ「お子ちゃまねえ:」ジー:

18歳のパラムを見るレイとエグ

レイ「:」(身長174cm)

カム「:」(身長180cm)

パラム「:」(身長163cm)

カム「:ちっこ」

パラム「う:ぎゅ、牛乳飲めばおつきくなるもん!!!」

カム「その栄養全部胸に吸収されてんじゃねえの?」

パラム「うぎゅ!?!」

カム「というか、その体で18とか詐欺だろ」

パラム「びえつ:」

カム「低身長で見た感じGカップの胸の金髪の18とか夢幻の存在だろ」

彼の性格なのかそれともイギリス人の血のせいなのか……とりあえず頭の中に出てきた言葉をパラムにぶつけてボロクソに叩きまくる。

レイ「もうそこまでにしとけライミー……もう泣きそうになってるぞ」

パラム「うえ……」

カム「別にフランス人なんてボロクソに言ってもどうせすぐ忘れるから問題ねえだろ」

レイ「フランス人に対する偏見がすごいなお前」

カム「イギリス人はフランス人の悪口言わないといけないって旧聖書に書かれているから仕方ないね」

レイ「イギリス人の執念やばすぎだろ」

もはや、ただのギャグになっている二人の会話にゴルシが入り込む。

ゴルシ「おーい！もう一人連れてきたぞー!!」

カム「もう一人か、一体どんなや……なんで袋を抱えてんだ？」

大きく膨らんでなんか動いているはずだ袋を抱えているゴルシが二人の間に入る。

???「ちよつと!!なんで、袋に入れられてんの!!!マジ意味わかんない!!てか、まだネイル渴いてないんですけど!!!」もぞもぞ……

パラム「なんか入ってません？」

ゴルシ「おう！俺の強力な助っ人（了承なし）だぜ！！」バツ！！
ゴルシが、ずだ袋の口を開けて袋を引っ張ると中からツインテールのギャルが出てきた。

トーセンジョーダン「ちよつとゴルシ!!お前マジ何してくれてんの!?!ネイルがだめになつたじゃん!!」

ゴルシ「お?なんだ?宇宙旅行に行きてーのか?いや、今宇宙船貸し出してるから今宇宙に行けねえんだよな」

トーセンジョーダン「今そんな話してねえし、というか、話のつながりおかしすぎでしょ:てか、誰この人達?」

カム達に気づいたトーセンジョーダンは指を指す。

ゴルシ「こいつらは:あく:悪い人だ!」

カム「(・ω・)」「ガオーターバーチャーラソー」

レイ「何ノリノリでやってんだよ」テシツ

意外に悪者ムーブするのが好きなのかカムがゴルシのボケに乗ってレイにツッコまれる。

レイ「はあ:なんか、ここにいと疲れてくるわ:」

カム「ドンマイ」

レイ「お前のせいなんだけど？」

パラム「それより、彼女に誤解を解いた方がいいんじゃない？」

カム「いや、そのままにさせた方が面白くない？」

トーセンジョーダン「馬鹿にしてんの？」

ゴルシ「確かにバカだから仕方ねえな」

トーセンジョーダン「私のどこが馬鹿なの!!」

ゴルシ「…」

鯛焼きは本物の鯛と信じる。

点数がゾロ目になるとテンション爆上がり。

「バク転したら速度上がると本気で信じ込み模擬レース前に3回バク転してそのままレース。」

この薬を飲めば眠くなると言っていただけの栄養剤を渡し飲み込んでそのまま眠る。

ゴルシ「…」

トーセンジョーダン「…え？なんで真顔？ねえ、ちよつと？」

ゴルシ「…あ、そういえばお前が勝ったらスパムを返すとして…あたしたちが勝ったかどうか？」

トーセンジョーダン「え？無視？ガン無視？」

トーセンジョーダンの声にゴルシは無視して、カムと話を続ける。

カム「あー…そっちが勝つたらー…この場にいるやつ全員に何か好きなもの買ってやるとか？」

レイ「ちよつと待ったお前そんな金あんの？」

カム「俺？数ポンドぐらいなら持つてるぞ？」

レイ「…ちなみに俺は7ペセタしかねえぞ…パラムは？」

パラム「9フラン…」

レイ「…」

全員まさかのほぼ金なしでレイは絶句してしまう。

ゴルシ「仕方ねえな…おれとマツクイーンついでにトーセンジョーダンの分だけおごるつてのはどうだ？」

トーセンジョーダン「おいこら、なんで私がついでなん？おかしくない？」

ゴルシ「仕方ないね！」

トーセンジョーダン「どこが？」

ゴルシ「…よし！さつさと位置について勝負と行こうか!!」タッタッタツ…

トーセンジョーダン「無視すんなし!!」タッタッタツ…

2人はそのままターフに向かう。

カム「：じゃあ、俺は向こうで見るから二人とも頑張つてな」フラフラ
後の事は二人に任せてカムはそのままフラフラと観客席に向かう。

カム「スパムスパム♪」

スパムの缶を一個拾つて。

レイ「あの異常なスパム愛なんなん？」

パラム「薬物でも入つてるのかな？」

レイ「かもしれないな：にしても、久しぶりに剣や銃を使わない正々堂々の勝負がで
きるんだ：張り切つていこう：：名前何と言うんだい？」

彼女の名前を知らないレイは名前を聞く。

パラム「パラム・イエソドと申します」スツ：

名前を名乗つたパラムは丁寧で美しいお辞儀をする。

レイ「私は、レイ・マルクトだこれからもよろしくパラムさん」サツ：

パラムからのお辞儀をもらつたレイも丁寧に辞儀する。

パラム「：レイさんつてもしかして、貴族ご出身で？」

先程の言葉や言動と違いレイは、ヨーロッパ伝統的なお辞儀ボウ・アンド・スクレー
プをパラムに見せたことでレイが貴族だと気付く。

レイ「ええ、Vizconde（子爵）程度の家ですが：パラムさんも？」

パラム「私も、貴族で生まれた身ですが、正直ただの肩書きだけで力が全然無いせい
で…周りの貴族と比べて少し白い目で見られている始末ですよ…はあ…」ポフツ…

辛い過去があり苦勞人のパラムはため息をつきながら軍帽を被る。

レイ「まあ、貴族の力が無いと周りからイヤな目線はどこでもありますよ、私の家も
力が無いせいで父からの圧力が凄かったですからね…名誉と力が無いのはほんと辛い
ですよねえ…」カチャ…パチンツ…

パラム「ホントそうですよね…でも、それでも、嫌な目線をされながらも生きなきや
いけないに死ぬなんて…死んだ親に顔向けできませんね…」ザツザツザツ

レイ「一回生き返ったんですから、この世界で何とか生きて何か大きな偉業を出せば、
そのご家族はきつとあなたの事誇りに思いますよ…スウ…ピュー…!!!」

ラーカル「!!」ダツ!!!

なんとなく気持ちかわかるレイは、パラムに優しい言葉を言つてそのまま指笛で愛馬
のラーカルを呼ぶ。

ラーカル「ヒン！」

レイ「よしよし…!!ちゃんと来たな！やっぱりラーカルは頭が良いな！」ナデナデ
…

ラーカル「♪」

レイ「久々にいつぱい走るか？ラーカル？」

ラーカル「フンフン♪」

レイ「フハハ!! そんなに嬉しいか!! よーし! 俺達の一心同体を彼女達に見せるか……
よつと!」

気分がいいラーカルの鞍にレイが飛び乗り手綱を握る。

レイ「それじゃあ、お先に! ハイヤツ!!」パシツ!!

ラーカル「ヒン!!」パカラツパカラツ!!

たづなを叩かれたラーカルは、そのまま勢い良くゴルシ達の元に向かう。

パラム「……よーし! 女だつてうまくいくこと見せてやる!! スウー……

ピーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

気合が入っているパラムは思いつきり大きな指笛でボンを呼ぶ。

ボン「ヒン」トテトテ……

そんな大きく呼ばんでもいいがな……と言わんばかりの顔をしながらボンがパラムの元に来る。

パラム「おお……やっぱり先輩の馬つて、皆頭が良いなあ……羨ましい……」

ボン「……」カムツ!!

パラム「うひゃ!? 帽子引つ張らないで……!!」

パラムの言葉に何か気に食わない言葉が入っていたのかパラムの軍帽を掴んで投げようとする。

パラム「気に食わないこと言ったなら謝るから!!放してー!!」

ボン「…ヒン」パツ

気分が済んだのかそれともパラムの言葉を理解したのか加えていた軍帽を離す。

パラム「うう…何で私ボンにいられてるんだろう…」ひよい

何でボンにいられているのか良く分からないままパラムはそのままボンの背に乗る。

ボン「…」ジー

パラム「ん?あつ、大丈夫だよ今度は戦うわけじゃないから…いや、ある意味戦うのかな?まあ、勝負なだけであつて別に人を殺すわけじゃないから大丈夫だよボン!」ナ
デナデ…

ボン「…フン」プイッ

パラム「あれ?そつぽ向いちゃった…まあいいや!みんなのところに行こうボン!

ヤア!!」バシツ!!

ボン「ヒーヒヒヒン!!」ガバツ!!

たづなを叩かれたボンはナポレオンの絵の様にリアリングして、出走準備しているレ

イの元に向かって走る…

ゴルシ「へへ〜ん…後で待ったをかけても知らねえからな!!」

カム「おーい、二人とも俺の飯と少ない駄賃の為に頑張れ〜」

レイ「へいへい…にしても、久しぶりに走るなあ…」

キング「何で私がスタート役とゴール役なのよ…」

マックイーン「ゴールドシップさん!!スイーツの為に勝ってくださいまし!!」

トーセンジョーダン「ハア…気分最悪なんですけど?」

ハルウララ「どっちもがんばれ〜!!」

パラム「いっくぞー!」

スペ「ゴールドシップさん!頑張ってくださいーい!!」

お昼が過ぎた時間にウマ娘と謎の生物のレースが気になるのか、カムのいる観客席には何でもかんでもトレーニングに生かそうとするトレーナーやウマ娘がいた。

「いったいどんな走りをするのでしょうかね?」

「さあな?意外に亀みたいに遅いんじゃないか?」

「てか、あの白色の動物に乗ってるおねえさん可愛くね?」

「それにしても、あの二人の服装カツコイイですよね!どこのブランドでしょうかね?」

「閃いた!!あの服装は今後の勝負服のイメージにつながるかもしれない!」

「あつたらええけどなあ?多分えらい偶然が重なることが前提やけど」

カム「モムモム:(…グランドルメの歴史を持ったフランス騎兵とヨーロッパの太陽の歴史を持った騎兵ねえ:初めての大舞台でも見栄えと内容は最高だな:後は、この世界のウマ娘に勝てるか負けるかだが:)」プスツ:

スパムを頬張っているカムは、スタート位置にいるパラムとレイがどんな行動に出るのかウマ娘に勝てるか見ていた。

カム「ま、どうせあいつらが勝つことは決まったことだけだな:スパムうつま」プスツ
:モグモグ:

傲慢かそれとも何か確信しているのか、この勝負はパラムとレイが勝つとスパムを口の中に詰め込みながらも勝負を確信していたのだった。

キング「ハア:では、勝負の大まかな内容ですがこのコース一周でいいですか?」

ゴルシに捕まって強制的にスタート役兼ゴール役にされゴールと書かれたプレート
を首にかけているキングは4人に勝負の説明をする。

パラム「aucun problème(問題ありません)」

レイ「Oh no hay problema : en cualquier momento (ああ、問題ない・・・何時でもいいぞ)」

キング「…そ、そうですね…(な、なに言っているかわからない…しかも、なんか雰囲気が変わっていません?)」

2人は集中しているのか思わず自分の慣れた言葉を出してしまう。

ゴルシ「いいねえ…そう来なくつちやな！よし行くぞトーセンジョーダン!!海賊王を
目指すために!!」

ジョーダン「いや、なりたくないし、てかそれ一人しか取れないんじゃないか?」
相変わらずのぶっ飛んだゴルシの発言にツツコミを入れるジョーダンだった。

キング「それじゃあ、始めますわよ!」スツ…

ゴルシの言葉を耳に受け入れず赤色の小さな旗を持っているキングは、大きく腕を上げ旗をまつすぐ上げる。

キング「よい!!」

パラム「…」

レイ「…」

ゴルシ「ニヒヒ…」

ジョーダン「はあ…」

カム「もむもむ…あむっ…もむもむ」

スパムを食べるカム以外全員静かにレースの始まりに注目しており観客席は静粛になる。

カム「:Victory is just around the corner
〔勝利は目前である諸君〕」

カムの小さな独り言を言った瞬間

キング「ドン！」バツ!!

キングの小さな赤旗が振り落とされる。

ゴルシ「いよっしやああああああ!!!」

ジョーダン「よっ！」

パラム「ハイヤツ!!」バシツ!!

レイ「ハアツ!!」バシツ!!

4人同時にスタートし、出遅れがない見事な走り出しでウマ娘と騎兵の勝負が幕を開ける。

ゴルシ「ヘッヘッ今日の気分は晴れなので先頭だーい!!!」グググッ…バツ!!!

パラム「させません」バシツ!!

ボン「ヒン」ドガラツ!!ドガラツ!!

ジョーダン「…(正直、スタート時点でかなりやばめな感じがしたからしばらく後ろに付いていくしかないしよっ)」タッタッタッタツ!!

レイ「…」

ラーカル「フンフン♪」パカラツパカラツ!!

最初の出だしは、ゴルシとパラムの先行争い追い抜き追い越される後方にはジョーダ
ンが二人の争いに巻き込まれないように後方から覗くようについていきレイは、最後尾
に位置しながらも間隔を維持しながら一つのカーブ第一コーナーに入る。

ゴルシ「へっ!いい速さじゃねえか!あたしも足が燃えてきたぜ!!」ドツ!!!

このカーブでゴルシは先頭を取るために走り方を変え体を地面に沿うように低くし
てスピードを上げる。

パラム「速度ごときで先頭を行こうなど甘い考えは通用しません!!進んでボン!!」バ
シツ!!

ボン「ブルル!!」ドガラツ!!ドガラツ!!

ゴルシのスピードはとても速く普通のウマ娘では追いかけていけないがパラムの馬は問
題ないと言わんばかりにゴルシの先を進み第二コーナーに入る。

ゴルシ「何だあれ!?くそ速いじゃん!」

警戒してないとはいえあまりにも速いスピードに驚くが、驚いているのはゴルシだけ

ではない後ろで見ていたジョーダンや観客席にいるトレーナーもパラムの馬から出て来る予想外の速度に驚く。

ジョーダン「マジ!?あれ速過ぎでしょ!」

「なんだあの速度!?!」

「信じられない…第一コーナから第二コーナーを高速で維持して終えるなんて…」

「えらい速いことやな…けど、あの速度を維持するスタミナはあるかねえ?」

レイ「…」

カム「ほーん、白馬のくせにめちやくちやはえーな、もむもむ…ありや、俺たちの中で最高速度はパラムで決まりかもな…もむもむ…」

美しい白馬は見た目とは似つかない速度で走る姿に皆が見とれていると…

トーセンジョーダン「…行くしかないっしょ!!!」ガツ…バツ!!

ここで、トーセンジョーダンはあえて残して置いたスタミナを消費して速度を上げる。

トーセンジョーダン「はああああ!!（ここで、あの白いのに離れ続ければもう負け確定じゃん!!なら今のうちに追いかけないと!!）」ダダダダツ!!

トーセンジョーダンは、急いでパラムから離れないために慌ててスピードを上げて進むが、その慌てている心に一つの不安があった。

トーセンジョーダン「ふうふう…（なんで、後ろにいるあれは速度を上げずに間を保っているの？…少し気持ち悪いけど今は気にしていられないし!!）」

後ろで、速度はできるだけ上げずにただ間隔だけ維持するために速度を上げる以外何も無いレイにトーセンジョーダンは気持ち悪さを感じる。

レイ「…まだだラーカル」

ラカール「ヒン！」パカラツパカラツ!!

彼の目は獲物を狙っているオオカミのように弱っている所、弱点、隙間、抜け目を静かに…けど、すぐに動けるように力を入れながらレイは狙いながら第二コーナーを終えて直線に入る。

カム「もむもむ…（最初の直線だ…どんなふうになるのかな？俺がレイだったらここらで速度を上げてるけど…）」

ここで、カムは今の4人の順番を確認する。

カム「…先頭はパラムに後ろから大体3馬身から追いかけているゴールドシップの真横によく分からんツインテの奴の大体一馬身の後ろにレイか…最後尾からどうやってパラムに届くか見ものだな」パクパク…

スパムを食べながらもカムの目は鋭く観察しており大体の状況を掴めた。

カム「…お、ここでゴールドシップが上がるか」

ゴルシ「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ!!!」ドツドツドツドツドツ!!!
無限のスタミナを備えているゴルシは一直線で踏み込みを変えてパラムに追い付こ
うとする。

トーセンジョーダン「くっっ：はああああ!!!」ザツザツザツザツ!!!!!!
ゴルシに続いてトーセンジョーダンも離れないようにゴルシについていく。

レイ「：」バシッ!

ラーカル「ヒヒッッ!!!」パカラッパカラッパカラッ!!!

カムの予想ではこの直線でレイは速度を上げると予想していたが、そんな動きも見せ
ずまだ間隔を保つために速度を上げるだけだった。

そして、4人は第3コーナーに突入する。

ゴルシ「へっへっ：追い付いたぜ!!」

さすが、無限のスタミナを持つているゴルシなのか、あれだけ足を使っているのにも
関わらず息を一つも切らしていない。

ジョーダン「はあ：はあ：うう：キツツイ!!!」

後ろから、息をだいぶ切らしているジョーダンが追ってきて後ろに付き団子状態にな
る。

ゴルシ「へっへッッ!!!さすがに、ここまで走ってんだ!さすがにスタミナも尽きてん

だろ？」

早い速度を第二コーナーで上げれば普通はラストのカーブでスタミナが切れてヘロヘロになるが：

それは、普通のウマ娘の話であるこの場にいる二匹の生物はスタミナや足場の悪い地形を数百キロ行軍する馬である。

そんな軍馬に最初からスパートをかけていてもへばることない動物がゴルシの目の前にいる。

パラム「私の馬はこんな短い距離で息切れなど起きませんよ？」

ゴルシ「え？」

パラム「それでは、さらばですハイヤツ!!!」

ボン「ヒーヒヒンツ!!!」ドガラツ!!ドガラツ!!

ゴルシの疑問に答えたパラムは隠していたもう一段の足をここで出し第四コーナーに入る前にラストスパートを駆ける。

ゴルシ「マジかよ!!!ここでもう一個か!!ふへへ…ふへへへへへへへへへへ!!!最高にハイつてやつだあああああ!!!」

いくらスタミナがあったとしても足自体の負荷は蓄積され動きたくないとゴルシの足は訴えるがそんなものはどうでもいいと言わんばかりにゴルシは速度を再度上げて

行こうとした瞬間…

レイ「そこだ、行くぞラーカル!!!ハイヤッ!!」スパンツ!!!

ラーカル「ヒーン!!」ドガラッ!!ドガラッ!!

来たここでレイが来た、ゴルシの空いた隙間を見つけ隙を見つけたレイは手綱を叩き
ラーカルの速度を上げる。

ジョーダン「ふえっ!?は、速い…」

ゴルシ「うお!?!」

背後からナイフが突かれたかのように二人はレイの唐突なスピードアップに驚いて
しまう。

レイ「A d i ・ s !!」

速度を上げたレイは二人に言葉を投げてそのまま離れてパラムのもとに向かう為
ラーカルの速度を上げる。

パラム「:!!」バツ!!

先頭でスピードを上げているパラムが背後からの威圧感に気付き後ろを向くと…

レイ「・H o l a ! M u j e r j o v e n !! (やあ!!お嬢さん!!)」ニツコリ

そこには、ニツコリとした笑顔を出しながらも目が笑っていないレイがこちらに近づ
いていた。

ておりとんでもない剣幕で二人に迫ってきていた。

レイ「：フフ：フハハハハ!! 最高だ!! この世界は闘志に満ちているじゃないか!! 最高だ：最高だぞクロノス!!! この戦いに感謝するぞ!!!」バシツ!!

ゴルシとジョーダンの姿を見たレイは笑顔で大笑いしながら叫ぶ、自分の求めていた幻想郷が目の前に見つけた彼はまるで狂った人のような目をしていた。

レイ「だが、物事には終わりがある：最後を決めようじゃないか：なあ、パラム」

パラム「言われなくてもそのつもりでしょ？ それじゃあ、勝利は私がもらいますわ!! ハイヤツ!!」

もうゴールは目の前、パラムはボンにラストスパートを駆ける。

レイ「やれやれ：勝利は簡単に渡さんぞ？ ハア!!」バシツ!!

簡単に勝利を渡す気はない彼はまたスパートを駆ける。

距離は、約3ハロン（600m）

この距離でパラムとレイは最高速度で勝負する。

パラム「負けはしない!!」

最初の3ハロンはパラムが先頭に進んでいく。

しかし、斜め後ろに狂人となったレイが近づいてくる。

レイ「いいぞ!! いいぞ!! その闘士!! その負けず嫌いな心!! 私を楽しませてくれ!!」

狂人が叫びながらもゴールまでの距離は残り500m

レイ「さあ!!行こうか!!勝利のラインに!!」スパアン!!

ラーカル「ブルルッ!!」ドガラッ!!ドガラッ!!

勇ましい力を秘めているラーカルにレイはスタートを入れパラムを追い越す。

パラム「クッ…」

残り400m

パラム「うう…」

レイに先を追い抜かれたパラムは意気消沈になりそうになるが…

ボン「…フン!!」ダッ!!!

パラム「うあっ!?!ぼ、ボン?」

ボン「ブルル…」チラッ…

チラッと覗くボンの顔は、勝手に諦めんな嘯むぞこの野郎と言わんばかりの目をパラムに向ける。

パラム「…フフ、そうだね、嘯まれるの嫌だから諦められないね!じゃあ、行こう!!

ボン!!」

ボン「フン…」グッ…ドガラッ!!ドガラッ!!

ここだけは、ボンの言っていることが分かったパラムはそのままボンに勢いを駆け

る。

残り200m

レイ「…さて、意地の見せ所だな」チラツ：

レイは気づいていたのか後ろからパラムの馬が近づいてくる。

パラム「太陽の使者よ!!あなたに敗北と言う死を届けに来ました!!」

流石フランス人か戻ってきた最初の言葉が死を届けると言う。

レイ「!?…フフ：Interressante !! Pru・ballo, chico

rana !! (面白い!!やってみろカエル野郎!!)」

まるでお返しと言わんばかりかパラムの言葉にレイも暴言で答える。

その暴言の返事にパラムはこう答える。

パラム「Je vais le faire, alors meurs !! Le

gars de la paelle !! (やつてやるから死ぬ!!パエリア野郎!!)」

そんな返事にゴールまでの距離は100m

パラム「Allez Bon, faites gloire de la France

ce !! (行けボン!!フランスに栄光を示せ!!)」

レイ「La victoria es en manos de España

a! (勝利は我らスペインの手に!!)」

この残りの距離での主役はレイとパラムだけかと周りは思うだろう…しかし、勝負と
言う者は必ず二人だけではない全員が主役だ、そう後ろに追って来る個性派の黄金と負
けず嫌いのギャルも主役なのだ。

ゴルシ「追いついたぜ!!」

レイとパラムの間にゴルシがヌルツと入り込む。

ゴルシ「最高だぜ!!今までの中で一番プラスチックンが上がつてくるぜ!!ハッ!!
ハッ!!」

痛みがゴルシの体を襲うのか息が切れていく。

ジョーダン「ハア…ハア…ハア…マジでこんな場所で大負けしてギャルのメンツ潰されてた
まるかああああ!!」

パラムの斜め後ろに完全に疲労状態のジョーダンが気合と根性でパラム達の隣に並
ぶ。

ほんの一瞬の油断も許されない100mに観客やウマ娘が注目する…

うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!

4人の本気の体の中から出てくる叫び声が周りに響きながら…

ゴール線を全員踏む。

カム「…モムモム…ゴクン…ふう…面白い勝負だったな」ポイツ!!

カラン

カラン…

スパムを食べ終えたカムは、缶をポイ捨てしてそのまま歩いて4人に近づく。

「さ、3ハロン32秒台…だと?」

ストツプウオッチを持っていたトレーナーが驚きの余り震えていた。

「嘘だろ?! 32秒台って…ごく稀にしかない存在だぞ?!」

「えらいことになりましたなあ…」

客席にいるトレーナー陣は勝負の歓声より驚きが強かった。

スぺ「す、すごい…あのゴールドシップさんが負けるなんて…」

オグリ「あの白いのとっても速いな」

ハルウララ「かつこよかった!!」

ウマ娘側も歓声と驚きが混じっていた。

そんなカムはゴールドシップの目の前で止まる。

カム「おう、ヘンテコ野郎…いや、ゴールドシップだったな」

ゴルシ「ぜえ…ぜえ…どうだ? 面白…かったか?」ニッコツ

痛みで息を切らして倒れているのに満面の笑みをカムに向ける。

カム「ああ、意外に面白かったぜだが、残念ながら勝負は俺達の勝ちだ飯は貰って行

くぞ」

ゴルシ「し、しょうが…ねえ…なあ…ふう…」

カム「…ああ、そうだこれやるよ」スツ…

ゴルシ「お?…これ…」

カムから水筒と11ポンドを貰う。

カム「それで、お前とあのツインテの体を労わってくれ」

ゴルシ「へっ…お前実はいいやつか?」

カム「さあな? たまたま懐に現金があったから渡したただけだよ」

ゴルシ「…恩は返すぜ…大体100年後ぐらい」

カム「すまんが、俺はただの人だから後50年しか生きれねえから恩はいらねえぞ…

じゃあな」

ゴルシから離れパラムとレイの元に歩く。

カム「お疲れ、レースの感想は?」

レイ「うん…まあ、一着になりたかったがギリギリタイミングがズレた事が悔しいぐらいかな?」

カム「そりやそうだ、あんなギリギリじゃあ負けるのは当たり前だぜ?」

レイ「そうだね、またの機会があったら勝ってみたいかな」

カム「大丈夫だ、ここは戦場じゃねえすぐに次が来るさ…そっちはどうだ?」

パラム「私ですか？」

馬から降りているパラムに声をかける。

パラム「…うくん…一着になれてうれしいことぐらいですかね？」

カム「なんだ、随分あつけない言葉だしてるじゃないか」

パラム「…初めての小さな栄光に実感が湧かないんですよ」

カム「そうか…ま、それならそれでいいか喜ぶのも考えるのもお前の自由だしな」

レイ「そうですね…それより、お迎えが来ましたよ」

カム「あ？」

レイの目線の先をカムも続いてみると…

エグ「迎えに来たぜー」

サラ「応接間で理事長がお呼びです」

エグとサラが、3人を迎えに来たのだがカムはあることを聞く。

カム「…なあ、その二人」

エグ「おん？」

サラ「何でしょう？」

カム「…何でたんこぶが出来てんの？」

明らかに二人の頭に膨らんだたんこぶが出来ていた。

エグ「：お前のせいで殴られたんだよちきしょーめ」

カム「ご愁傷さまだこと」

エグ「殺すぞこの野郎」

サラ「ちなみに、島津さんとサンさんとイヴァンさんハンスさんは関係ないとして免除されました」

カム「いや、ヤンキーに関しては関係あるだろ？」

サラ「類いまれな会話術で見事に私達がやられましたね」

カム「あいつやべえな」

エグ「まあ、元凶のお前も大概だけどな：それより早く戻るぞ」

カム「ハイハイヒュ〜♪ヒュ〜♪」

集まった5人はそのまま元の場所に戻るのだった：

予告

追加したいキャラ（絶対出るとは言っていない）

カレンチャン

ゴールドシツプ

トーセンジョーダン

スペシャルウィーク

オグリキャップ

メジロマツクイーン

サイレンススズカ

キングヘイロー

マーベラスサンデー

マチカネフクキタル

ダブルジェ…ツインターボ!!!

マチカネタンホイザ
イクノデイクタス
ダイタクヘリオス
メジロパーマー
メジロドーベル
メジロアルダン
メジロライアン
メジロブライド
シリウスシンボリ
キタサンブラック
サトノダイヤモンド
ハルウララ
スーパークリーク
タマモクロス
ヒシアケボノ
エアシャカール
ライスシャワー

マヤノトツプガン

タイキシヤトル

グラスワンダー

エルコンドルパサー

フジキセキ

マルゼンスキー

ミホノブルボン

スイープトウシヨウ

ニシノフラワー

ハッピーミーク

ビターグラッセ

リトルココン

桐生院葵

以上数十名です。

え？何でこんなに書くかって？

失踪対策だよ♡（自分の首を絞めていくスタイル）

まあ、とりあえずこの小説では可能性は低いですが出てくるかもしてないキャラで

す。

つまり、この中に出てこなかった子は出ないですねはい。

もし、出してほしい方がいましたらコメントでお待ちします。

第5話 選択ッ!! 君達の職業!!

応接室

そこには、理事長の秋川やよいが椅子に座っておりその後ろにはたづなさんが立っていた。

秋川「確認ッ!!君達(5人不在)の身元確認を終えたぞ!!」バツ!!

いつもより元気な調子で確認ッ!!と書かれた扇子を広げる。

イヴァン「ほおくもう終わったんか…で、どうじゃった?身元確認は?」

葉巻を吸いながらもかなり速い身元確認に驚きながら秋川に結果聞く。

秋川「うむ!!全く分らなかった!!」

まぶしいほどの笑顔ではっきりと結果を伝える秋川に思わず島津がつっこんでしま
う。

島津「それ自信を持って大声で言う事ですか?」

秋川「そうだ!!」

島津「そうなのですか…」

食い気味にはっきりと返事をするので、困惑してしまう。

ハンス「とは言え、まあ、我々の身元が無いのは分かつていいいた事ですがね」
モシチ「そうですね」

元の世界では死んでそして、神から良く分らん転生をさせられたからもちろんここに居る軍人たちは自分たちがそもそも存在していない事は分かつていた。

カール「それで、この後僕達をどうするのですか？」

ハンス「もしかしたら、アウシュビッツで強制労働させるために送られるのでは？」
イヴァン「いやいや、特戦隊に捕まってシベリアに送られて木を数える仕事とかさせられるんじゃない？」

サン「強制逮捕で牢屋にぶち込まれて法的に権利全部剥奪して路頭に迷わせるとか？」

この三人言ってる事怖すぎんだろ。

島津「いやいや…まさかそんなことするわけ…」

たづな「そうですね、この後皆様にはシベリア送りにさせていただきますね♪」
カール「え」

島津「うそでしょ…」

え？本当に？遺言書いておこうかな…

たづな「冗談です♪」

島津「冗談…」

言い方が冗談っぽく無いから本当だと思ったわ、怖すぎるよこの人

サン「中々きついジョークだな、あれか俗に言うシベリアンジョークってやつか？」プカ

イヴァン「シベリアにはジョークを言う人間は雪の中に埋もれているがな!!ガハハハハハハ!!」

カール「シベリアよりフィンランドの雪の方が辛いですけどね」

島津「その張り合い意味ありますか？」

相変わらずサンさんは紙タバコを吹かしながら軽口を放つ。

ハンス「先ほどは冗談として、我々はどうするのですか秋川理事長？」

秋川「回答ッ!!それについてはたづなが説明する!たづな頼んだぞ!」

たづな「はい!それでは、先ほどハンスさんが質問した今後の事についてですが…」

島津「…」

カール「ゴクン…」

イヴァン「ふむ…(サクツ)お、この菓子うまいな」

サン「ふう…」

全く緊張感が無い空気にたづなが答える。

たづな「皆様には、こちらの学園で専属のトレーナーにさせていただきm（却下）あら？」

イヴァン「んん…ワシらが教える立場になるのは死んでも御免だ」

さつきまで横になっていたイヴァンが体を起こしさつきまで優しい顔から鋭い目つきになって変わる。

ハンス「同感です」

モシチ「私もです大尉」

イヴァンに続いて年寄りたちはたづなの提案に否定する。

たづな「…一応お聞きしますが、理由は？」

イヴァン「若い奴は問題ないが、年寄りにはあの純粋な子達を育てるのは正直無理じゃ知識と癖が身に染みついておる、そんな奴を教壇に上げるのはハッキリ言つて無意味でありながら時間の無駄遣いだ」

知識と癖…多分人を殺す事だろう。

イヴァンさんやハンスさんにモシチさんはだいたいぶ年を取っている…人を殺すことが常識と感じる程だろう。

ハンス「大体、我々は部外者であり、この世にはいない者だ警官に捕まってしまうぞ？」

秋川「看過ッ!!それについては問題ない!秘密裏に君達の戸籍を強制的に取っておい
たぞ!」

ハンス「:秋川さん、貴方は一体何者ですか?」

秋川「愚問ッ!!私はただウマ娘に夢と希望と勇気を提供するただの学園の理事長だ!!
わっはっはっ!!」

ハンスの疑問に大声で笑顔で答える。

カール「とは言え、秋川さんのおかげで牢屋にぶち込まれなく済みますね!」

サン「そうだな:(まあ、俺らの首は完全に彼女が握っているって言うような
もんだけどな:)」プカッ

ちなみに秋川理事長は戸籍を使って脅すことは全く考えていません。

たづな「:戸籍上等の問題はすべて理事長と私が秘密裏に処理しておりますので、こ
こで日常生活を送っても構いません:それで、トレーナーになることは:」

モシチ「それはそれとして拒否していただきます」

たづな「何故?」

モシチ「私達は彼女達の事は全く知らない:それどころか、この学園の事すら知らな
い:教えようにも教えられないものですよ」

秋川「むむっ!驚愕ッ!!本当に何も知らないのだな:」

島津「ここがどこかもあんまり分かりませんからね」

秋川「ふむ：：そうか：：なら、いきなりトレーナーになれと言っても出来ないわけだな！」

島津「端的に言えば」

秋川「では、知識を着けたらトレーナーになつてくれるのだな？」

イヴァン「考えておきましょう」

あ、これ絶対考ええると言つてやらない奴だなイヴァンさん

秋川「うむ!!変更ツ!!では、君達をトレーナーにするのではなくしばらく2か月この職員として働いてもらおう!!」

サン「それあれか、働かざる者：：何だっけ？」

島津「食うべからずです、どこで覚えたんですか？」

サン「捕虜にした日本人から少しな？まじめに働くもんだからなんではたらくんだけ？つて聞いたらさつき言葉の言葉を言つてな」

島津「：：そうですか」

秋川「ゴホンツ!!続けて構わないかな？」

島津「！ どうぞ」

秋川「うむっ!!では、君達には2か月この学園の職員として働くことし!その後再度

2か月後この場所で君達がトレーナーになるか聞くとする!!これでいいな!!

イヴァン「面白そうじゃないか、なあ!軍曹」

モシチ「ええ、そうですね大尉」

カール「学園かあ:田舎の僕に務まるかなあ?」

サン「なあに、ケンタツキーのド田舎に比べたら北歐なんざマシ見えるぞ」

カール「そうかなあ?」

島津「まあ、何とかなると思いますよ」

ハンス「まともな教育が出来ればいいが:」

少々不安の声が出てくるが、みんな学園の職員になる事は否定しなかった。

秋川「決定ッ!!とりあえず!この場にいる君達は合意を得て何よりだ!!」バツ!

いつの間にか変えたのかまた扇子を勢いよく開いて決定ッ!!と書かれた文字を見せる。

相変わらずその扇子をどうやって変えているか気になっていると:

グウ:

サン「ん?」

イヴァン「お?」

ハンス「む?」

あれ？なんかお腹が鳴ったらなんか…い…し…

島津「…」バタツ…

カール「…え!?!」

秋川「なっ!?!」

突然島津のお腹の虫が鳴った瞬間突然島津が倒れてしまう。

秋川「たづな!!急いでAEDを!!」

たづな「はい!!」

サン「おい!!シマズ!!どうした!?!」

急に島津が倒れたので窓の傍にいたサンが慌てて煙草を捨てて島津の上半身を持ち上げる。

サン「な…軽い…まさか!?!」バツ!!

太平洋前線で何人もの日本兵と会ったサンはあまりにも体が軽い島津に悪い予感を
感じ慌てて服をめくると…

サン「おいおい…ガダルカナルの兵士よりガリガリじゃねえか!」

島津の体は肉どころかもはや骨と皮だけの体になっていた。

ハンス「栄養失調…か?」

サン「ああ、太平洋にいた日本兵によくあつた状態だから見覚えがあるが…こいつほ

どの状態は見たこともねえ…おい!! 島津!! 聞こえるか!!」

島津「…うあ?」

サン「の声に島津は聞こえて意識が朦朧としながらも瞼を開ける。

サン「意識はあるか? ちよつと待てよ…」ガサゴソ…

慌てて腰のポーチから缶詰と謎の白い箱を取り出す。

サン「取り合えずこれを食べえ!!」ガツ!!

島津「グファ!?!」

カール「ちよちよちよ!?! 何それ!?! 何を島津さんの口に無理やり突っ込んだの!?!」

サン「クソまずいチョコレート、Dレーションだ!!」

秋川「待て待て!?! いくら何でもその大ききで入れてはいかんだろ!?!」

取り出した四角い大きなチョコレートを島津の口の中に強引にねじ込んで強制カロ

リー摂取させるが、余りにも絵面がひどいので秋川理事長が止めに入るが…

サン「だまらっしやい!! とりあえずこいつの口の中にカロリーをねじ込む!!」バキッ

!!

サンの強制カロリー摂取は止まらない、今度は缶詰の蓋を開けて何かを取り出す。

サン「今度は意外においしい仔牛のミートローフだ!!」グイッ!!!

島津「モゴッ!?!」

イヴァン「なんじゃこれ拷問？」

ハンス「親衛隊より激しいですねこれ」

モシチ「並の人なら死んでますねあれ」

少し遠くで眺めている3人はサンの拷問を見ているとカールがツツコム。

カール「いやいや、そこで談義している場合じゃないでしょ!!」

イヴァン「ハッ!!そうじゃった!!」

ハンス「そうだったな」

モシチ「忘れていた…」

2人がハッ!!として気づきサンを止めるかと思いきや…

イヴァン「じゃあ、わしはこのチーズとデカイハムを…」

ハンス「私は、このライ麦パンとキャンディーに角砂糖を…」

モシチ「では、干し肉と塩漬けキュウリを…」

カール「何でそっちも拷問する方になってるの!？」

まさかの悪化する方である。

カール「理事長さん!!助けてください!!これだと島津さんが食べ物で窒息して死ん

じゃうよ!!」

島津「モ、モゴ…」

秋川「そうだな…救助の為に致し方ない…私も手伝おう」スツ…

そう言つて取り出したのは、二本のバナナを取り出す。

カール「え？」

え？まさかの行動でカールは思考停止してしまう。

カール「…まともなのは僕だけか!!」（涙）

まさかの正常な人がいないのでカールが絶望してしまう。

島津「そ、そんな事言っている暇があったらすく喋っている暇があるならソーセイ

ジ食え!!」モガッ!!」

彼らの善意(?)はまだまだ続く…

学園内

そこには、5人の軍人が応接間に向かって歩いていった。

レイ「にしても、この学園は広いなあ……どれくらいだろうな？」

キヨロキヨロと窓から顔を出して学園を見ているレイはこの学園の広さに感心していた。

パラム「ベルサイユ宮殿程とか？」

サラ「いえ、それよりも広いかと思えますよ」

エグ「畑やら牧場とかあるからな、とは言え彼女達が学ぶこの場所とあの競技場だけでも相当広いからなあ、畑と牧場を除けば流石にベルサイユ以内かと思うけどね」

パラム「へー……エグさんってパスタ野郎の癖によく私達のこと知ってますね？」
ナチュラルにエグに対する悪口が凄い。

エグ「ハツハツハー!!美人に何気に悪口言われて泣きそうだけ!畜生!」(涙)

パラムに悪口言われて涙を流すエグにサラはやれやれと言わんばかりにため息をつく。

サラ「ハア……大体今までの行動で信用が無いんだよ……いい加減そのラテン気質を直したらどうだ？」

エグ「断る」

サラ「融通が利かないな……お前は……」

エグの硬い意志に弾を抱えるサラ、そんなエグは笑いながら話を続ける。

エグ「伊達にあの爺から耐えてんだぞ? そんな簡単に曲げれると思ってるん?」
サラ「はいはい…ハンス教官から教わった頃から全く変わんないだったなお前は…V
a j o n m i r t e z a s r c a p r o m : : (何でこんな奴が相
棒なんだか…)」

呆れかえって逆に安心してているサラ

そこに、一人の男が横から入る。

カム「! おい、お前」

サラ「…僕の事かい?」

カム「ああ…少し聞きたいことがあつてな」

突然横からイギリス人のカムがサラに話しかける。

カム「お前ハンガリー人か?」

サラ「む? 良く分かったね君もハンガリー人か?」

見た目はナチス親衛隊の制服に言葉もほとんどがドイツ語たまに出てくるハンガ
リー語、ドイツ人と間違えられても仕方が無いほどだ。

そんな見た目に騙されずハンガリー人だと見抜いたカムが同じ出身だと思つたサラ
が出身地を聞くが…

カム「いや、イギリス人だ」

サラ「え？ハンガリー生まれじゃないの？」

カム「すまねえが、俺は言葉を知っているだけでハンガリー生まれじゃない」

サラ「そうなのか……てつきり同じ生まれがいたと思つたのに……」

あからさまにガツカリと顔を下げる。

カム「がっかりしているところすまんが、もう一つ聞きたいことがある」

サラ「何ですか……」

カム「……何で親衛隊に入ったんだ？」

サラ「……」

カム「あの狂つた狂信者共の集まるちよび髭野郎の護衛に何で入つた？」

サラ「そりゃあ、簡単ですよ」

何だそんな事かと顔をしたサラがカムの質問にこう答える。

サラ「ハンス教官に助けてもらったからですよ」

カム「……あのドイツ人か」

サラ「ええ、当時路頭で迷っていた僕とエグをハンス教官は助けてくれたのですよ」

今でも彼は当時の記憶を思い出す。

1922年

ドイツ国

ヴァイマル共和政

ベルリン

当時のドイツは第一次世界大戦の敗戦の責任を負っており新政権の発足当時は混沌とカオスに極めていた。

そんな、混沌とカオスの中で僕とエグは二人で必死に生きていた。

ダダダッ!!!

「Hey !! Wa r t e !! V e r d a m m t e s K i n d !! (おい !!
待って !! くそ餓鬼!)」

エグ(当時5歳)「E h i , a s p e t t a , p o r c o !! (へっ! 待つかよ豚野郎
!!)」

ライ麦パンを大量に抱えている当時幼かったエグが太ったコックから逃げていた。

ちなみに、当時のドイツはハイパーインフレーションを起こしており、パン一つ買うのに紙袋に大量に入れたマルク札で何とか変える程度だった。

さらに、その年に右翼左翼の闘争で政治機能はほぼ動けない状態であり失業者もあふ

れていた。

そんな中に孤児として生きる僕達は犯罪に手を染めて何とか一日を生きているほどの生活だった。

エグ「Sara!! Ora!! Tirare!! (サラ!! 今だッ!! 引つ張れ!!)」

サラ(当時4歳)「Igen igen!! (うん!! えい!!)」グイツ!!

隠れていたサラに合図を送ってひもを引つ張ると…

「Wow! Aber die Ratten!? (うわっ!? ネ、ネズミ!?)」

上からバケツ中に満載したネズミが落ちてくる。

ハハッ!! ボクミツ〇ーマウス

コマギレニシテヤル!!

エグ「ahahaha!!! sporco!! (ハハハッ!!! 汚ねー!!)」

サラ「Jaj, ne!!! never, fussunkel! Elkapa

rendr: (わ、笑つてないで逃げようよ…警官に捕まっちゃうよ…)」

ゲラゲラ笑っているエグを僕は慌てて逃げようと促す。

エグ「Esatto!! Scappiamo mangiamoris!!

(そうだな!! ちやつちやと逃げて飯にすつぞ!!)」バツ!!

サラ「Igen!! (うん!!)」バツ!!

2人はそのまま裏路地に入り細道を縫うように走りコックからの追跡を逃れる…

サラ「それで、その後僕達がいっつも場所についた途端にー」

重要そうなところを離そうとした瞬間

レイ「なあ、ちよつといいか？」

カム「あ”?”今いい所なんだか邪魔しないでくれよ」

レイ「いや、少しやばいことになってな」

サラ「と言うと？」

パラム「聞くより見たほうがいいかと…」チヨイチヨイ

サラ「？」

カム「??」

パラムの指さした方を見ると…

エグ「その君!!!私と一緒にランチに行かないかい?奢っちゃうぜ?」キラーン☆
決めポーズで目の前にいるウマ娘にナンパしていた。

テイエムオペラオー「ハーハッハッ!!!いいとも!!このオペラオー君の好意に甘んじて受けよう!!!」

レイ「あれだけやめとけって言ったのに…言わんこつちやない…」
やれやれと言わんばかりに頭を抱えていると…

サラ「おい、速くハンス教官の元に行くぞ」ガシッ!!

エグ「は…はい…」ズルズル…

襟を掴んだサラはそのままエグを引きずって教室を出る。

サラ「大変失礼した…それでは…」

教室に向かって謝罪をして扉から出る。

エグ「また会おう!!美しき王子よ!!」

テイエムオペラオー「ハーハッハッ!!さらばだ友よ!!」

まだ懲りていないエグはテイエムオペラオーに別れの言葉を投げてそのまま引きずられていくのだった…

ピシャ…

メイシヨウドトウ「…あの…彼に救いは？」

テイエムオペラオー「流石に、ないね!!」

メイシヨウドトウ「で、ですよねー」

嵐のように去っていった2人…後に担当トレーナーになるとはテイエムオペラオーとメイシヨウドトウはまだ知る由もない…

サラ「たくつ…他人に迷惑かけてどうすんだよテメエ？」グイグイ…
エグ「フハハハ!!めげないぞ!!」ズルズル…

カム「いや、流石にめげろよ」

サラに引きずられながらも応接間に着いた5人は応接間に入る。

ガチャ…

サラ「ハンス教官遅れま…し…」

扉を開けた瞬間目の前の光景に絶句する。

サン「食べよおらああああ!!!」

島津「も、もう食べれない…お腹いっぱい…」

人參を持ったサンに無理やり入れられる島津

イヴァン「はい!!一気!!一気!!一気!!一気飲み!!」

島津「ワ、ワインはもう勘弁してください…」

何処から持ってきたのか知らないワインを強制的に島津の胃に入れる

秋川「貴様ア…!!!私のバナナが食べないと申すのかく!!!」

島津「も…もう、入れないでしゅ…」

イヴァンの酒を飲んでしまい酔っぱらった理事長がバナナを島津のほっぺに当てて脅す。

パラム「わあ…何ですかこれ？」

カム「…拷問？」

エグ「拷問どころか死刑だろあれ」

サラ「…もうヤダこの人たち…疲れた…」

ツツコミに疲れたサラはもう傍観するのみだった…

おまけ

トレーナーと担当ウマ娘の仮決定!!

島津国馬 担当ウマ娘 ダイワスカレット

サンネツアク 担当ウマ娘 ウオツカ

イヴァンケテル 担当ウマ娘 シンボリドルフ

モシチホド 担当ウマ娘 アグネスタキオン+マンハッタンカフェ

ハンスビナー 担当ウマ娘 ビワハヤヒデ

パラムイエソド 担当ウマ娘 ウイニングチケット

カールケブラー 担当ウマ娘 ナリタタイシン

サラケセド 担当ウマ娘 メイショウドトウ

エグティファレント担当ウマ娘 テイエムオペラオー
カムダアト 担当ウマ娘 ナリタブライアン
レイマルクト 担当ウマ娘 ゴールドシチー

仮ですので、変わる可能性大です以上!! 終わり!! 閉廷!!

第6話 Don't lose sight of
 everything in your madness.
 s. 己の狂気にすべてを見失うな。

カール「んん〜…太陽の光が気持ちいいなあ…そう思いませんかハンスさん？」

ポカポカと太陽にあたりながらも大きなキッチンカーの隣で椅子に座つてのんびりとする私がいる…

そんな私はキッチンカーでパンを作っているナチス将校のハンスさんと気楽におはなししていた。

ハンス「確かに、今日は晴天で爽やかな日だ…それはそれとして、仕事の方は大丈夫なのか？」ザクツ…ガサガサ…

焼いたパンのサンドウィッチを切りながらも教員のスーツを着ている私に仕事の心配をしてくれています、優しい人ですね。

カール「大丈夫ですよ〜今日は特に何もありませんし…それにまだ授業の時間ではありませんから…まあ、授業のチャイムが鳴ったら見回りでもしますかね…ふあ〜…太陽

が暖かいせいで眠たいですね…」ポカポカ…

あまりにも気持ちいからテーブルに倒れて寝そうになる…

ハンス「二度寝は感心しませんね…はい、これおまけ」コトツ…

カール「ん？…サンドウィッチ？」

二度寝に感心しないハンスさんはわざわざキッチンカーから出て私の目の前に焼いたパンで作ったサンドウィッチを目の前に出してくれた。

ハンス「今日一番の焼きたてサンドウィッチです、どうぞご堪能下さい」

カール「うひゃうまそく…いったただつきまーす!!」

温かい太陽に包まれながら…香ばしいパンの香りを堪能して普通サイズのサンドウィッチを一口…

ザクツ…

カール「うつまあ…」

ハンス「ハハ、よかった」

半熟のトロトロスクランブルエッグに香ばしいベーコン…シャキシャキレタスに少しとろけている濃厚チーズ…さらに追い打ちでほんのりと甘みを感じる焼きたてのパン…こんなのが美味しく無いわけが無い…うつまあ…

カール「ああ…こんな最高の朝を前世で味わいたかったなあ…まあ、未練がないから

帰る気ないけど！」

ハンス「同感です…はいビス君も食べなさい」スツ…

ビス「ヒン…」パクツ…ガリツ!!!ボギツ!!!

キッチンカーの隣で紐で繋がっていたビスにハンスさんは大きなにんじんを食べさせる、相変わらずすごい食欲だと見ていながら思う。

???「…む?なんでこんなところにパン屋が…」

カール「ん?おやあ?お客さんかな?」

ハンス「…かもしれませぬ」バタン…

遠くからハンスさんのパン屋に気づいたのかこちらをじつと見る白くて髪の毛がボンボンの女…ウマ娘がいた。

???「Floriant Geier:興味深い店名だな」

近くに寄ってキッチンカーの上に置いてある店名を見てみるとフロリアン・ガイエルとドイツ語で書かれている文字を見て読み上げる。

ハンス「読めるので?」

???「これでも、学力はトップ10以内に入っているものでな…知識は持ち合わせているのだよ」クイツ…

眼鏡をクイツとしながらも自身の知能にゆるぎないと答える。

ハンス「それはそれは…大層なことで」

??? 「ちなみに聞くがこの名前に意味は入っているのか?」

ハンスにこの店名の名前を純粹な気持ちで聞きハンスさんはこう答える…

ハンス「ハハツ…あなたに教えるにはまだ早いですよ」

笑いながらも質問したウマ娘には教えない。

??? 「そうか…なら、その隣の動物は教えてくれるかな?」

ビス「…」ジ…

ウマ娘に終始警戒しているビスに目を合わせてどんな動物か聞く。

ハンス「その動物は馬と言いましてね、名前はビスと言うのです」

??? 「ウマ」

ハンス「馬」

??? 「ふむ…ウマか…不思議だな親近感を感じるぞ」

ビス「…ヒン」

ビスもそう感じているのか警戒状態から安心している状態になっていた。

ハンス「…類は友を呼ぶですな」

??? 「ん?何か言ったか?」

ハンス「いいえ何も…それより、何か一つ買っていきますかね?」

??? 「…そうだな、授業まで時間はあるし一つ買つていこう…軽くサンドウィッチを一つ…いや、二つ貰おう」

ハンス 「分かりました、少々お待ちを…」ガサツ…トントン…

注文を受け取ったハンスは慣れた手つきでサンドウィッチを紙に包む。

カール 「…ん”ん”ここにいても暇だし歩くか…ちよつと見回り行つてきます！」

ハンス 「行つてらっしゃい…サーベル忘れないで下さいね」

カール 「分かつてるよ！じゃあ…あつ、あと朝食ありがとう！」タツタツタツ…

相変わらず元気なカールはサーベルを手に持ちながらも校内に入つていく…

??? 「…彼も教師なのか？」

ハンス 「ええ一応…とは言つても彼が教室で授業する事はあまりないかと…はい、ま

ず一つ」スツ…

??? 「どうも…彼は何の教師なんだ？」

ハンス 「道徳です」

??? 「あ…確かにあまりないな…」

道徳という月に一度あるかないかレベルの物に彼女は納得する。

??? 「そういえば、先程のカール君もそうだが君たちは随分と日本語が堪能なんだな…

ハーフか？」

ハンス「いいえ、純粋なドイツ人…いや、プロイセン人ですよ…はい、どうぞ…」
???「ふむ…感謝する…おっと、代金を支払わないと…いくらだ？」

ハンス「ハハ、いいですよこんな老人にいろんな事を聞いてくれたお礼にただにしてあげますよ」

暇つぶしになったお礼にただで上げようとするハンスに彼女は戸惑う。

???「む…そう言われると困るのだが…」

ハンス「ふむ…では、こうしましょう…タダで渡す代わりにこの学園内で広告塔として広げてくれることを条件にするのはどうでしょう？」

???「ふーむ…良い案だな、それなら受け取ろう」

ハンス「感謝します…あとお名前を聞いても？」

初めて来たお客さんの名前を聞く

ビワハヤヒデ「ビワハヤヒデだ、覚えておいてくれ」

ハンス「ええ、もちろん覚えておきますともビワハヤヒデさん」

ビワハヤヒデ「うむ…それじゃあまた…ビス君もまた会おう」ナデナデ…

ビス「フン」

ハンスの最初のお客さんビワハヤヒデはビスの頭を撫でた後そのまま歩いて校内に入っていくのだった…

ハンス「開店早々新しい客が来てよかったなビス」
 ビス「ヒヒン」

ハンス「…さて、客が来ない間は新聞でも読むとするか…」バサツ…

前の世界で中々味わえなかったのんびりとした時間をハンスは有効的に使うのだった…

トレセン学園校内

カール「ふっふっふーん♪ソビエト人はく♪一度殺してからく♪遺体を相手に向かつてぶん投げてからく♪大虐殺の始まりさく♪ふっふくん♪」

中々癖のある歌を歌いながら校内の見回りをしていると…

キーンコーンカーンコーン♪コーンカーンキーンコーン
 !!!!!

カール「え？最後の鐘何？」

明らかに最後の鐘がおかしい音を出していた。

カール「ま、まあいいか…」

気にはしていない精神を活用しながらもカールは気楽に進む。

カール「フンフンフンフン♪フフフン♪…ん？」

キュツキュツ…

サン「ヘイヘーイ!! E m p e r o r!! お前のステップの速さはそれくらいかあ? ほっ!!」バツ!!

トウカイテイオー「へっへーん!! 僕のテイオーステップはまだまだこれからだよー!! よっ!!」グアン!!

2対3で、バスケットをしているサンがいた。

流石にサーベルが付いていると動きずらいのか隅で雑に脱いで置いてある上着の上にサーベルが置いていた。

サン「へっ! まだまだ甘いな!! ライミー!!」パツ!!

トウカイテイオー「あっ! しまった!!」

トウカイテイオーに妨害されるも身長の高さを生かしてカムに向かってバスケットボールを投げる。

カム「めんどくせー…ほっ!!」パシツ!!

少しめんどくさそうにプレーしているカムは余裕でサン的高速で投げて来たバスケットボールをキャッチして進もうとするが…

スペシャルウィーク「ここは通しません!!」バツ!!

エルコンドルパサー「通さないデース!!」バツ!!

カム「へつ、騙されるが悪いんだぜ？イギリス人の舌はあまり信用しちやいけないって世界の常識だぞ？」

エルコンドルパサー「そんな常識知らないデース!!と云うか何気にグラスの視線がコワイのですガ!!」

体育館の隅でグラスワンダーがエルコンドルパサーに向かって殺意を出しながら笑顔で見ている。

グラスワンダー「うふふ：後で介錯しますね？」

エルコンドルパサー「それ腹切りじゃないですか!!」

グラスワンダー「ご要望があればここで腹を切つてもいいのですよ？」

エルコンドルパサー「お断りしマース!!と云うか怖すぎデース!!」

スペシャルウィーク「介錯にはお酒とか必要なんですかね？」

エルコンドルパサー「スペはこの話に乗る必要無いデース!!」

天然のスペシャルウィークにツツコミを入れるエルコンドルパサーを横目にサンとトウカイテイオーは何か話している。

トウカイテイオー「いやー：負けちゃったなー悔しいなーねえねえ!!もう一回やろうよ!!今度こそ僕達が勝つかからさ!!」

サン「うーん、とは言つてもなー：肝心のカムがあんまりやる気ないしな…」

カム「無理やりブツ叩き起こされてズルズル引きずられた男の気持ちわかるか？」
どうやら、暇だったカムをサンは引きずって無理やり連れてきたらしい。

サン「俺達の部屋で寝ているのが悪いんだぜ？ライミー」

カム「ハツ：俺は好きに動くのがモットーなんでね：それじゃ俺は適当に帰らせてもらうぜ」バサツ：カチャガチャ：

上着を持って置いていたクレイモアを腰に戻してそのまま体育館から出ようと扉を開けると：

ガララララ!!!

カム「あ？」

カール「あっ」

重い扉を開けると目の前にカールがいた。

カム「何でそんなところで覗き見してんだ？なんだ？盗撮か？」

カール「いいや？今日は非番だから適当に見回りしてたんだ」

カム「ふーん：おい！ヤンキー!!ちようど暇している奴が一人いるぞ！」ガシツ!!

カール「ちよっ!?!」

カムに裾を掴まれていやな予感を感じると：

カム「遊んで来い」ポイツ!!

少し背の低いカールを持ち上げてサンに向かつてぶん投げる。

カール「うそでs（ズシヤアアアア）ギヤアアアアア!!!」

顔面着地したカールは体育館のど真ん中まで飛ばされる。

セイウンスカイ「あらら〜：大丈夫ですか〜？」

カール「顔痛いふ〜」

サン「おい！ライミー！ぶっ飛ばしすぎだろ!!」

カム「知ーらね〜：じゃあなー」ガラツ〜：バタン!!

カムは体育館の扉を閉めてどこかに行ってしまう〜：

カール「あいたたたた〜：カムの力強すぎでしょ〜」ムクツ〜：

サン「全くだ〜：とは言えお前も暇しているのか」

カール「僕道徳の授業担当だからね、暇なんだよ」

サン「確かに、暇そうな科目だな〜：羨ましいから変わってくれよ!」

カール「お断りだよ」

サン「ノリが悪いねえ〜：そんじや暇そうなやつも見つけたし〜：Emp^テer^イor^オ! 次何のゲームするんだ？バレーか？それともバトミントンか？」

トウカイテイオー「う〜ん〜：そうだね〜」タタツタツタツ!!

サンが振り返ってトウカイテイオーに声をかけるとダンスしていた。

サン「…何だその動き？」

トウカイテイオー「え？ダンススだよ！ダンス！こうやってステップを踏んでこうよっ!!」タツタタタ!!タツ！ターン!!

ステップを踏んで回転し軽快な動きを二人に見せる。

カール「物凄い身軽さ…凄いなー」

サン「だな」

スペシャルウィーク「サン先生も踊れるんですか？」

サン「俺？うーん、社交ダンスぐらいかな〜本格な踊りはやったことないしな…」

スペシャルウィーク「社交ダンス？」

サン「知らないのか？…ちよつとお手を拝借」スツ…ギユツ…

スペシャルウィーク「う、うえっ!？」

スペシャルウィークが社交ダンスを知らそうだと感じたサンは口で喋るよりも実際にやってみたほうが効率がいいと思つたのかスペシャルウィークの手を握り踊る。

サン「話すよりも実際にやって見せたほうが覚えやすいだろ？」

スペシャルウィーク「うわわわ…わ、私社交ダンス何でやったことないべ!？」

サン「大丈夫大丈夫！俺の動きに合わせて体を動かせばいいのさ！よし！ここで回す

ぞ！」

スペシャルウィーク「え!?ちよ…うわっ!」クルリ…

サン「のフォローを受けながらも30代の優雅な社交ダンスをカール達に見せる。

スペシャルウィーク「お!おお…あ、あはは!なんかすごい楽しいです!」

サン「お?いいねえそのノリ嫌いじゃないよ…ほっ!」

スペシャルウィーク「うわわわ!?!目…目が回る…」

サン「ハハハ!!まだまだこれからぞ!」

目がグルグルになっているスペシャルウィークに手を握っているサンは笑顔で笑い

ながらも続ける。

トウカイテイオー「次は僕がやりたーい!!」

カール「僕も!!」

サン「お前は男だから無しで」

カール「ええ!?!そんなあ!?!」

カールが入った体育館は昼食の時間まで踊り続けるのだった…

学園内

カム「ふあああ…寝る気も起きないし…仕方ない…非番を楽しむか…」

欠伸を出しながらもノロノロとデカいクレイモアを目立たせながらもものんびり歩く。
 カム「…パブに行つて酒飲んでーな…でもここの規律厳しいし…うん…(にや〜ん?)」

どうやって酒を飲むか考えていると、猫の鳴き声が聞こえる。

カム「猫の声…いつたいどこから?」チラツ…

廊下の窓から中庭を覗いてみると…

猫「にや〜!!」

カム「何で木の上に乗つてんだよ…よっ(ガツ!)〜うおっ!!」ドサツ!!

窓から乗り越えようとして枠に足をぶつけて地面に倒れる。

カム「ああ…畜生…もつと窓を高くしやがれてんだ…クソが…」ムクツ…パツパツ

…

ぶつぶつ文句を言いながらも立ち上がつて土を払いながら猫のいる木に歩いて行く。

カム「…でっけーな」

上を見上げると丸々と太つたデブ猫がガタガタ震えていた。

カム「行きはよいよい帰りは恐いつてか?なあ、デブ猫?」

猫「ナ〜ン…」

カム「急に返事すんなびびるじゃねえか、まあいい…さて、どうやって登ろうか…」

スツ…

顎に手を付けながらもどうやって木を登るか考える。

カム「…（意外にたけえな…普通には登れない…じゃあ剣を使って上るか…）」ガコツ

：

木に剣をぶつ刺して支柱にして上る事に決めたカムは留め具を外してクレイモアを片手に持つ。

カム「…落ちるなよ？デブ猫？」

猫「にゃ！」

カム「うっし…スウ…ふう…」ガコソツ…スツ…

姿勢を低くして剣を顔の横まで動かして水平にして片方の空いている手で狙いを定める。

カム「…死に晒せナチ共が!!!」グオオオオ!!

メキイイイイイイ!!!

カム「…あつ、やべ」

自身の恨みを持つものを頭に浮かび上がらせながらそのまま木に刺すと余りにも勢いが強かったせいか貫通して刺さった木の裏から剣が見えていた。

カム「…まあ、どうせ誰にもバレねえだろ…ほっ!!」タツタツ!!よじよじ…

被害請求やら、なんやらかんやら来ると思うが特に気にせず勢いをつけて走ってクレイモアを踏み台にして木によじ登る。

カム「よつと…おう、待ったか？デブ猫」

猫「にや！」ガバツ!!

カム「おつと…いい子だ」ナデナデ…

猫がいる太い枝の上に乗ると猫が喜んでカムに向かって飛んでくるのでカムは軽々とキヤツチする。

カム「よし、しつかり捕まれよ…ほっ！」バツ!!

スタツ…

カム「おーし、もう降りたからどこかに行つていいぞ」スツ…

猫を抱えて降りたカムは、そつと猫を離してどこかに行かせようとするが…

猫「にやく♪」スリスリ…

懐いたのかカムの足に体をスリスリする。

カム「あ？なんだ？離れたくないってか？うくん…」

懐かれて困っていると…何か不思議な存在感が出ているウマ娘がこちらに来る。

???「おやおやく？珍しい人がいるじゃないかあ〜」

カム「あ？誰だお前？（なんか匂うな…薬品か？）」

漂う薬品の匂いに何か狂気を感じる雰囲気にかムは警戒する。

アグネスタキオン「おっと、自己紹介を忘れてたよ……私の名前はアグネスタキオン……ウマ娘の身体的能力の限界の先を研究している科学者兼学生さ……さあ、次は君が名乗る番だよイギリス人の方」

カム「……カム・ダアト」

アグネスタキオン「それで終わりかい？」

カム「あまり君と話したくないのでね」

科学者や医師にあまり良い印象がないカムはアグネスタキオンとあまり会話したくなかった。

アグネスタキオン「ハハハ！私も嫌われたものだ……だが、君の人種に顔と経歴……後、その木に刺さっている大型の剣で概ね想像がつく……君は三日前に突然練習場に現れた謎の生物ウマに乗った集団の一人だね？」

学園内では絶対に見れない外国人の教師に我々ウマ娘とは少し違う知識に三日前に現れた集団の特徴である剣……頭の回転が速いアグネスタキオンはすぐにカムが三日前の謎の集団の一人だと予測できた。

カム「ご名答……と、答えたほうがいいか？エセ科学者」

アグネスタキオン「ひどいものだねえ？んん？君はなぜそこまで科学者に対して憎悪

を抱くのかね？興味深いし一つ聞かせてくれたまえよ」

カム「：貴様に言わせるほどの仲ではないと言っておきたいが：一言あることだけ言っておこう」

アグネスタキオン「なんだい？」

カム「自身の体を気に留めずおの行くが道を進めばイカロスのようになるであろう：俺の友達のようにな」

アグネスタキオン「ハハハハハハハハ!!私の背中に蠟燭の羽がついていても？アハハハハハハ!!面白いジョークだ!!アハハハハハ!!」

イカロスの話を知っているアグネスタキオンは大笑いしてしまう。

カム「：」

アグネスタキオン「ふう：少し笑い過ぎたな：ほかに教えてもらえるかな？」

カム「話すことはない」

アグネスタキオン「フウン：ここまで口が堅いとは：君はカフエよりもめんどくさそうだね：まあいい：それより君一つ頼みたいことがあるのだがいいかね？」

カム「断る」

絶対ろくなことじゃないと予測して断るが：

アグネスタキオン「聞く前から断るのはマナー違反だよ」

カム「ケツ…聞くだけ聞いてやるよ…」

仕方ないので聞くだけ聞いてみる。

アグネスタキオン「君たちの乗っているウマ…少しばかり血をとつて（ブオン!!!）…」

カム「それ以上言えばお前を真つ二つにして切り殺してやる」

いつの間にか木に刺さっていたクレイモアを引き抜いてアグネスタキオンの鼻先で

クレイモアを思いつ切り振って脅す。

アグネスタキオン「…わかつたよ、これ以上何も言わないからそのデカイ剣を戻して

くれ…」

カム「…」ガコツ…

アグネスタキオン「はあ…これ以上の取引は命の対話になってしまふね…今回は諦め

るとするよ…あつ、そうだ！これ渡しておくよ」ピラツ…

何か思い出したアグネスタキオンはポツケから折りたたまれた紙をカムに差し出す。

カム「…なんだそれは？」

アグネスタキオン「私の研究所の場所さ、少し被検体がいなくて困っていてね…タダ

では言わないからもし興味があったら来てくれたまえ…じゃあ、また会おうカム君」

ザツザツザツ…

カム「…」

紙を渡したアグネスタキオンはのんびりと歩いてどこかに行ってしまった。

カム「：気味が悪いな」

猫「にや？」

カム「気にすんな：独り言だ：さて、俺は少し練習場にでも行くが：：ついていくか？」

猫「にや!!」タタタタ：

返事した猫は素早く練習場に向かって走っていく。

カム「よし、じゃあ俺も行くとするか：」ザツザツザツ：

猫を先に行かせながらもカムはのんびりと歩いていくのだった：

怪文書注意

学園内

アグネスタキオン「：人とウマ娘の違いは中身のみで身体構造の違いはほぼない：分かるのはこの耳と（ピコピコ）：尻尾のみ（フリフリ：）」

何か考えているアグネスタキオンは自分の研究所に向かいながらも考えている。

アグネスタキオン「人体解剖で人の体は隅々までと切つて開かれその中身を解読され

おまけと言うよりお知らせ

先ほどの怪文書見て下さってありがとうございます！

印象的には科学に没頭しすぎて狂気に満ちていそうな人を演じさせました。

解釈一致済ますかね？

それより、お知らせです。

ウマ娘のサークルを開設いたしました。

もし、この場で意見が言いづらいや何か聞きたいことがあればウマ娘の方のサークルでもお書きください。

サークル名は

第8SS騎兵師団

参加お待ちしております。

それではまた

第7話 そのイギリス人危険につき（猫と和解せよ…）

トレセン学園

カム「Hark when the night is fallin♪

Hear! Hear the pipes are callin♪

Loudly and proudly callin♪

Down thro' the glen♪

色々と気分がいいカムは勇敢なるスコットランド行進曲を歌いながらのんびり猫と歩いている。

猫「なあくん」

カム「あ？この曲気に入らねえのか？」

猫「にや」

カム「ハア…分かってねえな、偉大なる大英帝国（ブリカス）の華やかな歌なんだぜ

？」

猫「にやくん」

カム「そんなに気に入らねえのかよ…じゃあ、別の歌ってやるよ」

猫「…」プイッ…

カム「あ!? てめえ!! 俺の歌に不満でも持ってんのかこの野郎!!」

猫「にや!!」ベシッ!!!

カム「痛っ!?!」

あるわボケと言わんばかりに猫パンチがカムの足にヒットする。

結構痛い

カム「痛い…なんかお前のパンチ強くな?」

猫「にやん!」

カム「ハア…たくつ、なんでこんな猫に踊らされているんだ?」

暗くて寒い夜に第二次世界大戦で死ぬ気で戦った兵士が今や温かい太陽の下で猫に

踊らされる…

なんでナチス親衛隊より猫にビビってんだ?と自分で困惑していると…

猫「…ニヤッ!!!」ダッ!!!

突然猫が勢いよく走って行く

カム「おい! どうしたとつz…ん? あれは…」

猫が走った方向を見てみると…

??? 「申し訳ありません…今ここで決めるわけには…それに…」

トレーナー？「いいじゃないですか!!あなたの足は少々不安定かもしれませんが気合で何とかすれば行けますよ!!」

???「ですが…」

カム「なんだあれ？ナンパか？」

会話の内容は遠くて聞こえないが傍から見ればナンパしているように見える

カム「チツ…誰だよ不法侵入を許してんのは…」トテトテ…

めんどくさがりながらも、一応トレセン学園の関係者としてトレーナー？に近づく

カム「おーい、お前何やってんの？ナンパならよそでしてくんねえか？」

トレーナー？「な、なんですか…あなたは…一体誰なんですか？」

カム「俺？元英国陸…あ…トレセン学園の…まあ…教師？」

まさかの疑問形である

トレーナー？「教師が一体何か用で？私は今彼女をスカウトしているのですよ!!邪魔しないで下さい!!」

カム「あ…そうなの？お嬢さん？」

めんどくさそうに隣にいるウマ娘の子に聞く

???「ええ、そうです…ですが、先程からスカウトはお断りしているのです…まだ、選

抜レースを出走してないので…」

カム「ほーん…ああ、そういえばたづなさんが言ってたな選抜レースに出走してない子は基本スカウトしてはいけないって言ってな…じゃあ、スカウト100%無理じゃね？」

一応たづなからの説明は頭に入っていたカムはこの学園のルールを思い出す。

トレーナー？「そ、そうだけ…で、でも例外で同意の元でならスカウトできるはず！！」

カム「いや、できねえぞ？それは、選抜レースのお手伝いをするという合意であつて必ずしもそのまま一緒になるってわけじゃないんだぞ？…お前トレーナーのバッチ付けてる割に知識無くてね？」

トレーナー？「え…いや、まあ…何と言いますか…」

カム「…（なあーんかこいつ怪しいな…ん？あれ？よく見たら…バッチおかしくね？）」

良く見てみるとバッチの上に何か貼つてある。

カム「…ほっ」バシッ!!!

怪しいと思つたカムはトレーナー？の襟から無理やりバッチを取る

トレーナー？「うわっ!?!ちよつと!!いったい何するんだ!!」

カム「いや、なんかこのバッチおかしいなあーと思つてな…ちよつと見せてもらうぞ

…」ジ…

トレーナー？「く、くそっ…」バツ!!

何かまずいと思ったのかトレーナー？は逃げようとする

???'「あつ！お待ちにn（パアン!!）」キャツ!？」

トレーナー？「ひっ!？」

突然大きな音が響き何事かと音の方を向くと…

カム「はーい、逃げちゃだめだよ逃げたら撃ち殺すからね〜」カチャ…

スーツの懐からMk IVリボルバーを取り出して照準をトレーナー？に向ける。

カム「今のは威嚇射撃として空に撃つたけど、今度はお腹に当てちゃうぞ☆」

トレーナー？「す、すみませんでした…だ、だから撃たないで…」

カム「じゃあ、今から担当者呼ぶから待ってくんね？」

トレーナー？「は、はい…」

カム「じゃあ、たづなさんと呼んで…」スツ…

Mk IVリボルバーを一旦しまいポケットからスマホを出すが…

カム「…なあ、嬢ちゃん」

???'「はい、なんでしよう？」

カム「すまほ？ってどう使うの？」

スマホを出してみた物のロック画面の解除の仕方分らないので隣にいる彼女に助けを求める

??? 「え?…お使いになつた事が無いのですか?」

カム 「うん、てか二日前にたづなからもらつたからよくわかつてない」

??? 「そ、そうなのですか…ちなみにパスワードは?」

カム 「パスワード?」

??? 「電源を押すと番号が出るのですが…」

カム 「電源どこ?」

??? 「ええ…」

もはや、おじいちゃんレベルであつた…

?…

たづな 「お待たせしました…彼は私たちが対処いたします…それでは…」

電話で呼ばれたたづなは、縄でぐるぐる巻きにした不審者を連れていく

カム 「は…い、お疲れ…ありがとうなメジロアルダン」

アルダン 「いえいえ…私は少し手伝つただけです…」

カム「少し?…（9割9分アルダンにやってもらったような…）まあいつか!」

結局少し詳しくかったアルダンにやってもらって何とかなつたカムはあることに気づ

く

カム「…あ、そういうええあの猫どこ行った?」

アルダン「猫?」

カム「ああ、急に走って行ってな…それで追いかけていたら、たまたま君達が何か話している所に出くわしたんだ」

アルダン「そうなのですか…じゃあ、猫さんにお礼を言わないと」

カム「そうだな…にしてもどこ行ったんだろうな…うくん」

そこら辺を見ているが中々見つからない…と思つたら

猫「にゃー!!」 シュバツ!!

カム「あ、いっ（ドゴオ!!!）グフア!」

木の陰から出てきたと思つたらカムのどてつばらにタツクルする。

アルダン「あら、この子が…」

カム「that's right…」

猫「にゃ〜♪」

アルダン「うふふ…可愛い♪」

大の字で倒れているカムに嬉しそうに乗つかる猫に笑うアルダンだった：
カム「Remem^後ber^で later^え,^ろ fuck^よing^ッ cat^猫 ……」

猫「にや!!」シユツ!!

カム「ブヘツ!?!」

猫にパンチされ翻弄されるカムだった：

?…

カム「…たくつ…何で猫に殴られなきやいけねえんだよ…」テクテク…

猫「にやくん♪」ゴロゴロ…

アルダン「あらあらく♪かわいい子ですね♪」ナデナデ…

猫「うにやくん♪」

猫が逃げないようにアルダンに猫を抱っこさせているが、妙に嬉しそうだな…

カム「…現金な奴だな」

アルダン「? 何かおっしやいましたか?」

カム「いや…何でも…それより、俺に付いて来ていいのか?お前授業は?」

今この時間はウマ娘達が授業をしている…そんな時に何故外に出ていたのか聞く。

アルダン「実は今日、病院から退院したばかりでして…理事長がお休みを取ってくださったのです…」

カム「あ？病気持ちなのか？」

アルダン「いいえ…病気ではなく体が少し不安定で通院していたのです…」

カム「へえ…何？骨が脆くなってんの？それとも、筋肉に異常か？」

アルダン「…」

カム「…すまん聞きすぎたわ」

顔は笑顔だが、明らかにテンションが違う聞きすぎてしまったようだ

アルダン「いえ…問題ありません…ただ、自分で言うのは少し…」

カム「…まあ、気持ちだけは分かるぞ俺の愛馬も一時期足を悪くしてたからな…あの時は気がしじやなかったさ…」

アルダン「愛馬？もしかして貴方はトレーナーなのですか？」

カム「あ？違う違う愛馬って言うのはこう…何というか…ん？…何やってんの？」

何かいい例がないな周りを見ていると何かが見えた。

アルダン「？…あれは…」

2人が見たものは…

イヴァン「Привет! Вперед, продожатъ!!」

ギルバー「ブルル!!」パカラッ!!パカラッ!!

モシチ「Hu^{ハッ}h!!」スパンツ!!

モース「ヒン!」パカラッパカラッ

ソビエト人とポーランド人の騎兵が練習場で馬を走らせ併走していた

カム「何やってんだよあの二人：非番だったか?」

2人共担任なのになんでこんなところで道草食ってんだと思っていると…

アルダン「…」

カム「ん?どうした?何か気になってんのか?」

アルダンが微動だにせず動かなくなっており、横からカムがのぞくと…

アルダン「…」

何か美しいものを見たような眼をしていて視線の先にはギルバーとモースをずっと見ている

カム「…気になるのか?」

アルダン「はい、とても…美しくそして勇ましい姿に魅了されています…あれがカムさんの言う愛馬と言う者なのですか?」

カム「本当は愛馬じゃなくて馬だけだね…ちなみに俺の馬は今パラムのガキに預けるからここにはいねえぞ」

アルダン「そうなのですね…一度見てみたいです」

カム「できたから見せてやるよ」

アルダン「うふふ…楽しみにしてますね」

カムとアルダンが約束を作ったのと同時に並走していた二人も終わる

イヴァン「よっしゃ!!またわしの勝ちじゃ!!よくやったなギルバー!」ポンポン

ギルバー「…」プイッ…

モシチ「ふう…大尉は相変わらず衰えていませんね…あの時と変わりません…良く頑

張ったなモース」ナデナデ

モース「ヒーン!」

イヴァン「いや〜久しぶりに仲間と走るのはいいなあ!気分がいいもんだ…ん?おや

?」

久しぶりに走り気分がいいイヴァンは何者かの視線に気づき見てみるとひとりのウ

マ娘が近づく

ルドルフ「こつそり抜けて独り占めでもしようと思いきや…何たる行幸…先生が言っ

ていた噂の生物に会えるとはね…」

モシチ「あなたは…」

イヴァン「お?知っているのか軍曹?」

モシチ「はい、彼女はこの学園の生徒会長シンボリルドルフ：一応大尉の生徒ですよ？」

イヴァン「ありや？ そうだっけ？ 正直数日は人の名前覚えな癖付いちやったんじやよね」

ルドルフ「とても不思議な癖ですな、イヴァン先生」

イヴァン「まあ、前の職業病みたいなもんじやよ、先生はいらんイヴァンかケテルでいい：で？ その生徒会長様が何しにここに？ 生憎運動系は教えることは無いぞい」

体操服に着替えているルドルフにイヴァンが何しに来たか聞く。

ルドルフ「では、イヴァン単刀直入に言おう」

イヴァン「おう、言え言え」

ルドルフ「その馬で私と勝負していただきたいイヴァン」

イヴァン「へえ：ええぞ」

モシチ「良いのですか大尉」

あつけない返事に先の併走をしたイヴァンに疑問を投げる

イヴァン「構わん構わんギルバーだつて不燃烧気味だしな：な？ そうだろ？」

ギルバー「：」トテトテ：

イヴァン「ん？ どしたギルバー勝手に動いて：」

手綱を動かしていないのにギルバーは動いてルドルフに近づく

ギルバー「…」ジー…

ルドルフ「不思議だな初めて会って見た目が違うのに親近感を感じる…」

ギルバー「…」ゴゴゴゴゴゴ…

ルドルフ「前言撤回、親近感より威圧感が伝わって来るな…何かしたかな？」

明らかに親しみの目ではなく睨んでいる眼であった

イヴァン「多分、自分と同じ雰囲気を出してるのが気に食わないから威嚇でもしてん

じやろ（適当）」

ルドルフ「そうか、気に食わないか…随分と舐められてるな」ゴゴゴゴゴゴ…

イヴァンの話を聞いた瞬間ルドルフからも威圧感が出て来る

モシチ「…大尉煽ってよかったですか？」

イヴァン「え？面白そうだから良いじゃん？」

まさかの煽った理由が面白そうだったからでモシチは困惑する

イヴァン「で、勝負と入ったが何をするんだ？槍試合か？」

ルドルフ「いいえ、今日は走るのが目的ですので…槍試合はまた次の機会にさせても

らおう」

イヴァン「承知した…ちなみに距離は？」

ルドルフ「3600」

イヴァン「おっほっほっww随分強気に行ったな！」

ルドルフ「これが私の得意距離だからね…もしかして、そちらの馬は適正距離が短いのかな？」

イヴァン「いやいや！うちの馬はどんな距離だって問題ありませんぞ！ただ一言言えるのは…」

ルドルフ「？」

イヴァン「私の馬は走る距離が長くなればなるほどドンドン速くなることをお忘れなく…ではお先にハイヤツ!!」バシツ!!

ギルバー「ブルル…」パカラツ…パカラツ…

ギルバーはそのままスタート位置に向かう

モシチ「…スタート役は私がやりましょうか？」

ルドルフ「頼んでくれるかい？」

モシチ「もちろん、空砲を使わせてもらいますけどね」スツ…カチャ…

懐からナガンM1895リボルバーを取り出して一発だけ弾を入れる所をルドルフに見せる

ルドルフ「構わない…では私も彼の隣に並ぶとしよう」ザツザツ…

ギルバーの後を続けるかのようにシンボルドルフもスタート位置に向かう…

カム「…なんかやろうとしてね？」

アルダン「生徒会長と馬との勝負ですね…カムさん…もしお時間があるのでしたら一緒に少し見てみませんか？」

カム「ああ…まあ、俺も特に用事無いからいいよ」

元々今日は非番なカムはアルダンの提案を受ける

アルダン「ありがとうございます」

カム「いいってもんよ…ちなみにその生徒会長さんってどれくらい強いのか？」

遠くからでも雰囲気で何となく強者のオーラが見えているが一応どんな人物なのかアルダンに聞く

アルダン「無敗の三冠ウマ娘達成の可能性を秘めた皇帝とメディアでは言われていませんね」

カム「皇帝か…強そう（適当）」

アルダンの説明をあまり分かっていないのか適当に答えるカム

カム「うくん、どっちが勝つかね」

高みの見物でどちらが勝つかアルダンと眺めるのだった…

おまけ

11人のヒミツ

島津のヒミツ 「食堂のメニュー制覇を企んでいる」

カムのヒミツ 「びっくりするほど電子機械に弱い」

ハンスのヒミツ 「パン以外にもエグ指導の元ピザ作りに挑戦して商品化しようと頑張っている」

イヴァンのヒミツ 「インターネットに入り込んでお気に入りのゲームをしている
(ゲーム名・ワシは脱走兵です)」

エグのヒミツ 「実は密かにペンライトでヲタ芸の訓練をしている」

カールのヒミツ 「密かに会長と二人きりで交渉して学園内にサウナを作ってもらっ

た」

サラのヒミツ「学園内の図書館に通って必ず一日一冊完読している」

モシチ「優しそうな顔つきのせいでクラスのみんなからおじさんと呼ばれている」

サン「実はリンゴの皮むきが得意」

パラム「クラスの相談に乗っているせいか生徒の間でパラムのあだ名がジャンヌダルクになってしまった」

レイ「バク転を永遠にできる」

次は馬のヒミツを書く予定

第8話 汝、皇帝の威信を見よ：恐れ慄け、我は雷帝の子 ツアレーヴィイチである

イヴァン「…ふう」グツ：

ギルバー「…」

天気はカラツと晴れた大空に横から少し暖かい風が吹いている：

踏んでいる芝生は完璧な状態、泥や泥濘も無い：

走るには良い状態じゃ：お、噂のルドルフが来たみたいじゃな：

ルドルフ「…」ザツ：

いぎ隣に立ってみればやはり大きい：

イヴァンが乗っている事を除けば2 m以上だろうか？

やはり初めての事で自分も勝てるか少しだけ不安だ：

いや、私らしくないな：神色自若：何があっても動揺してはいけない：

モシチ「よろしいですか？大尉、シンポリドルフ殿」カチャ：

空砲を一発装填しているリボルバーを持ったモシチは

スタートラインの端に立って二人に準備が出来ているか聞く

イヴァン「ああ、問題ないモシチ軍曹」グツ…

ルドルフ「…始めてくれ」スツ…

手綱を握っているイヴァンと走る体勢になったルドルフ2人の出走準備が整った

モシチ「では…よいッ!!」カチャ…

イヴァン「…」ググツ…

ルドルフ「…」グツ…

モシチの掛け声と撃鉄のハンマーを起こす音が二人の耳に入り力を溜める

モシチ「…初めッ!!」グツ!! パアン!!

大きな銃声が空に響き二人の耳にも銃声が入った

イヴァン「Вперед, 進ПРОДОЛЖАТЬ!!」バシツ!!

ギルバー「フツ!!」グツ!!!

ルドルフ「はっ…」ザツ!!!

貯めていた力を地面にぶつけて二人はスタートラインを越えて人々に期待されている皇帝とコサククの伝統を受け継いでいる馬の対決が始まる…

カム「始まったな」

アルダン「ええ…最初はこう出るのでしょうか…」

観客の場所に移動したカムとアルダンは二人の対決を見守りながらも展開を読んでいく…

イヴァン「…(さあて…今回は情けなしで行くか…)行けッ!!」バシッ!!
ギルバー「…」バシユ!!!

最初の第一コーナーでイヴァンは宣言通り徐々にギルバーを加速していく

ルドルフ「どうやらはったりではなかったようだね…(ここから減速なし…後ろに居たら焦って体のスタミナが尽きて私が負けてしまうね…なら)フッ!!」グオッ!!

アルダン「馬が加速して大逃げになるかと思いきや…生徒会長も大逃げになる…」

カム「後方で焦って全力を出せない事を懸念してイヴァンと同じ大逃げにシフトチェンジ…頭いかれてんだろ」

第一コーナーでスパートをかけてルドルフを焦らそうとしたがどうやらその作戦は早々に破られてしまった

イヴァン「チツ…賢いのう…さてどうしようか…」

第二コーナーが終わると最初の直線に入る

この直線の最初は両者仕掛けず足を進ませる…

その間に二人は頭の中で作戦を立てる

イヴァン「…(参ったな…まさか最初の作戦が早速破れるとはな…)」

何故イヴァンが参っているかと言うとまともな対抗策が先ほどの大逃げでのスタミナ削りだったのだ

その為イヴァンにはまともな作戦が無くただ速度を上げて走る以外なかった

ルドルフ「ふう…(この直線では仕掛けずに同じ速度…向こうで問題が発生したな…好機到来!!ここで先頭を行かせてもらおう!!) フツ!!」 タツタツタツ!!

イヴァン「む」

チャンスが巡り利用するのはここしかないと感じたルドルフは足を延ばして先頭につく

カム「…まずいな」

アルダン「馬の方ですか?」

カム「ああ、さつきまでイヴァンの方が主導権を握っていたが…先頭が変わったせいで主導権を持っていたイヴァンからルドルフが変わって状況が変わるぞ」

アルダン「生徒会長の得意な状態になりやすいと言う事ですか?」

カム「that's rightイヴァンのやっていたスタミナ消費を自分に食らってしまおうと言う事だな…さて、そんな危機的状况でどんな風にイヴァンは戦局を打開するのか…期待だな!」

策の無いイヴァンがどう状況を変えるにか期待しながら直線が終わり第3コーナーに入った

ルドルフ「ふう…」タッタッタツ!!

イヴァン「無駄のないカーブ…見事じゃ…だがな、わしだつてみすみすチャンスを逃すほど愚かじゃない…Be^走gr^{れ!!}at^{!!}h!!」スパアン!!!

ギルバー「ブルル!!」ドガラツドガラツ!!

ルドルフの無駄が無いコーナーリングに感心したイヴァンだが、ここでルドルフが少しだけ減速している隙を突くためにコーナーリングの最中に一気に加速する

ルドルフ「ふっふっ…(参ったな…まさかここまで速いとは、馬恐るべし…だけど私も負けてはいられない)ハツ!!」グオツ!!

一時離れていたギルバーは走り方を変えてルドルフに迫るがまだ足を持っていたルドルフに離されてコーナーの争いはルドルフがリードしたまま直線に入る

カム「これで一周したけどイヴァンはどうするつもりかな?」

アルダン「このままですと、生徒会長が勝つてしまいますね…」

カム「ああ、だけどイヴァンの事だ何か策を考えるだろうな」

ルドルフから大体一馬身離れているイヴァンはきつと対策があるとカムは考えるが

…

イヴァン「…(やつべえ…どうすればいいか分からん)」

先ほどの主導権を取る為に賭けに出たが見事に失敗して安全に対抗できる策が無くなってしまった

イヴァン「さて、どうしようか…あのカーブが終わって直線になれば勝てるか怪しいぞ」

策が無く手も無くなってしまいどうすればいいか考えていると…

ギルバー「…フン」

イヴァン「あ? 何? プランB? よし! じゃあそれで行くとするか!!…プランBって何じゃ?」

ギルバー「ヒン!!!」ガツ!!!

イヴァン「うおっ!?!」

プランB…それは単純な事何も考えず走る事

相棒の頭では勝てないと感じ、独断でギルバーが足を駆けていきルドルフと並ぶ

ルドルフ「むっ? 来たか…」

И
В
а
т
и
т
ы
н
о
с
л
и
в
о
с
т
и
н

「П
р
и
в
е
т
!
Р
у
д
о
л
ь
ф
!!

並んだイヴァンが声をかけてきたのでルドルフはこう答える

ルドルフ「Иван может себе это позволить」

行
ОТПУШУ И
せ
テ
ヴァ
ら
ン
ぞ!!
「Хахаха!! Тогда я

軽口が済んだと同時にギルバーの速度をサラに上乗せするために手綱を叩き最高スピードを上げ先頭に立つ

カム「おつ、直線で仕掛けたな…おいおい、馬鹿みてえに速いな…」

アルダン「遠くから見ても掛かり気味に見えるのですが…大丈夫なのでしょうか？」
カム「さあ…でも、これで形勢逆転は出来た…後はあの生徒会長様がどう出るかだ…やつべ久しぶりにワクワクしてきたぜ…」

拮抗状態にどんなことが起きるのかカムがワクワクしながら先頭のイヴァンと1・5馬身離れているルドルフがコーナーに入る

イヴァン「フツ!!」ググツ…

体を傾かせながらギルバーのコーナーリングを補助しルドルフを内側から出さないようにコーナーの幅を狭めながら回る

その間もギルバーの速度はドンドンと増えていき2、3馬身離れていく

ルドルフ「…(だんだん離れていく…正直余裕と言ったがそんなことは無い結構ギリギリだ…感覚も無いな…)」タッタッタッタ…

コーナーを回っているルドルフは段々と離れていくギルバーに心の中で情けなく弱音を出す…

ルドルフ「だからどうした…感覚が無いから、疲れた、良く分からない生物だと言つてただ負けると?…フツ…舐めるなツ!! 貴様なんぞに勝利は譲らんツ!!!」グツ!! ゴシヤアアア!!!

正直に言えばルドルフは慢心していた今回も私が勝つと言う絶対的な信念で戦ってきていた

だが、違ったあの生物は今まで彼女と戦ってきた相手とは次元が違う

最初に睨まれた時なんてこの世の物とは思えないほどの空気の重さと圧力を感じた…

まるで地獄めぐりを何回か歩いて行ったような感覚を彼女は感じた

決闘の開始の前彼女の足は少し震えていたどんなことが起きるか分からないプレッシャーと恐怖で心を支配されていた

そして、ギルバーと走って感じた勝てないかもしれない…いとも簡単に逃げから差し帰れる脚質の才能で無限のスタミナと足の速度に圧倒的パワーを傍で感じた

ここまで彼女が人生に感じた事のない困難と言う壁にブチあつたのだ

無理な脚質の変更に無理な加速と焦りで心身共に疲れ果てていた弱音も吐いた

しかし、そんな彼女はあきらめない
彼女は皇帝なのだ

負けを知らない無敵の皇帝なのだ

ただ勝利のために進み続ける皇帝だ

ルドルフ「…」

轟け天下無双の嘶き…汝、皇帝の神威を見よ

ルドルフ「ハアツ!!!」ダダダダダダダツ!!!

掛け声と共に最後の直線が上がっていく狙いはもちろんギルバーだ、すべての感覚を
忘れたただ前に進み続ける

全てをかけて進んでいくルドルフにイヴァンはすぐに気づく

イヴァン「本気じゃな…面白いのを見れたなハイヤツ!!」バシツ!!

ギルバー「ヒンツ!!!」ドガラツドガラツ

勿論手を緩めるなんてことはせずにドンドンとスピードを上げる…

が

ルドルフ「…ツ!!」

イヴァン「ありや? もう来たか」

ルドルフ「勝利は譲らない」

イヴァン 「…Ага…: ТоГда Ты ДоЛжен

Прогреть и упасть Рудольф」
 ルドルフ「それはこちらのセリフだイヴァン…ハアツ!!!」
 ダダダダダダツ!!!

イヴァン「…わしらが敗れるか…すまんが敗れるのには慣れているのじゃ…だから…
 勝利は貰うぞ行くぞギルバー!!!」

ギルバー「…」

イヴァン「…ギルバー?」

Победа и слава великой
 Российской Империи…

恐れ慄け、我は雷帝の子ツアレーヴィチである

イヴァン「…今の声はいつたい…(グオツ!!)うおっ!?!」

ギルバー「ヒーン!!!」
 ダダダダダダダツ!!!

突然何者かの声が聞こえたと思った次の瞬間ギルバーの速度が上がり段々ルドルフに近づいて行く

アルダン「速い…なんて速度…」
カム「こりやあ分からんぞ…どっちだ？」

見ている二人はもうすぐ3ハロンの戦いをまじかで見ろ。

ルドルフ「はっはっはっ…グウ!!」

勝つのはシンポリルドルフは？

ギルバー「ブル…」

それとも騎兵イヴァンとギルバーか？

この3ハロンで決着する

ルドルフ「ここで決める!!!」

さあ、最初はルドルフが動いた後ろから来るギルバーの気配を感じ取ったのか急いで話そうとゴールバンに近づいて行く

イヴァン「させん!!」スパンツ!!

しかし、後ろで追いかけて来ているイヴァンは手綱を叩いて速度を上げる

残り400m

ルドルフ「フツ!!」

やはり無理に動かしているせいか少しずつ減速していつて行く

イヴァン「行ける…行けるぞ!!」

その隙を見逃さないイヴァンは今の内に迫ってくる

残り200m

ルドルフ「フッフツ…」

痛みが段々と戻ってくるがゴール板が見えてきたと思いきや

イヴァン「そう軽々と勝利は渡さんぞ!!!」

ルドルフ「来たか!」

黒の馬に乗ったソビエト人がルドルフに近づいて来るもう目の前だ

残り100m

ルドルフ「私が勝たせてもらおうツ!!!」

イヴァン「ほざけ!! 貴殿は敗北がお似合いだ!!!」

2人は並び、最後は本心の語り合いでゴールを超える…

勝利したのは皇帝か? それともコサツクの皇子か?

その答えは…

ルドルフ「うっ…はあ…はあ…」バタツ…

走り終えたルドルフは全感覚が反応せずそのまま転がって大の字で倒れる

イヴァン「…好きに動きな」スツ…

ギルバー「…ヒン」トテトテ…

イヴァンはギルバーから降りてそのままギルバーを自由にさせる

ルドルフ「うっ…ああ…」

イヴァン「ふい……」ゴソゴソ…カチャン…ボツ…

息が上手くできないルドルフの傍で葉巻を取り出して火を点ける

イヴァン「スウ…ふう…」

葉巻の煙を出してそのままぼそりルドルフに伝える

イヴァン「…わしの負けじゃよ」

その言葉にルドルフは心の大きな壁を越えた達成感と今までにない勝利の喜びでこ

う言う

ルドルフ「…やった!!!」

その言葉はまるで子供の様に安直ながらも嬉しさが一番伝わる言葉だった…

おまけ
イヴァンの担当ウマ娘
1、シンボリルドルフ

第9話 ばぶう

パン屋へFlorrian Geier

カチツ…カチツ…ゴーン!!ゴーン!!

「Hm m . . . : es i s t z e i t f ü r e i n e P a u s e . . . 」

壁に掛けてある少し大きな振り子の時計が鳴り別の仕事の時間になったハンスは店員の服装から軍服に着替えてパン屋のシャツターを閉じる

ギイ…バタン!!クルクル…ガチャ!!

ハンス「Okay, lass uns herumgehen」ガチャ…

ビス(／・ω・)／ガッテンシヨウチノスケ

さて、鍵も閉めて餌も与えた…後は、店に固定している紐を解いてそのままビスに乗って仕事をしよう…

「J a . . . : h u h . . . : e s i s t s c h w e r z u k l e t t e r n . . . : h

ペシ

50も近くなると馬の乗り降りに少しだけ苦勞するが、それでもまだまだ行けると言う事を証明するために馬を進め学園内に不審者や怪しい個所などをチェックしていく
 パツカパツカ：

「Auf der Heide blüht ein kleines Blümelin
 und das heißt Erika」

Hei von hunderrtausend kleinen Bienlein
 wird umschwert Erika

馬の揺れに振られながら馬の足音に聞こえないくらいの大きさで私は耳に残っている歌を歌う

更に良い天気なのも相まって気分がとってもスッキリしながら見て回る

三女神像前

ハンス「ん？」

大体の見回りが終わり最後の三女神像の所を見に来たハンスは遠くから三女神の噴水に座っているウマ娘が見えた

ハンス「…よつ…ここで待つて」

ビス「(、ω、) アイアイサー」

何か訳ありの雰囲気を感じウマから降りて座っているウマ娘にハンスは近づいて行く

ハンス「…そこのお嬢さん、ここで何をしているんだい？」

??「!?あ、すいません!!少し疲れてここで座っていたのです…ごめんなさい!」

突然黒を基調とした軍服を着たパン屋の店員が海軍サーベルを腰に着けながら声をかけられたので座っていたウマ娘はハンスにビビる

ハンス「そんな謝らなくていい、単に君が座っていたから何かあったと思ってな…隣失礼するぞ」スツ…

色々と話を聞こうと帽子を取ってゆつたりと少し離れて隣に座る

ハンス「とりあえず、名前は何と言うんだ？」

クリーク「スーパークリークです」

ハンス「…Gro・er Kriege?」

クリークの名前にびっくりしてドイツ語で翻訳してしまった

クリーク「ええつと…すみません…ドイツ語は流石に分からないです…」

ハンス「すまん、ちよつと驚いてしまつて元の言葉を出してしまつた…で、どこまで

話した？」

クリーク「私の名前を名乗ったところですね」

ハンス「そうか：私の名前はハンス・ビナーだ」

クリーク「ハンスさんと言うのですね：えっと、失礼かと思いますがハンスさんはこの職員なのですか？」

恐る恐る聞くクリークの疑いはもっともだった、普通はスーツ姿が多いのにハンスだけ軍服を着ているので本当の職員なのか疑ってしまう

ハンス「まあ、服装があれだからな：一応この警備員兼パン屋をやっている者だ」
クリーク「お二つ持っているのですね」

ハンス「理事長と色々話してな：ここで、ウマ娘の安全とサポートをする事を条件に了承してくれたのさ：」

クリーク「理事長とお話しできるって、ハンスさんは一体何者なのですか？」

ハンス「フツ：二人の子供に必要なお節介をしている48歳ただの爺だよ：それで、何で疲れていたんだ？誰か探しているのか？私で良ければ話してくれないか？」

本題に戻り何で疲れてここに居るのかクリークに聞いてみる

クリーク「実は：」

競技場

ルドルフ「ふう…感謝するイヴァン先生」

イヴァン「呼び捨てで構わんぞい、それにしてもウマ娘は凄いなあ…ギルバーと同じ速度が出るとはそう思わんか軍曹？」

モシチ「ええ、彼女の言う通りでしたね…そう思いませんか英国人」チラツ：

イヴァン「え？」

遠くからカムともう一人猫を抱いているウマ娘が遠くから覗いていた事に気づいていたモシチはカムに声をかける。

カム「チツ、こつちに話題を振るんじゃねえよクソ爺が…」

イヴァン「え？いついたの？」

カム「お前らが併走が終わった時に居たよ」

モシチ「じゃあ、この勝負も見ていたのか」

カム「ああ、全部見てたよ…そこにいるルドルフの走りもな」

ルドルフ「君は…カム・ダアトだったかな？」

カム「ああ？何で俺の名前知ってんだよストーリーカーか？」

イヴァン「ブフツww」

モシチ「はあ…」

仮にも生徒会会長と言う立場であるルドルフにそんな言い方はどうなのかとモシチは頭を抱えイヴァンは笑う

ルドルフ「…一応君達11人の書類を見させてもらったから名前を憶えていたわけであつて決してストーカーではないMr. カムさん」

少し困つた顔をしながらも丁寧な言葉でストーカーではない事をカムに説明する

カム「ヒュ〜…女性の癖に英国紳士の様な立ち回りだな最高だ、後でスパムをやるよ」
ルドルフ「ありがたいが…こちらから一つ聞いていいかな？」

カム「何？」

ルドルフ「君とメジロアルダンの関係を知りたいのだからいいかな？」

カム「？ 別に？ ただ色々あつて一緒にいるだけだぞ？」

イヴァン「事情があつて一緒に…は!?まさか、ナンパして…」

カム「そうそうこの後ホテルに行つて僕のエクスカリバーを…つてあほか!!!未成年に手を出す暇があつたら酒でも飲んでるつての pasta 野郎と一緒にすんな」

モシチ「ノリツツコミが凄い」

アルダン「？ 僕のエクスカリバーって何ですか？」

カム「知らないほうが良いしこんなおっさん達の会話に入らないほうが一番いいぞお嬢さん」

後ろから興味を持ったアルダンが近づいて来るがカムはアルダンを止めて3人の会話を巻き込まないようにする

イヴァン「悲しいなあ、仲間外れは良くないと思うけどな」

カム「うるせえな老害その口を黙って閉じ（にやつ!!）ほぶっ!!」ドサツ!!
悪口を言っているとアルダンの肩に乗っていた猫がカムを殴って転ばせる

モシチ「あらら」

イヴァン「ブハツwwwwだっさwwww」

カム「この糞猫が…こr（フニヤ!!）うぎゃ!？」

倒れたカムに百連猫パンチをする猫の様子を皆傍観する

イヴァン「すごいなこの猫わしも欲しいのじゃけど」

モシチ「ここペット買うの禁止ですよ」

イヴァン「ええ? いいじゃん猫かわいいし…お嬢ちゃんもそう思うじゃろ?」

アルダン「ええ、もふもふ出来る犬とかもいいですよね」

イヴァン「わかるわあ…でさ本題じゃけど、何であいつと一緒にいたんじゃ?」

少し話しやすいように親近感ある話をしながら何故カムと一緒にいたのかアルダンに聞く

アルダン「ただ単に助けってもらって一緒に歩いていただけですよ」

イヴァン「あ、そうなの…やましい事されてない？」

アルダン「ええ全くそんなことはされていませんわ」

イヴァン「そうか…もつと詳しい事を聞きたい所だが…こんな場所じゃあ、あれだし一緒に食堂行かんか？」

広い競技場より落ち着いてゆつたりとお話が出来る食堂にイヴァンはアルダンを誘う

アルダン「構いませんが…今はわけあって手持ちがありません…」

イヴァン「構わん、丁度ルドルフに負けた罰を飯で済まそうと考えていたし金ならあるから安心せい」

アルダン「そこまで言うのでしたら、お断りするわけにはいきませんね」

イヴァン「うむ…もちろんルドルフとモシチも付いて行くじやろ？」

アルダンを食事に誘えたイヴァンはルドルフとモシチにも聞いてみる

ルドルフ「ああ、私もお腹が空いているからね…イヴァンさんの甘えに乗せてもらおう」

モシチ「私は、馬を戻しに行きますので…」

イヴァン「そうか、じゃあ任せるぞい」

モシチ「ええ、それでは…ピユイ!!
M o r s e , a !!
G i l b e r !!

モース「ヒーン！」パッカ！パッカ！

ギルバー「…」パカパカ…

遠くで芝を食っていたモースとギルバーがモシチに近づく

モシチ「よつと…それでは」

イヴァン「ほーい、馬にぶつ飛ばされないように気を付けるんじやぞ〜」

モシチ「わかっています、ハイヤー!!!」バシツ!!

モースに乗ったモシチはギルバーを連れてそのまま競技場を出て牧場に戻って行く

：

アルダン「本当に早いのですね…先ほど見てましたが近くで見てもたら迫力もありましたね」

イヴァン「馬って言うのはあんなもんじやからな…で、カムはどうする？来る？」

現在進行形で猫パンチをくらっている威厳が低下しているカムにイヴァンが聞く

カム「…行く」バシツバシツバシツバシツ!!

イヴァン「よろし！じゃあ、食堂に行くとするか！」

カムの返事をもらってイヴァンは皆を連れて食堂に向かうのだった…

教室

サラ「Alright, then the next page uh...」

偉大なる王はこう言いました私

”I have a thousand elite’s.”

How can I defeat this alone? ”

How did the brave answer next? ”

What’s this fucking problem You can answer anything like this...」

ある教室で英語をしゃべりながら授業をしているサラが黒板に英語を書きながら持っている教科書に文句を言っている隣で椅子に座ってくつろいでいるエグがサラにこう言う。

エグ「おいサラ〜? 一旦教科書から前の様子見てみ? 大変な事になってるよ〜」

何時も気楽なエグが自分に声をかけて前を見ると言われてみると…なあにこれえ?

サラ「…え? 何でもみんな頭から煙出して倒れているんですか?」

ドトウ「」プシュー

オペラオー「」プシュー

カワカミ「プシュー

ユキノビジン「プシュー

マヤノトツプガン「プシュー

頭から教室にいる生徒たちが皆頭から煙を出していた

サラ「い、一体何があつたんだ!？」

エグ「前見てみ」

サラ「え？」バツ：

何で前だ?と思ひながら見てみると：

サラ「：うわあ」

上下で動かせる二枚の黒板にびっしりと英語が書かれており文字通り隅から隅まで

書いていた：

エグ「いくら何でも、休憩なしにぶっ通しはキツイってそれ：」

サラ「でも、俺ら時これより5分の1じゃん」

エグ「いや、そうだけどき?いくら中学生にこれを一気にやるとか正気の沙汰じゃな

いと思うんだよ、うん」

サラ「ええ?そうかなあ?」

ハンス教官からこれの5倍を受けて来た僕にはこれ位何も問題ないはずだが、どうや

らエグは真面目にやめたほうが良いと言う

エグ「少なくとも休憩ぐらい入れような？な？」

サラ「わかったよ…じゃあ、皆さん少し休憩しましょうか…つてそもそも聞いてないか」

もはや気絶している子達に自分の言葉は届かないかと思つていと…

キーンコーンカーンコーンコーンカーンコーンコーン…

授業の時間が終わりお昼ご飯の時間になる

サラ「あれ？もうそんな時間ですか…じゃあ、皆さんしつかりと復習するように…じゃあ、食べに行きましょうかエグ」トントン…

エグ「ういゝ」ギツ…

教科書を持つて出て行くサラに手ぶらのエグはゆつたりと付いて行き食堂に向かう

オペラオー「ふ、ふふ…き、気絶している間の僕は、何と言う寝顔の美しさだろうか…こ、これはサラ君にか、感謝しない…と…」ドサツ…

ドトウ「あ、頭が痛いです…し、死んじやいますうゝ…」バタツ…

カワカミ「うゝ」うゝ…プ、プリンセスならばこ、これくらい余裕…」ガクツ…

マヤノトツプガン「」プシュゝ

ユキノビジン「こ、これが、外の世界の…授業…ちよつときまうけただけで気絶して

しまったペツ…」チーン…

教室内にいる生徒たちは30分後何とか回復するのだった…

三女神像

ハンス「ふむ…つまり託児所から預かっていた猫が、朝氣付いていたら消えたか？」

クリーク「はい…簡単に言えばですけど…」

三女神像で座って疲れていたクリークから色々と聞いた所どうやら

朝起きた時いつもなら隣で寝ていた猫がいつの間にか脱走して

慌てたクリークか急いで探すが見つからず疲れて一旦ここで

休憩していたみたいだ…

ハンス「ふむ…特徴は？」

クリーク「えつと…少し大きい猫で首に鈴が付いているんです…」

ハンス「ふむふむ…」スツ…カキカキ…

最近年で忘れそうになるので急いでSSの手帳でドイツ語で書き加える

ハンス「よし（パタン…）メモに記入したし手伝ってあげようと思ったが…もうこん

な時間か…」

手伝おうと思ってとりあえず腕時計を見たが気づいたらこんな時間になってしまっ

た全く…年は取りたくないものだ…

クリーク「もうお昼ごはんの時間ですね…あつ、お金持ってくるの忘れてしまいました…」

ハンス「おや、そうなのですか…クリークさん」

クリーク「あ、はい…何でしょうか？」

ハンス「一緒にお食事はどうですか？」

クリーク「え？いいのですか？」

ハンス「ああ、色々とまだ特徴なども聞きたいですしそれにここで出会ったのも、きつと何かの縁でしょう…食事も多ければ多い方が楽しいですからね」

まあ、単に一人で食べるのが少し寂しいのと託児所にちよつと興味があるから聞きたいだけなんだけどね

クリーク「そ、そうですね？なら少し甘えてもらいますね？」

ハンス「決まりですね…じゃあ、ここから少し遠いので足を呼ぶとしましょう…ピュイ!!ピス!!」

ピス「(・ω・)ノHi」

クリーク「わっ!!?お、大きい…」

遠くから勢いよく来たピスが二人の目の前で止まり目線をクリークに向ける

ハンス「ビス、お嬢さんを乗せるために低くなってくれないか？」

ビス「（：3）／＼」ガッテンシヨウチノスケ」スツ：

ハンスの命令通りにビスは伏せて乗りやすいようになる

ハンス「どうぞ、お乗りくださいお嬢様：」スツ：

クリーク「あ、ありがとうございます…よいしょつと…」

丁寧にクリークを支えて馬の背中に乗せる

ハンス「よし！立て！」

ビス「（・ω・）ノアイアイサーー」ムクツ！！

クリーク「うひゃ!？」

ハンス「おつと…大丈夫ですか？」

ビスが勢いよく立ち上がってしまい乗り慣れていないクリークが落ちそうになるが何とか支えて落ちないようにする

クリーク「ありがとうござい m（よつと）!!?？」

お礼を言おうとした途端突然クリークの後ろにハンスが乗る

ハンス「怪我が無くてよかった…それじゃあ一気に飛ばすぞ!!ハイヤツ!!」バシツ!!

ビス「（、ω、）オチナイヨウニオキオツケクダサーイ!!」パカラツ!!パカラツ!!

速く駆けていくビスにクリークは驚きながらも食堂に向かう…

おまけ

馬たちのヒミツ

桜のヒミツ 「最近馬房で藁を丁寧を集めて寝るのが趣味になった」

ヴィオのヒミツ 「実は走る事が嫌い」

ビスのヒミツ 「ハンスの作る飯が美味すぎて少しデブった」

ギルバーのヒミツ 「隣にいる桜が初めての友達」

ヴァルニーのヒミツ 「エグが最近べたべた触ってきてキモイと思ってる」

ローザンのヒミツ 「ご主人様だいしゆき」

オリオンのヒミツ 「最近サラと一緒に寝てくれなくて困っている」

モースのヒミツ 「パラムの作るエサが最近の楽しみ」

カロリーナのヒミツ 「ロアの事が気になる」

ロアのヒミツ 「カロリーナの事が気になる」

ボンのヒミツ 「他の馬より、自分にかまってほしい」

ラカールのヒミツ 「ウマ娘の事が少しだけ気になる」

第10話 フンギャロ!!

ワイワイ!!

ガヤガヤ!!

ハンス「…」カチャカチャ…パクツ…

ウマ娘達と教師たちが賑わっている場所、

トレセン学園の食堂にドイツ人の元軍人と母性を感じるウマ娘がいた

クリーク「…あのお」

ハンス「? どうしました?」

クリーク「…本当にもらってよかったですか?」ポテツ

完全にポテ腹になっているクリークの前には机いっぱい料理があった

ハンス「なに、これくらい若い子に腹一杯食わせられるならそれだけの価値はあるさ

…もしかして足りないのか?」

クリーク「いえいえ!ただこれだけ奢られると少しとどまってしまうと言うか…」

ハンス「ハハ!年寄りが少し余計なお世話しているだけさ!遠慮せず食べなさい!」

遠くから見れば親と子のように見える光景に尊さを感じていると…

島津「あれ？ハンスさんですか？」

ハンス「お！島津君か！君も食事に来たのかね？」

島津「ええ、これを食べようと席を探していましたね」カチャ：

手に持っているお盆にはホカホカのかつ丼大盛が乗っていた

島津「隣よろしいですか？」

ハンス「もちろん」

島津「では、失礼して：いただきます」ゴトツ：カチャ：

ハンスの隣に座りそのままいただきました島津は箸を持ってかつ丼を勢いよく食べる

クリーク「：お知合いですか？」

ハンス「ああ、彼は中等部の教員をしている島津 国馬だ」

島津「どうも」

ハンス「彼も我々と同じ馬を扱う人だよ」

クリーク「そうなのですか？」

島津「ごくん：ええ、私もハンスさんと同じように馬を扱えますよ：

ですか、自分はまだ未熟なところもあります：

ハンスさんやイヴァンさんのようにうまくは扱えません：

ハンス「謙遜だな、君の手腕は私の教え子たちと同じぐらいなのに」

島津「そう言ってくれると亡くなったお師匠が喜びます」

ハンス「私みたいな半端者で喜ぶならよかった…：そういえば、どうだね仕事の方は？」

島津「ボチボチですかね…：所々未来の技術に驚いてばかりでなかなか…」

ハンス「分かる…：分かるぞ」

私も理事長からもらった最新型のオーブンですぐに美味しいパンがすぐにできて驚いたぞ！」

島津「そういえばオーブンをもらった当時、寮で大声で喜んでいましたね…」

ハンス「いや…：美味しいパンがいっぱい作れると年甲斐もなく喜んでしまったな
〜」

クリーク「うふふ…：ハンスさんって少しお話しづらい方かと思いましたが全然違うのですね！」

ハンス「そうか？」

島津「私もそうですよ、初めて会った時の印象とは全く違いますからね…」

私も気軽に話しかけますよ」

物凄いニッコニコで喜んでいるハンスに二人は元々の印象とは違うと良い意味で感じていると…

バアアアアアン!!!

島津・ハンス・クリーク「「ん?」」

食堂の扉が勢いよく開いて中にいる全員が扉の方に注目すると一人の男が叫ぶ

カム「It's tea time!!!」

イヴァン「こいつ元氣じゃな」

ルドルフ「全くだ…君たちの仲間全員そうなのか?」

イヴァン「まあ、大体はそんな感じじゃよ」

アルダン「うふふ、流石ですね」

カム「え?何が?」

島津「カムさんとイヴァンさんですね…後ルドルフさんも…」

ハンス「だな…珍しく軍服を着ているないつもはスーツなのに…」

クリーク「…あのもしかしてあの二人も?」

見覚えのない外国人二人にもしかしてと島津とハンスに聞くと二人は丁寧に説明をした

ハンス「ああ、あの大きな剣を持った若造はイギリス人のカムだ…」

何故か私に対して憎悪を抱いている…」

島津「もう一人軍服を着てサーベルを持つているお爺さんはソ連人のイヴァンさん…
僕たち同期の中で一番年が高い人ですよ…確か69歳でしたね」

クリーク「69…え? そんなに老けているようには見えませんが…」

ハンス「まあ、血を浴びまくったんじゃないかな?」

クリーク「え…? 血?」

島津「確かに、一次大戦からずっと戦っていると聞いていますから

かなり血を浴びているかも知れませんか」

クリーク「一次大戦? 戦い?」

よくわからない単語に物騒な言葉がひよいひよいと出てくる事にクリークが困惑し
ていると…

猫「! ニヤツ!!」ぴょん!!

アルダン「わっ!」

突然アルダンが抱っこしていた猫が勢いよく飛び降りて走って行く

アルダン「あつ、待って」トテトテ…

走る猫を追いかけるアルダン…猫が走った先には…

猫「ニヤ!!!」ピョン!!

クリーク「わっ!」ガシッ!

島津「うわっ!」ガタツ!!

ハンス「おっと…」パシッ…

クリークに向けて飛び込んできたのでクリークはびっくりしながらもうまく捕まえ
島津はびっくりして机を揺らす

机が揺れたせいでコーヒーが落ちるがハンスの反射神経でキャッチ

そのままコーヒーを飲む

ハンス「もつたいないもつたいない…(ズズッ…)うん?

…その猫…君が探していた猫か?」ゴソゴソ…ペラッ

突然現れた猫、

その姿に手帳に書かれた特徴に一致していた

少し大きめで鈴がついた首輪…模様もクリークの証言と一致していた

クリークから探していた猫か聞いたが…

クリーク「キキちゃん!」

キキ「なあん♪」ぐりぐり…

ハンス「…うむ」パタン…

答える必要はないみたいだ

アルダン「あら?もしかして飼い主なのですか?」

クリーク「ええ…貴方が保護してくれたのですか？」

アルダン「いいえ私ではなく…」チラツ…

そういうながら、カムの方を向くと…

カム「…」トントン…

目の前のタッチパネルを押そうとするが何故か反応しない

カム「…チツ」トントントントントントン…

連打しても全く反応しない紅茶セットを押しても押しても全く反応しない

カム「…F u ○ K !!!」ドゴォ!!!

反応しないパネルにキレたカムはブン殴り機械をぶつ壊す

ジー…ピラツ…

そのせいか知らないが紅茶セットのチケットが出てくる

カム「よし」

ルドルフ「全くよしではないのだが？」

カム「俺がよしなら全部よしなんだよ」

イヴァン「独裁政治じゃん」

カム「独裁!?!おめえナチか!!」シャキンッ!!

イヴァン「前から何気に思ったけどお前結構めんどくせえな？」

アルダン「…彼が保護していたのです…よ？」

ハンス「疑問形なんだが？」

島津「まあ、あんな姿見たらなんでも疑問形ですよ…うん」

クリーク「怖い…」

カムの短気な性格に4人が困惑していると…

バアアアアアン!!!

サラ・エグ「E z 飯 r i z s だ r i s o !!」

またうるさいのが扉を勢いよく開けると後ろから二人の人とウマ娘がぞろぞろ入って来る

サン「めっちゃ張り切ってるなこの2人」

カール「そりゃあ、自分の国の飯が出てたら喜ぶと思うさ…サンの好きな…好きな物なんだ？」

サン

「肉マシマシポテトモリモリコーングリーンピース山盛りハンバーグ二つハンバーガー
セット定食」

カール「ジャンキー過ぎてフィンランドの冬を過ごしてもカロリー消費できなそう」

サン「こんなもんアメリカじゃあ普通だぞ? な?」チラツ:

グラスワンダー「:」↑アメリカ生まれ

エルコンドルパサー「:」↑アメリカ生まれ

後ろにいるアメリカ生まれのウマ娘に目を向けるが:

カール「:ほんと?」

グラスワンダー「え、えつと:」

エルコンドルパサー「多分サン先生が異常だと思いマース!」

アメリカ生まれの二人は否定をしながらサンを異常だと言う

サン「異常か? 軍に入った後でもこれくらい食うが:」

ハルウララ「へえ: いっぱい食べたからこんなに大きいのか?」

サン「ああ、ウララも飯をいっぱい食べれば食べるほど体が大きくなるぞー」

キング「:」ジー:

ハルウララ「本当!?! じゃあ今日はいっぱい食べようかな♪」↑140 cm

サン「H A H A H A!! あまり無理して食べたらいけないぞ」↑200 cm

キング「…」

サンとウララの慎重さを見ながらもウララがいっぱい食べて大きくなってしまったらと想像する

ハルウララ「見て見てキングちゃん!! ご飯いっぱい食べたらウララすごく大きくなつたよ!!」

→

身長200cm+ゴリゴリマッチョ

キング「…ウララさん」

ウララ「？」

キング「いつも通りに食べて健康管理した方がいいわよ」

ウララ「？ キングちゃんがそういうならそうするよ！」

何とかウララの肉体改造を阻止したキングへヒーローだった

イヴァン「なんじゃ、うるさい奴がまた来たかと思えばお主らか」モグモグ…

チーズバーガーを片手で食べていたイヴァンが後ろから来たサン達に気付く

サン「hello Ivan!」

そんなイヴァンに陽気に英語で挨拶をするサン

イヴァン「ロシア語でおK」

サン「アメリカ人にロシア語は言えないよイヴァン」

イヴァンのおふぎけにサンは普通に答える

イヴァン「あつ、そうじゃった」

サン「まあ、一応挨拶ぐらいはできるけどねダスビダ〜ニヤ〜」

イヴァン「それ、挨拶じゃなくて別れの言葉なんじゃが?」

さようならをロシア語で言うサンにイヴァンが突っ込みを入れる

サン「あれ? そうだっけ? H A H A H A! 教科書で覚えていたつもりだったけど間違

えたぜ★」

カム「ほんとヤンキーは能天気だよな: 頭スカスカなんじゃねえの?」

サンの謎のポジティブに紅茶セットを持っているカムは呆れる

サン「かもしれないな: そういえば、お前今日不審者を捕まえたんだってな?」

カム「おう、意外に腰抜けだったぞ」

サン「ハハ! なんでもリボルバーを突き付けたらしいな?」

やつぱりイギリス人は何考えてんのかわからねえな!」

カム「ふん、不審者は殺されても文句言えんからな……何ならあの場で撃ち殺せばよかつたな」

サンの言葉にカムが冗談を言うとかムはある事に気付く

カム「……そういえば、あのフィンランド人どこに行つたんだ？確かお前と一緒にだったよな？」

一緒にいたカールがどこにいるかサンに聞くと意外な答えが出る

サン「あいつ今サウナにいるぞ」

カム「……は？」

学園内新設サウナ室

このサウナ室はカールが密かに会長にサウナを作ってもらつた部屋だ

カール「んんん……まだまだ足りないかな？……もつとやります？」スツ……

そう言つて立ち上がつてアロマ水が入つた桶を持ちながら後ろにいるウマ娘に

温度と湿度を上げるか聞く

ナリタブライアン「…構わん」

ビワハヤヒデ「私もだ…」

タオル一枚でサウナの熱に耐えている二人はカールに構わんと答える

カール「ではではよっ!」スツ…バシヤア!!

ジュワアアアアアアアアアアアアアアア…

カール「うくん♪いい蒸気だ!さて…」スツ…

アロマの匂いが充満すると同時に水からの蒸気を一気に全身に受けたカールは

ケロリとしながら気分が高ぶっていると手にヴィヒタを持つ

ビワハヤヒデ「それは…ヴィヒタか」

カール「お?知っているのか?」

ビワハヤヒデ「もちろん、血行促進に筋肉や関節の痛みを和らげる効果があると聞

が…

間違いないかな?」

カール「正解!結構詳しいんだね?」

ビワハヤヒデ「フフツ…たまたま本で読んだだけさ…ブライアンも本とか読んだらど

うだい?」

ブライアン「…難しいのは嫌いだ」

カール「分かるゝ難しい本とか読むよりソ連人を殺した方が得だよねえゝ」
ビワハヤヒデ・ブライアン「「え？」」

カム「全く…あのフィンランド人は自由だな…」ススツ…

サンからカールの事聞いたカムは礼儀正しい姿勢で紅茶を飲んで呆れるカムと…

サン「俺たちより自由だよな！H A H A H A ☆」ゴクツゴクツ…げつぶ

椅子を斜めにしながらテーブルに足を乗せ瓶のコカ・コーラを飲んでゲラゲラ笑って
いた

イヴァン「人は見た目によらん」モグモグ…

ルドルフ「ああ、あんなに悪態をついていたMr.カムがあれ程作法が出ているとは
…

さすが紅茶の国イギリスだな」

イヴァン「じゃな…にしてもこのチーズバーガーという物うまいな…

祖国の黒パンとは天と地じゃな…」

遠くから紅茶を飲んでいゝるルドルフとチーズバーガーを片手に食べていゝるイヴァン

∴

サラ「そのパスタは僕の!!」

エグ「うるせえ!!ミートパスタは俺様のもんだ!!」

大皿に盛りを持っていゝるパスタを奪い合っている二人に∴

グラス「いただきます∴」

美味しそうな和食を食べようとするグラスの隣に∴

エル「むっふっふっ∴これにデスソースを入れれば∴あれ?」カスツ∴

料理にデスソースを入れようとすゝるがカスツて出ないのでノズルを見た瞬間

エル「?」どこか詰まって(ベシヤツ!!)∴うぎやあああああああッ!!!」バタ

バタバタ

目にデスソースがぶち当たり思いつきりデスソースの容器を握りながら大暴れした

せいか∴

エグ「!?急にどうs(ベシヤ∴)イッタイ目がアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアア」ジタバタ

サラ「!」エグ!!おちついk(ベシヤ∴)ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア」ドタバ

タ

ガシツシヤアアアアアンツツ!!!

グラス「…」

3人共暴れたせいで和食にデスソースがかかったり机がめちやくちやで座って黙つたグラスが次の瞬間

グラス「…」シユバツ!!!

エル「え? (ゴキヤ) ふぎゆ…」ドサツ…

グラス「…」バツ!!

エグ「ん? (キユツ…) グエツ…」バタン…

グラス「…」スツ…

サラ「目がアアアアアアア (ドツ…) (☒_ω☒) スヤア…」スツ…

グラス「ウフフ…」

たった数秒で暴れた3人を無力化する。

島津「早いですね」

ハンス「だな」

クリーク「あの…助けた方がいいのでは?」

ハンス「大丈夫あの二人ならどうせ5分後起き上がるから」

アルダン「本当に人間なのですか？」

ハンス「なあくに、私の訓練に全て耐えた子なんだこれくら常識の範囲内だ」

アルダン「一体どんなことを？」

ハンス「ハハハ!! Wenn Sie mehr h・ren, wird es an
das Lager gesendet!」

アルダン「？」

島津「聞かない方がいいってことですよアルダンさん」

アルダン「そうですか…」

ハンスの突然なドイツ語に混和するアルダンに島津は大雑把に訳して聞かない方がいいと説明する

島津「…前世で一体どんな事を？」

ハンス「フフフ…ただパンが好きで武装親衛隊隊員だよ…」

島津「…」パクパク

ハンスの優しい笑顔の裏に良くない物を感じた島津はそのまま深掘りせずかつ丼を食べる

島津「そういえば、レイさんは？今日の朝からどこにも顔を見えてないんですが…」

ハンス「ああ、彼なら…」

トレセン学園屋上

レイ「フンフン♪」カチャカチャ…

楽しそうに大きいパエリアを作っているレイと…

ゴールドシチー「…なんでこんな所でパエリア作ってるの？」

「たまたま屋上で休んでいたゴールドシチーがいた

レイ「え？そりや、故郷の味を堪能したいから作っているんだよ…あ、食べたい？」

シチー「…べつn(ぐうぐう…)…少しだけ」

レイ「よしっ！それなら、肉も作ろう！せっかくならお腹タプタプになるまで食わせてやるよ！」

シチー「はあ？なんでそこまですんの？」

レイ「特に理由はない！とりあえずできたてのパエリア食べ！」スツ

出来立てのパエリアを皿に入れてシチーに渡す

シチー「はあ…また変なのに絡まれた…(パクツ…)美味しい…」

レイ「まだまだあるぞ〜どんどん食べなさい〜」
ニコニコにパエリアとお肉を焼くレイとそれを堪能するゴールドシチーだった…

第11話 スペインの太陽で育った人が作ったパエリアをどうぞ

トレセン学園屋上

レイ「もむもむもむもむ、うーん Delicious」

ゴールドシチー「はむっ！あむっ！モグモグ…」

レイの作った、豚と鶏肉を串焼きにしたスペイン料理ピンチョ・モルノがあまりにも美味しいのか

ゴールドシチーは何本も何本も頬張って食べていた

レイ「おいしい、se・o・ri・ta? そんなに早く食べてると喉が…（ムグツ!?）ンンン!!!）あらら…」

言わんこつちやない…はいお水

ゴールドシチー「ンムツ、ンムツ…プハア…」

レイ「落ち着いたか？」

ゴールドシチー「…うん…ちよつとがつつき過ぎた…」

レイ「ちよつと…？」チラツ…

ちよつとという割には空になったパエリアの鍋2つと大量の串と空になった皿が大量に目の前に

置かれている…これがちよつと？マジ？

レイ「ウマ娘つてこんなに食うもんなんだな…」

ゴルドシチー「い、いつもならこんなに食わないし…たまたまだから…」

レイ「え？なんだ？最近満足に食べれてないのか？」

ゴルドシチー「そんなわけ…」ぐうぐう…

レイ「まだ腹減つてんの!？」

ゴルドシチー「へ、減つてな（ぐうぐう…）…／／／」

レイ「んもぐ…しようがないな（ゴソゴソ…）ほい」スツ…

お腹が何度も鳴るゴルドシチーにレイは、カバンから何かを包んでいる紙を渡す

ゴルドシチー「…何これ？」

レイ「開けたらわかるぞ！」

ゴルドシチー「…（ガサガサツ…）これは…チュロス？」

レイ「む？ここではチュロじゃなくてチュロスというのか？」

ゴルドシチー「そうだけど…なんかこれ曲がつてない？」

袋から出してみれば3本のチュロスは曲がつている

レイ「？故郷じゃそれが普通だぞ？それよりどうだ？いい匂いしないか？」

ゴールドシチー「…いい匂い」

レイ「だろ？ほれほれ、一口食べてみ？飛ぶぞ？」

ゴールドシチー「何が飛ぶの？…あーん」

レイの言葉に困惑しながらも香ばしいにチュロスにゴールドシチーは一口入れる

ゴールドシチー「…!!!」

レイ「どうだ？うまいか？飛んだか？」

ゴールドシチー「美味しい…飛びはしないけど」

レイ「ええ？俺と同じスペイン人なら飛ぶはずなんだけどなあ？」

ゴールドシチー「私日本人なんだけど？」

レイ「え？」

ゴールドシチー「え？」

ゴールドシチーの言葉を聞いてレイは恐る恐る髪の毛の事を聞く

レイ「…その金髪地毛？」

ゴールドシチー「そうだけど」

レイ「…こいつはたまげた…一度日本に来たときは君みたいな金髪美少女なんていな

かったぞ…」

ゴールドシチー「…新手のナンパ？」

金髪美少女というレイにゴールドシチーはナンパをしているのかと聞くがレイはこう答える

レイ「事実を言ったままでさ」

ゴールドシチー「ふーん…：ていうか、一度日本に来たって言うけど…：あんた日本人じゃないの？」

レイ「え、なんで？」

ゴールドシチー「いやだって、日本語滅茶苦茶流暢じゃん？」

レイ「あ…：ボク、ニホンジンじゃない、スペインジンダヨ」

ゴールドシチー「カタコトで外国人ぶっても駄目だよ」

レイ「くっ…：スペイン語話せば何とか外国人認定されると思ったが…」

ゴールドシチー「いや、もう色々遅いよ」

レイ「ちえ…：あ、そういえば思ったんだけどさ」

ゴールドシチー「何？」

レイ「何故こんな所で一人でいたんだ？友だち居ないの？ボツチ？」

ゴールドシチー「…：少し色々あつてね…：ちよつと一人になりたくつて…：」

レイ「あら、じゃあわたくしお邪魔だったり？」

ゴールドシチー「そうかもね」

レイ「あらやだ、わたくし金髪の美少女に邪魔者扱いされちゃったわくしくしく」
言葉で言ってる割には、全く悲しそうな素振りもしてないので、ゴールドシチーは笑う

ゴールドシチー「あはは、言っている割には全然悲しくなさそうじゃん！」

レイ「ありや、バレちったか〜……ハッハッハッ！！」

ゴールドシチー「ふふっ……」

出会ったときとは違ってゴールドシチーに自然の笑みが出てくる

するとそこに

ガチャ！！

レイ「お？」

「シチー！！テメエ何でここに居んだよ！」

ゴールドシチー「マネージャー……」

レイ「マネージャー？」

スーツ姿でメガネを掛けた男性が突然現れる

「今日は大事な撮影があると昨日言ったよなあ！！！！何ここでぐーたらしてんだ！？アア！！」

ゴールドシチー「…」ペタン…

レイ「モグモグ（耳を後ろに倒しているな…）」

飯を食べながらでも、怒鳴られているゴールドシチーを冷静に見る

「何黙ってんだよ、誰のおかげでここまで有名になれたんだと思ってるだ…さっさと来い!!くそアマ!!」ガッ!!

ゴールドシチー「!!」ビクッ!!

男性が力強くゴールドシチーの手首を握った瞬間

レイ「おoyeい」カシャ!!!

「!？」

ゴールドシチー「ッ!？」

腰に掛けていたサーベルを抜き、男性の目の前に刃を出す

「な、なな…」

レイ「No レtie デnes に res 対peto す por る una 礼 dama 儀, が hijo な de な puta ぞ」

「お、お前誰に向かって刃物を出しているんだ!!」

レイ「失敬、私の友に手荒な真似をしているので、サーベルを抜かせてもらった」

「友だと…シチー…お前、こんなわけのわからん危険な奴と絡んでいたのか!!」グググッ

…

ゴールドシチー「痛つ…違う!この人は危険な人じゃ…」

「黙れ!!このことは社長にほうく(おい) ヒツ?!」

力強く握る男性にレイは殺意を出す

レイ「彼女が痛がつているだろ…離れろ」

「う、う、うわああああああああああ」ガチャ、バタン!!!

レイの殺意で殺されると思ったのか男性は、そのまま逃げていく

レイ「…ふう…やっぱり、戦争で濡れた血は隠せんか…」カチャン…

今は、職員をやっているとはいえ、元は内戦を経験しているスペイン陸軍の騎兵…当然人を殺す殺意など簡単に出せる

ゴールドシチー「…」

レイ「…怖い思いをして申し訳ない…おっと、そういえば自己紹介がまだだったな…

私はスペイン陸軍騎兵隊テリエル守備隊長

マルクト家の貴族5代目当主…レイ・マルクトだ

ゴールドシチー「貴族???5代目当主???え???」

初めて会った時からのおんびりため口で話していた人が、まさかの貴族の当主にゴールドシチーは驚きが隠せない

レイ「これは迷惑料と…何かあつた時ここに来なさい」ガサツ…

ゴールドシチー「え…」

驚くシチーに白い紙袋を渡す

レイ「じゃあ、またどこかで…さよなら a d i s

そういつて、レイは去つて行く

ゴールドシチー「…」カサツ…ガサガサ…

紙袋を開けて中を見ると…

ゴールドシチー「チュロス…」

大量のチュロスと…住所が書かれていた

ゴールドシチー「…職員寮の最上階」

部屋番も細かく書いており、さらに…

ゴールドシチー「…」チャリ…

鍵もついていた

ゴールドシチー「マジで??？」

少し話ただけで、ここまでするレイにゴールドシチーは驚くのだつた…

トレセン学園

馬小屋

パラム「うんしょ…うんしょ…」ガサガサ…

廃墟になっていた牛小屋を11人で魔改造し内装と敷地を大幅に変えた馬小屋で、山盛りになっているかいばを運んでいるフランス人がいた

桜「じー…」

パラム「あ、桜ちゃん！ちよつと待ってねー…はい！美味しいかいばだよ！」

桜「ヒン♪」もしやもしや

パラム「フフツ♪」ナデナデ…

美味しく食べる桜を優しくなでていると…

モシチ「見た目の割には、パワーがありますな」トスツ…

パラム「あ！モシチさん！こんにちは！」

ギルバーとモースを連れてきたモシチが、パラムの前で降りる

モシチ「こんにちは…今日は、お世話だけで？」

パラム「ええ、今日は授業はありませんから朝からお世話を…」

モシチ「そうですか…私も今日は予定がありませんし、代わりに私がやりましょうか？」カタン…

パラム「ええ!?そんな、悪いですよ!!」

モシチ「いやいや…18の子は、元気に外で遊ぶべきですよ」

パラム「外ですか?…うーん……」

外で遊ぶ…貴族のお嬢様として、戦場の戦士として、育てられた彼女は遊ぶ事が分からない

パラム「…どうやって、遊ぶのでしょうか？」

モシチ「外で遊んだことが無いのですか？」

パラム「ええ…あまり…いつもは愛馬と戯れていたの…」

モシチ「…なら、散歩などはいかがかな？」

パラム「散歩…」

モシチ「ええ、もしかしたら何か出会いがあるかもしれない」

パラム「出会い…お友達が作れるんですか!!」

モシチ「ええ、できますよ」

パラム「わーい!!お友達だ!!ついに私にもお友達ができるんだ!!」ぴよんぴよん!!

今まで、友達を作ったことのないパラムにとって、友達が作れるのは憧れだったのだ

モシチ「さあ、着替えて散歩に行きなさい…この世話は、私がやっておくから」

パラム「はい!ありがとうございます!」タタタタ…

馬達の世話をモシチに任せたパラムは、走って馬小屋から出ていく

モシチ「元気な子だな…」カチャ…

パラムを見届けたモシチは、ギルバーを馬房に入れ、モースも馬房に入れる

モース「ブルル…」グイグイッ

頭を撫でて欲しいのか、モースがモシチに顔を寄せる

モシチ「D o b r e d z i e c k o…」ナデナデ…

モースの甘えにモシチは優しく撫でる

モース「ブルル♪」

モシチ「…」ナデナデ…

優しく撫でられてうれいいのか、表情が、とてもにこやかだ

モシチ「…」ナデナデ…

ガサツ!!!

「!?!」

モシチ「何奴」カチャ…

干し草を踏む音が聞こえ、不審者が入って来たと察知したモシチが懐から、ナガンリ
ボルバーを取り出す

「ヒイ!?!、(ぎゅぎゅ)ごめんなさいいいい!?!?」

モシチ「…」君は……ライスシャワーだったかな

振り返れば、小柄で華奢な馬娘ライスシャワーがいた。

ライスシャワー「そ、そそそうです!!!」

モシチ「ふむ…おっと、失礼銃を向けっぱなしだったな」スツ…

敵ではない事にモシチは銃をしまう

モシチ「…して、ここに何か用ですかな？」

ライスシャワー「あ、あの…探し物を…」

モシチ「探し物…むむ」

探し物に馬小屋に来たライスシャワーをよく見ると、特徴な青いバラが付いた帽子が無かった

モシチ「…帽子を探しに来たのかな？」

ライスシャワー「は、はい…いつの間にか帽子が無くなって…いろんな所を探して…」

モシチ「ふむ」

優しく話しかけるモシチにライスシャワーはここまでの経緯を話す

ライスシャワー「そ、それで、もしかしたらここにあるかもしれないと思ってここに…」

モシチ「そうか…とは言え、ここに帽子なんて…（ツンツン）ん？」

後ろからツンツンされ後ろを振り向くと

桜「ヒン」スツ…

モシチ「え」ポフツ…

桜が帽子を啜えており、モシチの手に帽子を渡す

モシチ「…」

桜「ヒン！」ズイツ！

まるで、無くさない為に持っていたんだよ！褒めて！と言わんばかりに顔を寄せる

モシチ「…まあ、なんだ…よくやった」ポフツ

桜「ヒン！」ニコニコ

まさか国馬の愛馬、桜がライスシャワーの帽子を持つているとは思わず面を食らう

モシチ「…」

ライスシャワー「あ、あの…」

モシチ「ああ、すまないね、はいどうぞ」スツ…

ポフツ…

ライスシャワー「ん…」

ライスシャワーに帽子を優しく被せる

モシチ「次は無くさないようにするんだぞ？お姫様」

ライスシャワー「！うん！ありがとう！おじさま！」トテトテ…

モシチ「…（なんかさつきより喜んでたな…良い事でもあったのかな？）」

帽子をモシチに被せてもらったライスシャワーはニコニコ喜んで帰って行く

モシチ「…ま、いいか」ガサツ…

喜んでいるライスシャワーを特に気にせず、かいばを持ってウマたちに分けて作業を

再開する…

トレセン学園

道場

島津「…」

道着を着ている島津が道場の真ん中で正座し、目をつむっていた

島津「…」

目の前には人体サイズの藁の束が二つ並べてある

ダイワスカーレット「うーん…」ジー…

そんな静かな空間に入り口の扉の隙間からダイワスカーレットが覗いていた

ダイワスカーレット「どうしよう…」ガサツ…

どうやらプリントを島津に渡しに来たみたいだが…入りずらいみたいだ

ダイワスカーレット「うーん…」

どうすればいいか悩んでいると…

島津「ツ!!!」カチャ!!!

イヴァン「Привет★^{やあ}」

後ろから声がすると思えばスーツ姿のイヴァンが、いつの間にか後ろにいた
ダイワスカーレット「ど、どうしてここに？」

イヴァン「いやー、暇だからぶらぶら歩いていたら、

たまたまダイワハウスちゃんが（ダイワハウス？）何か見ているもんだから、何か卑
しい物があるかと

わしも見て見れば…まさか、島津が刀を握っておるとはのお…」

実は島津の刀を抜くのを初めて見たイヴァンはじつと見ていると…

島津「この刀は見世物ではございませぬイヴァン殿…」クルクル…キユ…

肅々と刀を紐で縛って抜けない様に処置をしながらも、

隙間から見ているイヴァンに振り返らず話しかける

イヴァン「おやおや、バレておったか」ガタンツ…

バレているなら隠れる必要もないと判断したイヴァンは、襖を開ける

島津「ダイワスカーレットさんが、隙間で覗いていた時から気付いておりましたよ」

ダイワスカーレット「え!? 気付いていたのですか!？」

島津「ええ、扉の前で独り言が聞こえましたのでね…」

ダイワスカーレット「うっ…／／」

まさか独り言を聞かれているとは思わなかったのか、スカーレットの頬が赤く染まる
イヴァン「うわゝ、乙女にそんな事言うなんて…引くわゝ超引くわゝ」

まるで乙女の味方と言わんばかりにおちやらけて言うイヴァン

島津「む…確かに…女性に対して言う事ではありませんでしたね…申し訳ありません」スツ…

おちやらけて言うイヴァンの言葉を真に受ける島津は、丁寧な頭を下げる

ダイワスカーレット「そ、そんな！顔を上げてください！島津先生！元々は私がしつかりしなかつたせいでは…」

島津「…いいえ…私が気付けばよかつたことです…それよりも、私に何か御用で？」

ダイワスカーレット「あ！そうだった！島津先生…これ」スツ…

島津「これは…選抜レースの書類ですか」

ダイワスカーレット「はい！来週の日曜日に行われる選抜レースに出たいので、この書類を」

島津「…分かりました、後ほど処理いたしましょう」

ダイワスカーレット「ありがとうございます！それでは、失礼しました！」タタタ…書類を渡したダイワスカーレットは道場から出て行く

イヴァン「元氣な子じやな」

島津「……」

イヴァン「おおん？どうした？元気ないぞ？ED？」

ナチュラルにやばい事を言うイヴァンに島津はスルーしながら言う

島津「違います…ただ」

イヴァン「ただ？」

島津「彼女私を嫌っているのでしょうか？」

イヴァン「…何故そう思ったん？」

島津「…彼女、私に対して何か隠しているような…」

イヴァン「カア…これじゃから最近の若者は」

島津の言葉にイヴァンは額に手を当てる

島津「え」

イヴァン「そんなん、ただ猫被っているだけじゃろ？気にしすぎ」

島津「そうでしょか、イヴァン殿」

イヴァン「はいはい、殿とか付けない、イヴァンかケテルでええから」

堅苦しい事が嫌いなイヴァンは島津に呼び捨てで呼ぶように言う

島津「…分かりました…して、イヴァンあなたは何しにここへ？仕事はもう終わりましたか？」

イヴァン 「ああ、仕事はもう終わっておるワイ……だが、ここに来たのは別の用じゃ」

島津 「？」

イヴァン 「島津よ」

島津 「はい」

ウマ娘のトレーナーになれ

島津 「……」

あ？

おまけ

レイの担当ウマ娘1

ゴールドシチー